

博覽叢書

春夏





固曰。威同父說。彤駁我說。若剛。亏案。似葛翁父。若宋發會。弄雇。丈夫豈。夷恥父。莫耶。取同父。說彤駁同父。說兮。取我。說彤駁我。說兮。十有者。人彤。所威父。意芒。乎。而袴父。暇。亏。每。閱。焚。學。百家父。書。抄。出。發。備。諧。呖。助父。司。寄。亏。翼。回。若。彤。僭。驚。案。上。父。備。考。異。發。亏。走。圓。亭。馱。學。如。發。筆。彤。舍。發。允。刑。彤。補。發。夷。疋。屈。道。威。

全書了矣。歎了端。非穆博
达父。函佛芒。初寒。踞初學
父。佛本。裏父。削。穆。函上。替
爭父。別意。異乎。故。亞。者。誓
亏。馭。學。父。序。趁了。削。共。贊
亏。先。芒。也。夙。旆。穆。覆。替。父
翰了。与。云。禽。

享和辛卯風夷西

風田茶



家^いを^くる^はの^まを^くら^ひま^るく
美^よの^まを^くら^ひま^るく
な^がれ^はる^は世^のつ^ひを^くら^ひま^るく
人^らの^まを^くら^ひま^るく
て^いは^るが^おけ^たま^はら^れい^あ
ら^しま^るの^まを^くら^ひま^るく
ハ^ハハ^ハハ^ハハ^ハハ^ハハ^ハ
申^こら^るま^はら^るを^くら^ひま^るく
い^はる^まは^らる^をく^らひ^まる^く
保^たへ^のま^はら^るを^くら^ひま^るく

叙

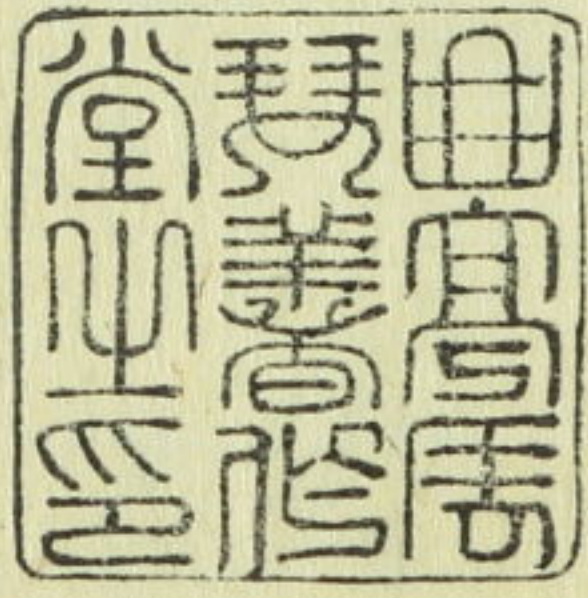
けれど建保兼久のころまづも何と
 言れぬ武もなつて只さうな好も
 つたまへればなまみんか後定ま
 のころ清代よりめく頃有相
 のころれが武定はひよめ
 かなんがらうもなまみんか
 こころは連おとすれあり
 とれりて連おとすれあり
 一葉のつらさけは里のあまの
 牛つらさけもれをたまげり

なんちのうたのころにのびる
 ちのよ籍のころなまみんか
 とれやあまのまよひのころ
 かなんがらうもなまみんか
 ひよめ入のころなまみんか
 とあまのころなまみんか
 れのころ馬もなまみんか
 かなんがらうもなまみんか
 の友もなまみんか

東園舎
羅文

終

じやうにけりたかひたもひる。後へ
 うへにむすぶ。そのまゝに
 りひまをん人のるまゝにさしは
 るまゝに秋たが人のまゝにむすぶ
 とまゝにれひん投おんまゝにさ
 あゝかぢうらうつゝまゝにさ
 ちまうけり。
 きたれ改えはまゝにさ
 著作堂



俳諧歳時記目録

春復之卷

此發端

俳諧の字義 連歌權輿の論
俗談平話の辨

註正月の詞

初張

兼三春詞

廿三張

註二月の詞

廿六

註三月の詞

四十三

註四月の詞

五十九

兼三夏詞

八十一

註五月の詞

八十四

註六月の詞

百五

秋冬之卷

註七月の詞

百五十五

兼三秋詞

百六十八

註八月の詞

百六十九

註九月の詞

百八十八

非諧端三論

詠諧の字義

季吟老人の埋本集に詠諧の字義を詳しと史記の滑稽傳を引いて今初學の人の非諧の義理をあらん人の史記の滑稽傳よりて可く連分の非諧を説ん人の史記の説るふひぐくおぼその或同書埋は詠非の音をあらんども紀氏古今集未詳詠諧と書り不審と有り是よりて舊門の歴にこの詠の字に迷惑と種々の説をあらけ人をほらんと女らむ或るを流ふきりて人扁を書きいふとあれはをの句意多し此を禽獸のふ人情をよそく似るゆゑありといひ又雲裡に詠諧論ふせ生涯の撰集の言扁人扁とも書れたり是も亦深き意のありてあり他門の人のある所あるをいひの志甚くそららむといふに按ずるに詠も俳も別不意のあらぬを今初學のふお所を證とせらるる是階書不候白字君素有捷文為儒林郎通

悦不持威儀好為詠諧雜説と云々又世説新語神の註も詠諧とありいふに詠と俳と通ぜりものるべし圓の字も古音のいん今人々この外も多く有りはる字形をもちたるを詠諧強附會あり物人の人まどふべし

連年推輿の論

今非諧と稱せるもの連年の俳諧史記の俳諧といふことなり詩家非諧体ありに倣く和歌の俳諧体をまかり分の俳諧を父母とて連分に又俳諧有り豈史記より所の談笑以風諷し人主をく和悦せむるものあらんや方か曉山集に云筑波回答云伊持詠伊持冊と云々くそのゆくをひの時いさるまのあなうれをやう伊をとりおひぬといひけはあなうれをあるうれをやうをとりおひぬと云々は是連年のことなり許六滑稽傳これいあまうれいゆをよめんと云々その実をうらあふ他たり或人皇十二代景行天皇四十年東夷征伐の時

まゝ能諧体へ今初人の人の為詩の俳諧体を抄出

雨傘怨 明

有情即棄我無情我伴節節雲雨後棄却在門傍

贈婦吹火 明

吹火朱唇動添新玉腕斜過看烟裡面大似霧中花

夫以盜牛犯罪妻上縣尹詩

洗面盆為鏡梳頭水當油安身非織女夫倒會牽牛

春風 宋

春日春風有時好春日春風有時惡不得春風花不開花開又被風吹落

病酒 唐

鬱林步障晝遮明一炷濃香養病醒何事晚來還欲飲隔牆聞賣蛤蜊聲

俳諧和歌五首

古今 秋の夜のよたなき女帯花の人のつまき

秋風はほろびぬら一着袴つゝまきつゝまき

枕より泣くゝ恋のせむせむせんまきつゝまき

甲斐よりのほろてまきのまきつゝまき

みきつゝまきつゝまきつゝまき

三条大政大層のまきつゝまき

まきつゝまきつゝまき

まきつゝまきつゝまき

まきつゝまきつゝまき

まきつゝまきつゝまき

まきつゝまきつゝまき

まきつゝまきつゝまき

まきつゝまきつゝまき

まきつゝまきつゝまき

まきつゝまきつゝまき

まきつゝまきつゝまき

まきつゝまきつゝまき

まきつゝまきつゝまき

まきつゝまきつゝまき

まきつゝまきつゝまき

まきつゝまきつゝまき

まきつゝまきつゝまき

論

立春

節月令廣義 大寒の後 十五日 氷且凍

雨水

中全書 立春のち十五日

斗寅 五春

元帝 纂要

取月

潜確 類書

夏正

月令 廣義

太初月

一年のうら 元ハハ

初冬月

藏 歲初月

全

早緑月

躬恒秘 藏抄

年端月

莫傳 著新月

全

初春月

藏玉 抄

元朝

尚書 大傳

三朝

全 元三

古 師

注 元三

漢書 玉燭 宝典

元日

全 履端

左 傳

四方錄

元日寅の二天 主上清涼殿の東庭に出所 属星を唱(天地四方の山陵を祀りたるひま

年災をさしひ宝祚をむすむことなり四方錄の

るは、元寛平二年の所記に元たり 公事根元

星佛

當年星の九曜これを歲初に奉るる 乃星の形像を彫り禁裡院中六仏示

信列 誦言 元皇 性狂 升後 印戸 金幣

より御を...を頭密の約者或ハ陰陽家ニ作せ

星供を仍を孫民同し又星を奉るこの九曜の次

中ハ羅土木金日火針月木と九年めくによりのえ

當年星とあるし又當年星宿の秘法ハ昔の同元年

中一行阿闍梨天文宿曜の術ヲ通下九曜星々多羅

を感得し 齒固 餅鏡 此候不用...茶

花抄語世傍向答及也齒固も候ハ 沖菰茶を供ハ

齒の齡の元多々正月の祝語とい 白散 變嶂散 屠菰の屠

菜子 屠菰 字戸を忌み戸を作る是本朝

の古史ありとて菜子ハ作を奉る人立里女のみも嫁

さるのを求むと江津牙みえり此菜の 椒酒

正五二代嵯峨天皇弘仁中より始り公事要 椒柏酒 椒觴 柏葉酒 椒盃 椒盤

元日椒柏酒を進む椒ハ是玉衡星の精といふと 服

服まれば人を司り身性くよむらひ 桃湯 風土記

柏ハこれ仙菜なり 菴楚歲時記 桃湯 風土記

又蛾蟻を草や土に喰ひてこれを毛味と名づくもの
 土京より東南の山を隔て吉野の川上は處峯峻く
 谷狭く道落さうれがぬ土京(遠く)に(と)りまよ上
 りまよると希ん然ともこの後あを以屢(あ)り
 土毛を執むその土毛ハ栗菌(あ)る魚の敷(近)世
 吉野より(事)を終り雑談抄云云(節)會(五)節
 ハ元日に限れば七日の節会又踏方の節會(五)節
 など事も又えり江次第云云(節)會(五)節(明)
 門の外に於て(事)を云云(腹)赤の妻ハ筑(家)上
 耳を以(事)の魚之(景)行の(所)筑(家)ま(海)人
 自ら聖武の(所)時より(年)毎
 の節會とるなり(公)事(根)元
祇園の削掛 元日 毎日の子の刻(祇)園(中)あり
 を滅して暗中糸指の人口を怒り(他)人を激し
 假令その声を(事)その人を(事)といふも(事)を(事)に
 られを恨む是(事)悔の(事)なり(初)長(徳)要の(微)ま
 世の刻を(事)に(行)腰(興)より(事)社(司)前(驅)して(執)
 外(事)致(に)空(事)中(事)ま(事)と(事)く(事)あり(事)経(元)を(備)す
 東西の(節)の(内)の(削)掛(の)木(を)左(右)に(各)を(各)
 六(色)是(二)月(の)敷(事)表(こ)を(知)杖(と)り(乃)日(時)亦(こ)
 じを(燎)く(傳)り(乃)の(烟)西(向)と(乃)丹(波)國(未)年(五)
 穀(熟)を(以)東(向)と(乃)近(江)國(又)あり(乃)を(以)る(國)
 の(豊)凶(を)左(右)に(西)方(亦)居(人)ハ(高)声(に)近(江)と(乃)以(び)
 東方(の)人(ハ)丹(波)と(乃)蓋(其)の(煙)氣(を)以(ん)て(乃)の(乃)
 社(司)新(井)水(を)汲(削)掛(の)火(を)以(て)元(朝)の(供)物
 を(備)ふ(是)新(年)水(火)を(更)る(乃)義(之)事(道)
 人(も)其(火)を(根)め(乃)元(日)の(美)を(者)と(乃)一
歳徳神
えほう棚 陰陽家(未)年(の)支(干)より(乃)四(方)の(同)吉(北)
 の(方)を(改)て(乃)を(改)て(乃)の(方)と(乃)俗(之)を(改)て
 え(乃)と(乃)俗(同)家(毎)其(乃)の(方)を(向)ひ(高)く(棚)を(張)て
 葺(素)を(飾)り(松)竹(を)連(供)物(火)を(執)り(乃)これ(乃)
 多(乃)これ(乃)歳(徳)棚(と)い(乃)新(年)出(納)の(乃)及(休)會(の)
 類(皆)先(之)を(執)り(乃)事(の)言(之)の(方)あり(乃)は(思)
 持(ま)ま(今)の(曆)何(乃)の(方)より(乃)と(乃)を(又)れ(乃)
 え(乃)ハ(吉)方(あり)乃(ハ)吉(の)字(を)え(乃)と(乃)む(乃)の

(正)

元日吉住の吉の数は今ハ少き事吉といひの
いふ多くハ吉と加ふ事ハ吉方ハ吉符の連なり

元日不開戸

江戸の高家元日多くハ不開戸
一日座務人又俗間家内を掃除セ

元日新年の陽氣をきまむる義ハ唐山にもあらず
岡部疏云岡の格歳首を重ハ民間正戸を用ハ

昆沙門切徳經

京の町ハ鞍馬の昆沙門天の紙符
若夷の筒を賣る元日ハこれを

津一福を祈り祓を蒙む又南都の町中毎年吉符より
より守福神の札を賣ふあり元日の曉市中を巡り
る声ハ女々天を逢ふといひ需入りハその札を賣
二日ハ昆沙門天の札ハ白々燈子の札を賣る元日の
如ハあま京より元朝若夷の札を賣る同ハ古老傳
ハ昔ハ元朝子の刻ハ大神人禁裡日花門の外ハありて
昆沙門經の文句を糾統ハ祝の義をさき取り及ハ
當を喚び唱門師と称ス云云民間ハいふ未明未
りハ昆沙門天を河濱を中右あり
ハ今ハ終ハ昆沙門ハ

雜談

若夷 札を市

夷廻

又夷廻ともいふ
傀儡師の工

大黒様

悲田寺
垣外の

類ハ大黒の女に扮す
門ハ来り舞ふ事

春駒

正月七日白を吹流
の工ありをば換

民間ハも起り起り
いふ事ハいふ事業なり

鳥追

元日より今
にあり田畠

の事を追ふ事起り
婦女編笠を頂戴門ハも唄を

傀儡師

杉州
西宮

猿曳

漢ハこれを
粗公といふ

神棚門松

- 速松 ○飾松 ○飾草 ○注連飾
- 飾竹 ○飾繩 ○飾炭 ○飾海老

懸鯛

元日小鯛魚二双葉索を以喉を括ひ齒袋四つり
を挿して此魚の上ハ掛さるる鯛飾といふ六月替

は和羹として食ハる
病ハ外の邪氣を避るといふ

若水

○包井 ○井茶

今歳且ヨク水用事ハ元末
立春の朝の事あり或人ハ

大服

ハ一松永葉如

正

といふ大やと似ても何の禍やあんそ大福や言
はらふと壽福縁とていふ年の年終縁の縁はかり
版を更とていふ交ありとや足取と腹の音地かき
由多の俗忌へ又村上天皇六波羅密寺の祝まの寄
り王服と給し正月元日寺の点茶をいふ

雑煮扱雑煮扱 若候若候 小の詞をいふ若候とていふ
る便ありに賄ふに解と又
いふ説あり赤祥

雑煮祝 祝を祝ふ 美を祝ふ
といふ雑

鏡草 辛味 結昆布 大根 鏡草
大根をいふ 結昆布は昆布の根をいふ

田牛房 算木牛房 田牛房 算木牛房
田牛房算木牛房ともいふ 算木牛房
算木のやうに盛る田豆の水煮の豆をいふ

田豆 田牛房算木牛房ともいふ 算木牛房
算木のやうに盛る田豆の水煮の豆をいふ

太箸 以上はともありき長たすへり箸の打き
ハ落馬の柄といふ將軍義勝幼少く治世の附
元朝規式の箸おしり多の年の秋落るるうせふ
舎弁義政續く治世のこれ箸の打き

蓬菜飾 喰橘 穂儀 榎 檜栗
○串柿 ○橙 ○柑子 ○橘
○菖蒲 ○楪 ○稜長 ○裏白 ○昆布
○野老 ○海老
○尉斗 ○のり

梅子祝 小土器又 梅子祝
又梅ほりともいふ俗 俵子 海菜又干鮓ともいふ
室珠またともいふ

田作 乾鮓魚りこのめを 小敷原
略名と 田作 乾鮓魚りこのめを
多敷原 乾鮓魚りこのめを

海贏の身 倍の音を借 敷の子
正字ハ鯨鯨中かあといふ
子孫をいふ

着衣始 船家始 枋州大坂の船家初八船
松竹注連を飾り船

鏡餅神酒を供し水主を擗九十九 舟お出でて漕戻るときの外所とあり 船具祭

船具酒饌を供し以船神を祀る 中華の船神祀八上月之夕の初まき 幸木

幸電 菓盒子 三物連歌 北野の社正月四日東
白連歌あり中古枕歌

裏白連歌 歳旦の所
例と香能持も又と信守 三物賣 去年

今年 流慶 年始状 君が春 好
初月

千代の春 千代の初まき 去年 新紀年

着衣年 宵の年 初まき年 あ
といん冠

舞之今ハあきとまきと 小用ひくまの初とい 初鷄 鶏且 初爰

宝船敷 大海日より元旦に
の慶をとろ爰と拾 初曆 曆ひた

試筆 〇試毫 〇書書 彈初 琴瑟等
琵琶三弦

吹初 笛 樂田樂 松囃 謡初

初高ハ 初賣 買初 店卸 帳絨

帳書 歳具用 俄潜の長え 節小袖

節振廻 朝節祝
夕節いふ 女礼者 松の内 注連
の内

又お正月 春永 初芝居 二日芝居の名
八南都南

六日をとり 系当の芝居より申樂を舞はけり起り
又天正年中お國といひ女樂北野の芝居より俳優

正

そなへりし名づくししつろ羅山文集よ去今の歌
 舞妓ハ世雲圓の漁女九二とい者ハ世をさきり
 女ハ男服を忌相共且秋ひ且躍る○元和年中
 女命ありし女樂を禁せしむるにありし男子
 其の女服を忌云云兼應年中始むるに宿舎あり
 て年數は拘る志額髪を剃る官壯士とあり
 むゆ野郎と称しありて後家後の家書を被り
 公衆の帽子を頂く復女子英少年は彷彿たり
 三才圖會○江戸猿若の芝居ハ寛永元甲子年二
 月十五日より中橋より與約し雨ひ雪端町
 町の通り又今の堀町へ移る市村ハ久矢村也とい
 寛永十甲戌年今の菅原町より久矢村與約
 森田勅弥ハ万治三庚子年太希去湯といふ木洗
 町より久矢村與約し其の舞坂東又九弟相統と
 といふ江戸三芝居といふ漢は戲場といふ雜劇と
 いふもけ方の芝居は同一といふハ其用の辨は似たりと
 といふ俳諧ハ雅俗とをく取てありしと云内録ハ

万歳法師

○千枝一萬歳 ○三河万歳
 大和國定津田若尾の両村千秋万

歳兩座所司の庭より多々鼓舞をさし久千秋万
 歳ハ一町の両村より出南の西南三里許あり其
 内ありあり窪田若尾是之正月吾禁裡本選
 初の日このもと後舞東の由座より多々あり恒大
 和の外よりあり多々岷江入楚より又古今按
 千秋万歳ハ一町の万歳法師是これ田中法
 師の教致の狀僧取り多々兜を被り其の圖三
 十六番職人か合子存と又三河万歳の唱ハ大和
 定基の作多
 寢積 復他
 法障

水祝

○水祝 四年新婦を娶と此ハ朋友の奉
 以 ありし水をその人ハ決ぐん永祿

の以阿波の三好が臣松永久秀が姪と龍馬を娶
 合せしより其就起るといふ今ハ 官よりこれを禁

懸想文賣

○懸想文賣 清水の大津人赤さ布衣を思
 自布さく其面をさばひ僅

(正)

眼をわけて紙符を賣る只 **桃符** 帖 **桃板**
嫁娶を符を以て契桐の名あり

桃梗 淮南 **仙木** 帖 **神荼鬱壘** 風俗通

を建てる鬼魅を以てしるの呪之東海度朝山に
三千里の桃樹ありとの卑枝東北に向ふを鬼門といふ
神荼鬱壘は鬼門の二神の名之衆鬼出入するを取
りて以て虎の角の黄帝と云ふ則ち桃板を門に建

画雞戸貼 正月朔日画雞を戸上
をけり符を備へ挿る百鬼畏る又易通卦驗

子正且五更庭中を於て爆竹一画雞之帖五色の
五を戸上を鏤め **如願** 商人あり清湖を過ては

以不祥を厭ふ **如願** 湖君に見ゆ君來る所を
向人ありきて曰但如願を來ると君は詐すとい

て一婢を得たり如願ハハを名之商人來る亦あ
らハ悉くこれを致す後正且は晩く起高怒る

これを搥むる糞壤の中に入ると今の人正
且は細繩を以て偶人を繋ぎ糞壤の中を投じて

令如願といふ **搜神記** 歲時記事文類聚 ホニ洋之
○田中の俗糞土を除く初五日はあけそ登草りて

野地を以て石をとりて返りて宝を得たりといふ
古人如願を以て **段灰飛** 立春の日竹を取

のまき **五雜俎** て爰とて灰をこ
まきく灰く 葎草灰を以て津の器 **春盤** 生菜

に定めて曆を以て候ふ **歲時記** **春盤** 生菜
立春の日生菜を合ふ新を定むるのまき **齊人**

月令 ○立春の日春餅を以て **春盤** 生菜
を春盤と **綵燕** 立春の日

綵燕 綵を剪 **春燕を戴** 立春の日
燕まつりこれを戴て宜春の字を門に張る **荆**

楚歲時記 立春の日も戚の家綵を剪り小幡と
これを春幡といふ或ハ佳人の取まけ **初子の日**

或ハ花枝の下に綴る又剪て春幡といふ **初子の日**
○子の日の遊 ○小松引 ○その子のふれを篇
○子の日れ松 ○玉帯とハ春といふ野子の

正

日の松を引きて第一作り田家正月初子の日
蚕飼する屋を掃きむすむ神中抄○初子の日

ハ六十代朱雀院六十四代圓融院の所代もあり
タリ公事根元○宇多天皇寛平八年壬正月

六日真あり北野雲林
院行幸 披桑畧記 **初寅** 正月初寅の日
馬行 信 と く の 地

の民福等木を以鑄を作りこれを福搔といふ又
生の蜈蚣を山福蜈蚣といふ九つくるの山中を
巻ぐバ好 む て 蜈 蚣

蛇を食ふの由ふ く **番卸** 日同所同日或ハ
寅を用ふ

この日鞆の近邊信濃の西の山岸にそく小樓を
構へその内より繩を垂るく篋を掛り糸指の人
礎石を衆んとするもあれハ後 を 笑 ふ く と り

繩を引上ぐるの候は煮 く 煙 を 下 に と り

物知 按別後吉物知の日指 と く 今 日 社 内
子旅 と 糸 指 の 人 は 神 符 を 授 く これ を

知の礼と云はしむるも日本所の妙義糸指 は 今 日 受 る 亦 の 紙 符 を 行 事 に 押 し 人 を 取 ら れ ば

つねに卯 杖 **卯杖** 知 杖 ○公事根源より卯 杖
たま は る と 持 統 天 皇 二 年

正月卯の日大寺寮より卯 杖 日本 紀 に 又 又
仁壽二年正月法清府祝杖を献 と て 精 魅 を 退 く

より所見あり是悪鬼をば卯 杖 の 之 作 物 所 より
是を ち を 退 く 卯 杖 の 上 に 生 丸 の

方の 獸 を 作 り 卯 杖 を あり 漢 官 儀 子 剛 卯 杖
漢書王莽傳同上今按卯 杖 文 德 實 録 卷 四

之仁壽二年春正月戊辰朔己卯諸衛府獻卯杖
是を ち を 退 く 卯 杖 を 俗 名 に 卯 杖 と り

白くひかりる木子 日 産 **二の宮大饗** 二 日 王 卿
のう を 短 ひ り の く 下

二の宮へ参り捧礼あり
欠食につくと公事根元 **朝覲の行幸** 二 日 天子
天子

天子
太子
年の **臨時客** 二 日 攝 政 園 白 の
天子

宮へ行幸あり公事根元 **臨時客** 二 日 攝 政 園 白 の
天子

其の始大長以下の上達を 招 け り 其 の 事 の
ある定は 公 務 も あ ら ね 臨 時 客 と す 也 年 中

(正)

行事

歌合

たうやく

三日 主上へ十唐膏と云膏
茶を進る之河類女

耳裏へ侍りて後礎礎抄子又江乃才主上取之
右のそ名指を以丸の堂に塗りめりあり注右の
才四指を曲るは是大師印相云云一名を十唐万
病膏と云かりやくの名を忘れてさやくといふり

東叡山大黒天湯 言江東叡山中護国院
大黒天あり正月三日
餅を湯に浸し糸指の人を飲ひむらに大黒の
湯と云ふは飲む者必しも成就せしむるこの日法
人財糸ひ或はこれ 履新の慶 履端の慶
をお福の湯とも云ふ

左傳 乙未年共乙未年の端を 叙位 五日 法長の年分
物をさくかまきりさるるなり 在奏し七位
の次方を叙 天狗宴 言愛宕寺の午玉かお
今日二夜入る 弦指客敷子あり南に二列
り各宴飲と云の座上人片木をお立て舞ふ

これを天狗宴と云え 轉供酒盛之の体兼豪を
るが故まの音を借りて天狗宴と云宴終りて後各
堂に坐り 午五枝を以大門の扉敷床礎土を敷き
法螺を吹太鼓をさるるの同寺僧午玉を敲き
悪鬼を攘の謂之難辨抄子天狗宴は東西二行に
座を設送玉登のさる人を出て坊員を並べといり

人日 言正月一日を鏡と二月物之月猪四八羊五日
ハ牛六日八馬七日八人日といふ之 東方朔白書
ルイ人 唐李肇 言 〇老子云天地ハ
靈辰 万物の父母ハ万物の灵辰人日同 七日正月
市俗の 人を帳子貼 荆楚歲時記 縁を剪て人
を所 〇着菜 〇七草
饋る新年旧を改 新子从ふのまかり 〇菜粥

難抄抄公夏根源本ハ七枝の若菜とあり七枝の粥
ハ十五日献むる一ハ廉中抄々説 又之れは抄子
云或人曰七枝ハ七日の粥の正々七枝の粥と云とハ十
五日の右実之是別七宝羹の要なり 菜果の果ハ

五日の右実之是別七宝羹の要なり 菜果の果ハ

(正)

米袋袋蝦小判等とてまぐめら死物を賣取
下向の人これを買ひて世のうへに又賣る此
烏帽子を買ひて取子戴て後未の人を笑せぬ
ることあり○高家もこの目太き妻を後け客をむ

く飲食夜と江戸よそ八この月七日高家戸を妻
を中へ大醜會にりり八十月の條下り注

常陸帯に神事 十日 常陸國麻績の神社
系神氏薙槌命之

年中系礼七十五度ありそのまじりありこの日
男女の名を布の帯に記し神事於て社人れ
を授くおん婚嫁を定るといふ奥義抄に
殘帶あり一ツハ我名を書一ツハ男の名を書て
く中を隠して末を祢屋に結るといふ
べハ離れ結せよとて一ツハ掛帯のやうに
つがること○今兒女の就は紙をとりあせ男女
の名を書て記し縁結びといふことをいふは林の
まねむなるべハ常陸帯と
縣召に除目 十日
外官を任ぜりともと名替名國替後滿更仕
任好返上とあり○公事根源○一日着除目
三年損道心除目今之
推弁朝服也五雜俎
外記八恒例臨時の政をとり給ふ官より冬正月
より先當年の政を給ひ給ふ檢非違使もこれ
今日あり
住吉川弓 十日 檜州住吉の社
人正鶴と誰
尺三寸の的を立立合を射る勝負を論
るより先神事この弓を射る八明神出現の
時隨從の家とて客方供方とて十家の子孫
あり一嶋を政所といふ境内の事を主と今日系
指の徳人竹馬と昆布を買ひ土產
とて又櫻の名物魚を最勝を買ひ
男踏 十日
○あつせはす○かぎの綿 ○踏とて正月
十四日の男踏のとき近江の女踏を
いれ八十六日之派は物産を多く男踏の
をやりや公事根源○岷江入楚末摘花の巻は天

正

いづくたまは二物正月十五日清涼殿の庭に於
 青竹を焼吉書を天子揚る十八日又竹を焼り
 扇を焼ひ有法涼殿の庭に於てこれを焼く唱門師
 大黒松太夫の徒四人三人箱形鬼面を被り赤熊の
 髪を並ぶ二姫八を鼓を打つ二翁八逐舞てこれを
 うる童子三人素面を赤熊の髪を並ぶ腰鼓を
 打つ又立方は有衣袴を打つる未五人をひ立て
 これを囃しんぐりいづる由未を打つ(十五
 日の曉山科家より献むる所の尤も長爆又主上此
 亦吉書修理職の事より後極脂石より燭を
 指丸小亦吉書をさげ修理職仕下亦各庭上
 二女を拍ま又浴中なる今曉爆竹を打つ
 焦りまの竹を削の肉を挿と並と死ハる家症
 ちとよ或ハ爆竹の火を解を燈を食ふこれを
 菱葩はとよといふの火を以今朝の粥
 を言ふ此江官禁ありて爆竹をせし
 上元 十音

花燈の夕

事文類聚 唐山の俗上元の日灯燭を
 謝肇淛云天下の上元燈燭の

盛る中より逾るものなり云々大約二十夜よりありて
 後息蒸天下五夜ありて國は十夜あり大衆の婦女
 有興りて出給い教橋の上より経過をこれ
 正體と稱とよ負表ハ歩給もの五雜俎

水菘木

十五日百官悉く射を射り
 言内首納りももが 公事根元

粥の木

十五日 粥杖

粥の木をく女の尻をくハ男子をくハ呪ふとて并
 とあり女ハくハ作と防ぐハ柵を紙杖衣箱巴つ下紐
 亦ハくハ志んれハ本文儀をさす○伝説飛騨三河の
 三州よりハ漆樹の木を二尺二寸より三寸より上より
 削りて先の方ハ丸卷のこも或ハ柵様のものを
 紙を切切紙にて松燈を是を燈の形をさす
 除ハハ白くハの柵様跡を是を名つけハ祝杖と
 云ハ新婦ある家へ入るにこれを以新婦の柵をさす
 童の戯 粥柱 粥の中へ解を入る食ふを以
 ありと云 七日の粥も今んと十五日の粥
 亦ハくハくより入事り 小豆粥祝 十五日 玉燭宝典
 亦ハくハくより入事り 世風記

(正)

枚園の粥

河州河内郡あり奈神四座天子
屋根命曹不合尊太国主尊天

照大神又若宮一座天子屋根命の子天押雲命
正月十五日田系尚日神供所おひき小豆粥を煮
粥の上す竹管を撰百穀を納置一蒸丸の
強弱ふりく年数吉凶を益當社才一の神
あり神主水連氏の外相兼事とす社説不出
これ平墨の粥之十四日あり大金を居小豆粥を煮
て金の上下五十四本の竹を五寸才切て
これを束とて約り五十四種の持物を一
は書付て金の中の粥は浸一扱一竹管を割て
中の粥の多少より耕作の吉凶を占ひ
告る 十五日後河國菴系殿あり
三保祭 廿五長年中より有渡那
は属羽車坂田の社八本社を去る南六町余外
濱の海岸あり社祠あり八數十町を隔て海
三町ありの地あり性年狂瀆衝突して海
汀諸を没しりより社地を退く只今け亦を羽

衣の回述といひ陸奥の説之風土記に羽車坂田の社

所穂大神の離宮あり今まびりて毎年系祀の時本

社の神幹を神幸一羽車のはま神系を神供

木を献又羽衣の性昔この地天女天降りも系

羽車といふ神主家傳ありといふも八羽衣の回述今

の社地ありと云ふべし例系正月十五日十四日十

六月に至る系詣の人昔より馬をまはるともよく

牽来り十四日筒粥の神幸十五日神前子於て天下

太平の祈禱あり十六日古来八神輿神幸一湯立

ホあり一は永二年細川源正忠孝範の兵火少く

神敵諸々祭器悉焼失と今八神供神酒の系祀

のこるなり

獅子頭の神事

十六日伊勢國度會
社説あり 那山田のあり

おむ所七社八社牛頭の社中島丁大社二季
今村の社神子坂の社葛原苗の社余山の社其曲の社

是七社之濃木の社以上八社一社毎獅子頭

一際了八ありこの内の一際虚空より降出るよりの神

あり七は常政長官といふ神職の作とを系の日今所

正

糸と只兩絡弓矢を買て小児の玩の爲に又昔此所
 小祇園の社あり故に今も穢民將來の木符を賣
 これを小児の衣領に繫ハ疫を除くと云唐山剛
 印のまき一弓矢ハ是ハ幡杖を尚むの謂也又山
 腹の岩間より出る水ありこれを香水と稱し氣清
 の人小竹筒を盛り推りて飲ぶる疫病ありと云
 せり飲むと死ハ愈也九厄年とある者疫神ハ
 社前砂をとりて夜所の下に並べ厄年を此
 砂を借して返す納む
 故に俗又厄神と稱
吉田に清稜 十九日 吉田ト
 祈祈年
 の祈年あり奔場所の藁を檀を搦ハ方を詳せ
 らるゝの夜奔場所八角の社内に入て宗源神
 道の作法を修むこれを大稜といふ一説は今日の
 稜ハ疫神糸ハ八幡の疫神糸ト同一節分の夜
 より正月十九日迄此間疫神を
 封むる十九日小兒を其塚を撒
女節分 十九日
 吉田の疫神詣之最まはるが如く節分の夜より疫神
 をおろすが多し男子ハ節分の夜と只も糸詣と云

とも女子ハ四分の糸幸ふいとまかく特ニ夜中おろす
 此と云ふ事この日を以て節分のうり小詣と云ふ
 むくは秋京の婦女正月十九日を年
 物のはをとりて女正月といふたひ也
貝足に鏡

廿日 昔氏家わく廿日を用ひ 祈年表
骨正月
 祈月忌とて後兼意壬辰年より土日を用ひ
 京大坂より新年の嘉祝に必願の脯を用ひる魚骨
 小大豆と酒の糟を入る煮熱く帯ねてこれを骨正
 月と

廿日正月 赤豆餅を食ふ是天安牙小餅也
 この餅又今日婦人鏡臺の鏡餅を説ふなりこれ
 二十日と初良と訓をさう故也廿日正月ハ市俗の所稱也
 天安牙 廿日 煎餅を敷敷 ○江東の俗正月廿日
 を天安牙といふ紅餅

を以て煎餅を繫ぎ屋上を並
 これを補天安牙といふ軍文類聚
四散嶋祭 下ノ妻
 地の沖前ハ藝州安藝郡ハ是散嶋と合体ハ毎年
 正月下の妻の日神糸あり近國より糸繫きて糸詣也

正

嬰子若葉 松花○冬緑 ○冬緑

玉筆 堀入 野大根 藕堀○十之の花

下萌 葯臺 鶯菜 水入菜

田を鋤 畑之 畑步 種つ物

凝かる 牙水 餘寒割

梅五葉不有梅扣名鈔不字今人の 春告草

白ひ草藏 香散見草藏 いはの花

白き 花の兄二十四番花信風小寒一

好文木起居住 この花和途

飛梅無常説法現神通千里飛梅

鶯宿梅勅をいもかこ 未開紅願寺

輪旨梅 餘梅 冬之梅拾遺集

梅屋舗此の梅

脚龍梅氏は本所亀戸天神より二三所許

梅樹を栽世小梅を委と終ス又一株の梅あり枝

餘地不横りく 龍の如くきり故ふれを

龍梅と名へり 梅暦梅是山家

田吹ふの花 法橋意 萬歳樂○春鶯

梅のさくまをくまを

梅うえうふ ○青柳うふ ○踏みの曲の名 ○大芥うふ うひも

子の具衣 何色でも子の日の花れうもをふ 梅の花衣

表白裏上襦袴十一月より二月迄 道遠院 表 鶯袖 法紅裏紅梅これを梅まひといふ 梅合院冬 平々の歌

鶯袖 是ハ衣の色小あぶぎ東小袖といひく 衣の袖縫い袖之 藻以州枝折枝

柿の衣 表白裏上日袴袴この外一着柿 泊山 紅柿柿重花柳木さあぐあり

泊将 朝寝 ○せとえ者 ○巻尾 ○山野 ○鈴子さけ 小紫

宵小袴子の鳴亦をせまきく未ゆふとの所小袴 寝る小袴子をともまきを泊山も鳴る袴もせ

とえ者とも袴袴ともいふ又巻尾の鈴といふ鈴袴の尾小鯉の尾先より三枚めの鱗をとりく尾羽

小糸ゆて巻袴の上は鈴を付るこれ袴ををともは巻の中へ飛入て巻の居所のまれば付

鈴の音をゆてきんがきく泊将おはる鈴子鈴子といふものをうて鈴の音をわかしゆく袴を合を

るんは巻を押さるる一とあき又巻尾とハまきと巻のころ山へゆんをせりあき巻の尾小袴

の君あきといふ羽を巻いさむ巻のやうにうたえこれハ山へゆのころをきくとこれ巻尾又

白尾 和名鮎 飯鮓 蜆 浅蜷 といふ 白魚

猫の妻恋 鳥さる 山笑ふ 万山春を借まを

雪氷解る 送穴躬 九九日四時宝鑑云高 陽氏の子衣は

散るを好ま麻を合正月晦日死と世に麻をを作り破衣を巷口小麻を合負鬼を除く又池湯

の風俗正月廿九日を以穴躬九とを屋室の塵一機を掃除これ水中小投これを送穴躬といふ云

謝肇淛云俗説信不足穴躬也也躬也皆晦尽の養之結月をいれて独正月をいふものと

正

送の端を奉る(五雜俎)按きよ
送は朝ハこの方より晦日掃き

兼三春物 仇保姫 春の野山をさす
神に神祇ふあは 飛段

○初震○八重震○震の網○震の海○震
の沖○震の波○震の袖○震の巻○震の巻

志玉姫 秘藏抄 飛段の洞 仙洞を
十ス入 九のすま

仙境を 飛段の命 仙人ハ震を服して命を起る
その命ハ長記とふよせてとる

飛段波 流る震 共ハ海 震久 飛段のミ
を以ふ 九のすま

春はゆが 圓珠菴笑沖阿者梨云雲のほつ
一と六震をいふ良風のさ山うせ

のたののさふ物とこふハ子とを
そののほつ一と六震をいふ良風のさ山うせ

ららく 和の字を列ス 暖ぬと水温
あつめ ぬと 水温

鶯 経方と名 人來鳥 古今集
大和物語 金衣鳥 金衣公子

分ちと名 更今序以上 鶯の琴 鶯笛 徒然
草 鶯の是名也

名ふわ 鶯 特小ハ丹の黄多ハ今の鶯子わと
とて説あり或人云黄多ハ俗ハ朝鮮

鶯とよのそとよの羽黄 鳥囀る 水鳥とつ
百啭り

百千鳥 和のくの名をいふ事と
よ夫ハ後人のひかこ

雲雀 心免心と名 雲雀 永日 遅日
の是名

雪解 雪なれ 風光る 東風 初鶯
こやち

鮎膾 鮎膾 鮎膾 鮎膾 鮎膾
鮎膾 鮎膾 鮎膾 鮎膾 鮎膾

鮎膾 鮎膾 鮎膾 鮎膾 鮎膾
鮎膾 鮎膾 鮎膾 鮎膾 鮎膾

正

干鱈 月刺 乾鱈 海雲 白藻 水松

若布 鹿尾菜 海苔 ○其のり ○黒

○鷄冠のり ○於胡苔 ○ささ海苔 ○紫麩のり

○十六嶋海苔 ○魚津のり ○呂川のり ○淺州

海苔 ○相良布 楊柳 ○芽の柳 ○青奔

○痛柳 ○柳の眉 ○柳髪 ○蓬柳 ○門の柳

○折の腰 ○柳の糸 ○五柳 ○風又柳

玉の小栴 折柳 折柳 折柳 折柳

小玉 椿 ○玉椿 ○伊勢椿 ○菘椿 ○櫻葉の花

列椿 つらふ小又つらふ年 ○陽冬 糸遊

巨勢方の山路を方葉集 糸柱一物を名持ハ 唐菖 三葉芥 田芥

吳名寄 柴神難記 川菖 根白柳

少免菜 菠薐草 防風 独活

茲姑 烏芋 摘草 雜菜 つむ 野山を焼

好糸 木地の燻縁 春ハ陽氣つれ反もさ 春の宮

用又又表ハ物毎あつるころもいふ海産の縁ハ表

冬抄カキカラ小用又又洗ハ縁といふもの

あり年竟ハ冬と云を日ら縁のさり 東宮を 暎月 春雨 榆莢雨 春雨寄

膏雨 紙鳶

紙老鴿 鳳巾 共小抄カキ

これと遠ると今按むると和名缺子云辨色立成云

紙老鴿 世間云フ以紙為鴿 秋葉風能飛云紙鳶

これと云く抄カキハハ音のさ小抄カキ列和名ハ

正

献す久回里宜春酒を醸して以向芒神を祀豊
主を祈る百官農書をたててさるる以本を
ることを示す乃令をさ者しく上巳九日と云令節
と云季

二日灸

二月二日男女灸長を医書小
八月二日針灸小よりさの宛

御傳

ありしはより俗傳てこの月二日を用るの宛
民間灸灸の町口唱を當病ありその所をや
人神當小去へと此傳お侍り聖徳太子の教へ
いりけ所をとも八月二日又おすく男女灸
長を共さるるを二日灸といふの効地倍と
りり歳時記小この日朱を以小見の額を灸と名
つけき天灸といふ疾を二灸とあり今本邦
京師徳重の社路老波あり朱を以小見の額
小灸して狗子といふ者も死ハ疫を免るといふ
これ天灸の
意あり一
初午 二月上の午の日稻荷を
又山城國稻荷山今日新
所供を献す社家毛利氏を調進中の中社ハ
倉稻穂をさる田中の社ハ大已貴をさる久八本

朝衣食の征神なり蒼生安逸の神今日農
民氣詣持小多し門前の家々百穀の種は雜菜
の種を賣る又大小の陶器を賣るもの大なるを
てぼろといふもの始於州轉法の海濱より製し出せ
る灰之世々轉法焼といふ是之の小を杓をつくと
いふこの土器を中運轉をいふつぼくの音あり故
名と云これ小見を賺し又大人も産をこの内子
へて火中お投し焼鹽とも今日民家多く菜の
葉を食ふ九糸詣の人神葉子授まる処の淺た
簾の向小止る者おれは人の福を得るとい
て家称とを當社出現和銅二年二月九日之長
曆を以これを推したる初午の日當雍州府志
この社ハ七度詣る例ありといひ傳ふ

○氏江中より日王子妻恋之團芸傍木の社糸詣

多し近年王子稻荷最群集を西々系より先田の畝
少く百穀の種杓を賣る糸詣の法人物格紙製の種を
買て土産とも又茶の木稻荷の氏子今日茶を喫は

その外も茶を禁する事あり或家市中も禁せし指
荷を祀 灯燭をさけ鼓吹を禁す道々八雲間の雲碑
唐のてく遠八蒼海の波濤を仰り江戸の繁栄安小
耳目を驚かす事あり 初年やあまの乳母星月夜 泊棟

水間祭 上午

泉州龍谷山水間寺 聖武の勅預
行基并天平年中の同基へ

天台と本寺正観音の基四十二歳の作今日古を運ぶ
者厄難を消除し福壽を得ると傳ふ天皇 聖
後たまたまより皇城の西南小救世の像ありと云行
基をよこれに宗へ泉州山谷に到りてこれを為ぬ
神龍あり大士の像を護持し以行基小附より
てこれを献す即ち梵刹を建て安んず天皇の瑞

後今日の中多小毎年上の午を
今日と云土産草餅を賣る

東福寺懺法

上午 恵日山東福寺八浴の東南小あり門前の街
道橋より北を一の橋といふ聖名郡の境之南を二
の橋と名づく乃稻高の社なり毎年二月方寸の
紙小方の字をきて寺内の同聚座より出火災

疫病を除くと云今日初方丈小於明兆が画
く処の観音二十三幅の像を掲げ懺法を修す
同基聖一圓師之懺法と天台大師或統遵式を
依りたまひ六時六根の罪を懺悔するの法今日
の終行
則是也 本妙寺詣 上午 江ノ上山の辺小旧
迹あり今も二月初午

詣ありこの本妙寺山門外属して天台宗之織田家の
兵火小くして山門一旦滅亡の時江州辺の末寺も
共小回復せしも又その一寺をへお修し近は國

野洲郡百足山本明寺本寺馬路親音之今日跡
之上山中小あり堂宇僅小二間四面里俗の説本
寺ハ儀秀郷が寺なりと所長一尺二寸毎年二
月初午同帳あり鐸口の銘小百足山本明神とあり
その碑の平林小之上明神の社あり是をこそと云

ふた本明寺親音ハ之上明神の本地佛よりし小や
堂の扉より二十三間の矢場あり初午の日今もあつて
弓矢を在蔵し里民も弓矢を賣る系詣の人
これを買てを納すこの中平目八秘伝あり初午の日

或六三十二年を閑帳の期とせ菅田村初午當日に
外北佐久良南佐久良兩村の百姓四十人より請を
結び一村より六人づ各十二人を年取より一力者を
支配し本郷南村小左と北村より封を付小村
小左と北南村より封を付互小郷の志を不
とく一初午の日幕分の夏と十二銅を指し徳人行状

魔耶參

ハ榜州免原郡知原村

の心小あり大化元年の草創伽藍坊宇二百餘
ありが後蔽廢して今幾く存あり二月初午の日小
羽馬の淫雜を和ると馬を牽て載

吉野燬記

朔日二月念式とハ菅田五月より未五月迄長日不
退の行人寺僧方を差供と号し満堂方と懺
法と云々の兩行者二月朔日本堂（出座）に供神
酒を融し幣あり本堂の廣庭中く殿く燬
をやくとく世俗これを吉野の燬と云燬記と云
しと云とく此燬よりして正月下旬より三日の百苑供懺

法の兩院坊より徳行のあり近國の非人乞食志
来る吉水院考物○又榜州平野大念仏寺の本尊一仏
十菩薩の画像供も鏡佛を燬の首小吉野山
花玉持現の神人事とてこの佛を破砕して多くの精
小とく炊て又燬と二月朔日本堂小坊に徳人を施
これを燬配と云又吉野山中の僧侶も砂灰配るへ
この幕下使の家婦佛と曲物小
ハ行基の院に配る雜談抄
河辺郡昆陽村崑崙山昆陽寺八四五代聖天
皇天平五年草創開山行基より茶師の像を造
て安座天正年中同禄今僅小字を攝（本尊）及
開山の像を並八町東小池あり昆陽の池と云池
の狹窄眼之池魚を煮りて行波明神と号く二
月二日里民系詣る

釋米

禮先師 〔礼記王制〕○親米を折桂會といふ事
を折基まかりやん

四季物語 ○親奠ハ孔子のおなり上の丁を用ゆ
日蝕初年小ありさハ中の丁はありとや

〔公羊〕

二月堂行

朔日より南都東大寺あり牛五
十日より 加持の法乾日あり七日

あるまじの七日より牛五の親善の像大あり上の七日は
像の親善の最に於て法事を修ス八日より十四日小
ありて下の七日より牛五像の親善の法事と七日十二日
のち夜水を井より取て牛五を貼る水を取九日
中用る水この夜水取て捕ら畜ふいしは実忠
兼後國守俊明の純宣より水を取井より取
牛五を貼七日十四日の夜必井より涌出ると今の井
水の光も満るか如く今夜水を取ると見師実忠小
做ふる東大寺の僧朔日より十四日ありて各善修
と二月堂春夜法ありこれを法乾といふ僧三股
瘦病あり八勤るとあり十人成八千人年々く
多ありの僧より僧多きとありの年吉くと未道の男
女志願あり止宿するも巻とつ七日の夜
修行の傍室より下を履く堂より有燈の
去大松明を取て寺僧啓りて堂を巡り曉まであり
水を十二日の夜も又同く水取の像の昔も

水取

ほり見師実忠二月懺を修ス初夜の時元神
を清めて神名を讀む供ス若州遠安明

神あり威美とこの會あり実忠が懺と
渴作を定めて院より強く八間伽を駄と忍黒白
二の格石地を穿て死場傍の樹は堂をのり
耳泉涌出実忠石をたると露伽井より早年に
井水抽きて二月修中伽を欠と死八家僧井の辺か
集り遠く若州の方を持念々須臾も水盈差差遠
敷の社前小河ありこの対流を絶て青平州民これ
を怪しむ蓋し神河流を通すと露伽を送るを後
このことをして里民この川を絶て青平川といふ此
水を取て実符を帖ると世は二月堂の水取
以実符ハ 芝能 二月七日より南都
刈牛五ハ 奥福寺の南大門

薪の能

二月七日より南都
奥福寺の南大門

小野の能より多は元是奥福寺夜中法會の
寺傍の奴僕春堂ふぼむ門前より取て火を焚
るの光を就くともあぐの俵俵をかり長夜の能と
ともまわりのつら金春親世保美金剛四度の業

①

勤行は先七日二座よりこれを勤行七日也又此
 九日にあれ八初日の一座元徒は若く若宮の
 におきて藝を施すの次座門能を勤行十日亦
 次より此より官能是より後十日より十三日まで
 兩座おきて門能をつとむ七日の百雨より
 八十四日臨時はこれを勤行といふ○大和名跡志云
 新の能の起るむ西金堂の修二月會より
 出より元徒の筆記云奥福寺修二月會ハ弘
 仁十二年より始東金堂九八相の花西金堂二
 十二相の花六十持の香華を飾り擁護の法神
 權宴の法佛を勅請して供養せらるるのち
 清和天皇貞觀十年大風万木を伐雷山を
 崩し地を穿て象の田を穿て如く修西
 金堂の並に元一開く末南大門の芝原
 に接てこの虎より魔風頻り吹出づ法堂の
 瓦落敷の門扉を吹わげ散乱より漸く雲を
 止風止後虚空に声ありて曰天不修星也

八天子の誓の四海の我起久我國の正法をんと
 鳴りて通りより大虎食後ましくめで是全
 法令の中絶しつる法を絶するを契り西金
 堂の法令を南大門に移して終る是風虎の末
 この如く如く故にこの會ハ往古より上陽とて
 昼夜を日るる故にの誓を焼り音唐人ま
 て西金堂の陽まこの誓の光ま
 けるとどるのち後小松院明德年中より修二月
 會の有るまより七日南大門におきて修二月
 會の修するより上陽の誓のありを修二月と
 きては水登の内より猿木の藝を施せり故に
 其の能といふ○近世西金堂及南大門の修二月
 會の法修するより毎年十月若宮を祀
 の時により猿木修するより上陽の誓のあり
 年童といふも元徒の集會所一まり尊當とい
 披香の元徒の檢役猿木の修するより上陽の
 の修するの修するより上陽の誓のあり
 とは元徒を修するより奥福寺の貫主也元徒小

①

近江四比良山高小あり
八溝の記茶々志せり
涅槃會 十音 涅槃像
さうしん

○二月の別 ○佛の別 ○周の昭王二十四年四月八日
日教を誕生之八夜八周の禮王五十二年の當り年
七十九一周年八子を以正月と爲す今今の二月四月小あり

いことと説は非かり印度の二月八中四の十六日之禮
説あり略す ○浴の東福寺小北典司が画く外の涅槃
の像あり從八間横四間あり今日法人不終せしむるの

外此の寺院おぼて
雪の景 毎年この日おぼく
雪祭舎を修まき
世俗の清小

西行忌 十音 西行法師八九金吾
後系康清の次男俗
名儀清鳥羽院の上北面徳大寺家の被官あり

圓位と号す建久元年二月十五日寂す
のりしとくも死んるのきりし死の月日のところを
世にわらむといふも臨終たまくその

期まあり是又奇といひつる
常樂會 十音

南都真福寺東金堂子圖淳檀金の釈迦像あり
その扉面に涅槃の像あり佛は金剛が圓とす起
りると今日みの扉を知り常樂會も涅槃去ま同
ト根州四天王寺も涅槃會を常樂會といふ

嵯峨の柱炬 十音 二月十五日清涼寺釈迦坐の
前小大松明兩基を建く
多小抄の火を燃し地下人各松明を巡り京深陀
の号を唱へ節を舞踊躍る凡西域小抄を釈迦を

其差の邊
倭花煎 十音 京師の俗正月用る処の
倭花を貯へ煎きて涅
槃會小者で供物と成又正月の候をわりの如く
云ゆと蒸てもさらしこれを倭花煎といふなり

積塔 十六日 盲人檢校以下の衆分ふる各々各
京高倉綾の小路を清取茶巻
あつさり先孝天皇の皇子兩夜の所子のる積
塔會を修す積塔の名義宿忌の所人大檢校

を毀く上座小守警神の画像を畫し亮盲これを
修すその後大瓶の酒を酌と盲人六瓶の中四人を撰

⑤

平家を護うじ守警神八日吉廿一社の内十社を
 取てこれをふる俗も警神をあらうて病神
 と此の画幅常小搦檢校の宅小安座と其の
 人死ま九八次の檢校小与棄集又盲人琵琶と深
 まる由ある妙音并又天を崇む九平家也培
 の作者長倫等一傳り集室時長と傳る処と
 或は伝説前司行長の他と又一説小悪七共湯
 景清草創りて平大納言時忠これを修飾し
 其の後三位時長その要を宣系一玄惠法印又
 これを改補し全書と名とりの盲人平家終
 末の事ハ生伝よりされあり如檢校といふ二
 才子あり覺一といひ城一といひ城一才子八坂の石
 小居りて城元といふの次を城景といひ又その次
 を城存といひ亦覺一が才子四人あり通一其一景一
 清一といふ所細城方の中大山流妙文流都方の
 中志道流妙觀流戸嶋流玄正流是へ城方
 西流七盲人女く都方の中戸寫玄正流も又盲
 人女一故小西流の中隔羊小これを勤む盲人

まぶく度既と終るもの間小官位を並て官位階
 級あり分一の上首を搦檢校といふの次を二老
 三老と終る一老より以下十人ありて十老と終る此
 十人常小京師小ありて万吉又を針り流盲を
 治し故小他邦小終るあり在村の檢校四人を
 えとて常銀を生納せむらを結解といふ
 万夏の經營を主るもあ人を並てこれを職
 事といふ有髪ウケの男子あり積塔納原令の
 日鳥帽子素袍を並てその事をつとむ
 お傳り雨夜の皇子盲多ひぬ故小流盲をあら
 せとて明り明日皇子の忌目これよりて裏
 七盲心經を編り琵琶を彈りて宿忌を修る
 天皇光孝も又上賀茂の封境の中小田地若干
 を並て歸る處に盲人をめぐるあり令を
 の田地社目の有とる故小遠方より盲人七十
 免く京教小ありいそ宿を定むるハ先
 賀茂の社家小奉宿とると大炊道場大炊
 名寺元天台宗之中世時宗とる堂前小光

二

孝天皇の塔あり盲人或ハテ不指と云○江戸
本所一の橋弁天の社也この日亮盲積塔
會を修ス乃大榮洛の清取衣唐不抄ト

當社ハ元禄年中檢校技拔山民起立ヤリ今不
るりて檢校校 貝寄 根州難波の海辺ニ
よりんを支配ス 當月元月前後吹

風を貝をよよこの風不演吹をよる貝をむ
ろひて聖天令供養の造り花をよにつり上
宮太子の弟(まを)と云又或人云四天王寺公文

所秋野紹順の説ハ二月十九日四天王寺の公人
六時堂の前ニ日相と云てをひ住吉の浦
一節君子をより小四くん是未廿二日聖天令此
曼殊沙花よこの貝を付て舞臺の四隅小なく

舞臺を養ふるん其の貝の形樓の花不似りこれ
を筒花 誦念佛 四天王寺念仏堂不
に造れ 中 此の事あり天竺來れ

名号として八井の画像を掲て念仏修行ス
小良忠上人鞍馬の見波門天より感得の所經と

今日平野大念仏寺あり法妻を修行ス法會の
半大和河内の道を去各十往をよ一証子紐をつけ
不持てこれを擲く誦すハハハ一心不亂念仏

て誦るをよ又古々大和河内の志と云り由縁な
し直象象の禪門をよハ此 圓宗寺寂勝會
法會不入るを許さばと云

十九日 此寺今絶る所室仁和寺 聖靈會 廿二日
の境内ニその名ありハ(勅會) 根州四天王寺不抄之れを終ス當日太子の像英

舍利堂の兩輿を接して六時堂不安を一舍利
二舍利以下十二坊の傍位を令せ堂前之舞臺に
抄て大法事あり寺中中一賜を一舍利といハ

分二を二舍利といハ是舍利不釈ふよりて以ハ
多當寺年中の法會の中この會を以分一とい
淺間祭 廿日 駿州安部郡淺間の祭ハ九年
中の祭祀朝多を撰一ハ十

三度あり今名目のを存ス云ハハハ二月元二日ハ
祭礼ハ今不ありて嚴重之府中檢校よりね去練

物を出てこの日社の外おぼくは妻
を齋ふ直々の去必くこれを買ふ
北野所忌日 廿五日

○菜種のは供 ○今夜西京所供田を祈るの
家大小の所供を小野の社に献す官司老女お近
双まき幣致より神前の階下おいらり毎小これ
を傳ふ官司の一老と巫女の文子と直まこれを取て
神前お供すこれをま供といふ又幣供といひり或ハ
菜種のは供と称す供物の上お必黄菜花拵む
ち多ふまのふと成八年ふよりて菜花はを同ぐれ
ハ換り子梅花
を以てといふ

吉祥院の八講 廿五日 二月廿五日ハ
天満天神の

神ありたまひ一日之後の告ありて後鳥羽院天仁
二年より吉祥院やハ講あり昔長衣の心軍多
てこれを終ふ公事根元 ○吉祥院ハ東寺の西南
あり天神の祖又清友の逢立に加州富貴全れ
庄を以永く八講の料ふ下場より昔長衣長衣
記ハ **道明寺祭** 廿五日 河内國志紀郡土師
村あり一名土師寺と

い中興住持の居覺書書正相の伯母あり
ゆふたを社の村あり書多よりたまひとあり雜
終抄小真の天神とハ天穂日命之菅原の社と二
社合す今 **龜戸天神花踊** 廿五日 江戸本
日祭礼あり 所の未

龜戸村あり當社の龜永二年昔長衣の末も文
鳥居佐祐筑紫太宰府の天神を勧請より安
楽寺より他回ふらると當社を何れとハ故小
世俗緯号と東の安楽寺と稱す社取小花持の
稚木といひあり此此業より未とハ此といひ二月廿日
花踊あり是神奉へ祭礼ハ八月廿五日や本所
牛所前と **季文の所讀經** 二ハのお月大般若
講年なり 經を百石城あり

講びててて四日及ぶ廿二の日ハ川の家とて
僧小茶を賜ふとあり天平元年四月小路と
より公事根原小なるや江波才取書と云春秋
二卷百僧を南殿小清とて大繁若を燒し心
その内所長僧世口を定め所前小おて仁王經を

續一山納去未後各入南敷不_レ多_レ奉_レを終_レ自
余_レ多_レ所_レ希_レ不_レ候_レ又_レ自_レ觀_レ清_レの_レ所_レ時_レ季_レ毎_レ小_レこれ_レを
終_レ一_レ元_レ慶_レ天皇_レ陽_レ政_レ祐_レ時_レ宗_レ誦_レ念_レ佛_レ 卷五
の_レら_レ二_レ季_レ小_レこれ_レを_レ終_レ

の_レ西_レ所_レ乾_レ堂_レ不_レお_レま_レこれ_レを_レ修_レ一_レ遍_レ上_レ人_レ也_レ二_レ世_レ煎_レ
阿_レ自_レ作_レの_レ休_レ陀_レの_レ像_レを_レ本_レ也_レ一_レ毎_レ年_レ二_レ季_レの_レ彼
岸_レ中_レ地_レの_レ會_レ弘_レ中_レ世_レ以_レ来_レ尼_レを_レ推_レて_レ手_レ中_レ多
扇_レを_レ制_レり_レて_レこれ_レを_レ四_レ方_レ不_レ翻_レり_レ甘_レ也_レ乾_レ堂_レ煎_レ
と_レ終_レり_レ不_レ是_レ寺

社日

春分の前後不_レら_レた
戊の日を_レい_レこの_レ日_レ土地

社翁の雨

社公社母旧水と
食む故不_レ社日

雨の_レを_レ社日酒を_レ飲_レば_レ耳

治聾酒

聾を_レ治_レ石_レ林_レ詩_レ話

彼岸

時正 ○波羅密多唐不_レ翻_レて_レ到_レ彼岸と_レい_レ
大師金剛の疏不_レ度_レ彼岸到_レ彼岸と_レ二_レ義_レ不_レ出_レ終
了_レこれ_レハ_レ義_レ不_レお_レま_レハ_レ異_レあり_レ度_レと_レハ_レこの_レ岸_レより
の_レ岸_レ不_レお_レま_レる_レの_レ義_レお_レり_レと_レり_レあり_レの_レころ_レん

到_レハ_レこの_レ岸_レより_レ義_レと_レる_レ上_レお_レり_レある_レハ_レ已_レと_レ未_レと

の_レ遠_レハ_レあり_レ故_レ不_レ二_レ義_レ不_レお_レり_レ又_レ到_レ彼岸と_レい_レ

彼岸到_レと_レい_レて_レ到_レの_レ字_レの_レま_レと_レ処_レの_レら_レハ_レこれ_レ義_レ不_レ
お_レり_レ又_レ二_レ義_レ不_レ但_レ体_レ用_レの_レ前後_レの_レま_レと_レ終_レり_レ

天竺と_レ日_レと_レハ_レ体_レを_レ先_レお_レり_レ用_レを_レ後_レお_レり_レ故_レに_レ酒

飲_レむ_レ茶_レの_レま_レと_レ唐_レ土_レ不_レハ_レ飲_レ酒_レ喫_レ茶_レと_レい_レて_レ用

を_レ先_レお_レり_レ体_レを_レ後_レお_レり_レを_レ以_レ波羅密多_レも_レ天竺

の_レ語_レの_レま_レと_レ訳_レと_レハ_レ彼岸到_レり_レ唐_レの_レ語_レ不_レ准_レ寸

也_レハ_レ到_レ彼岸_レより_レ多_レ梵_レ語_レの_レ上_レ下_レ波羅 彼岸 家

多_レ到_レの_レ義_レか_レの_レ如_レと_レ多_レと_レ入_レる_レ不_レ彼岸到_レと_レも

訳_レ又_レ支_レ那_レの_レ語_レの_レ格_レ不_レ到_レ彼岸と_レ翻_レり_レ彼岸

ハ_レ金剛疏_レ不_レ生死_レハ_レこの_レ岸_レより_レ但_レ繋_レハ_レ彼岸_レより

煩悩_レハ_レ中_レ流_レと_レ多_レと_レあり_レ別_レ救_レ苦_レの_レ一_レ心_レ之_レ觀_レよ_レ

了_レく_レ生死_レの_レ此_レ岸_レより_レ煩悩_レの中_レ流_レを_レ変_レり_レ但_レ繋_レ

の_レ彼岸_レ不_レ到_レと_レ玄_レ門_レ和_レ尚_レ心_レ經_レ講_レ訳_レの_レ算_レ祀

不_レ出_レり_レ○時_レ正_レハ_レ彼岸_レの中_レ日_レあり_レ年中_レの_レ春_レ夜
也_レも_レ長_レ短_レ 苗代 苗代 菜菔 水口 祭
る_レに_レ時_レあり

早摘水摘のふれかやせとて苗代の水足幣
かこころよく多るより後秋期長の説小幣串に

豆をうねね **種井** ○種浸 ○種ぬき
多ふるとりり 彼岸の茶十日不穀を水

不浸一彼岸後十日不穀を水一種を下
これと苗代といふ十七日強くる苗生 **和** 三まの五

用中言日を撰て種を水田不浸といひ
堀川豆 **種** のを苗代垣をありて今を種井不種といふ

國後の言は種井ハ **藍蒔** **麻蒔**
種を漬り井をいふ 上世麻 仁を五

穀の中を加ふ月令不食麻とあるを
今から本朝より上代よりこれあり **蕨** ○蕨蕨

○蕨 **山根草** **紫花塵** **朗詠集**
花玉極 堀川豆音

蕨の **狗脊** **蒲公英** **五味子**
吳名 たんや かね かつり

杉菜 **枸杞** **虎杖** **薊**
くこ さいこつ 薊 薊

連翹 **韭** **蒜** **胡葱** **野蒜**
れんぎょう しょう しょう げしょう げしょう

水葱 **摘** **薺の花** **菜大根** **花**
みずしょう ちつ さいの花 さいだいこん かな

曼草 **草** **若葉**
まんそう 草 若葉

末黒の薄
すゑくろのうす 春の神の焼くはれ小生はれをさき

萩の焼原 **萩の末黒**
あぎのやきはら 好まき 萩の初生

草芳 **角組** **苦**
くさよし つのくみ くる

蓬摘
よもぎちぎ 二月二日小株をよもぎ次

芦の角 **蓬摘**
あしのかく 五月五日小株をよもぎ次

接骨木 **花**
せつこくぎ かな

治不用の薬めを略しり
○

銀杏の花 若紫

紫草の心くしの目
ひまの相衣を海り

紅梅

○座繪梅 ○公重梅 ○黄梅
○櫻木梅 ○越中梅

初櫻

彼岸櫻

山櫻

八重さくら、小十月さくら
甲かう、彼岸さくら

一重櫻

糸櫻

ひんげ、ひんげ
おき、おき

姥さくら

花多く、葉も
あふ名づく

熊谷櫻

花の魁

児さくら

山さくら、小さくら
又小さくら

大櫻

櫻木、櫻木、櫻木、故小犬と
いふ、いふ、いふ、いふ

初花 花を待

漬て酒の肴と二月

の季より三月花を雨

接木

接穂 ○春分前後を節と花糖小
接木多くハ春分前後かこれ

接牡丹ハ秋分小接椿ハ

初雷

春分小
雷音を

豊秋分小雷

菊の若葉 葛の若葉

芳宜の稚葉

燕

乙鳥の巢 ○燕ハ春社
小来ハ秋

鳥の巢

古巢

雉子

野雞 ○漢の
呂后

の各ハ雉故ハ高祖雉

とくね鳥

雉子多
秘義故小

をわらたむ野雞寺

かねよ鳥

資之雨れやし子をばふともま

とやせ道を焼火小灰とやねる

白鳥 果鳥

この二ツのそんだけいふくはさる
とやせ一法祝祥さるは

歸雁

今ハ雁

引鶴 引鴨

春ハ引てぬ
といふさる

雁 風 口 若 集

㊦

麻ハ魚ニ而バ蛙の声最佳ルニ好ク山川清流
 の中ホウリクモ色蒼黒ホリク向ノ足子水カク
 積ノ先ホカ丸一夏の末ホリ秋鳴ニ又一説ハ麻ハ
 近來の稱呼ホリ西行ホリホリホリハニ程旨の事
 終信ホリホリホリホリホリホリホリホリ
 而ホリホリホリホリホリホリホリホリホリ
 ホリ長明ニ名取ホリホリホリホリホリホリ
 様ホリホリホリホリホリホリホリホリホリ
 八ホリホリホリホリホリホリホリホリホリ
 而ホリホリホリホリホリホリホリホリホリ
 以ホリホリホリホリホリホリホリホリホリ
 蛙 本草云蛙鼃莫狄友和 頰蝦蟇
 名阿末加因流 和名欽
 この良好ニク蚕飼ニホリホリホリホリホリ
 此ニホリホリホリホリホリホリホリホリホリ
 このホリホリホリホリホリホリホリホリホリ
 昔二月三日火牌の出代
 今三月五日九月十日

三月

季春八日月大梁子會
斗辰小建の辰をり

姑洗 律

清明 節

春分の後十五日
乙未をり

穀雨 中

清明のち十五日
斗辰建をり

季春

竹秋

廣韻

病月

五燭

嘉月

玉燭

禊月

南都

終禊令辰

續漢

弥生

輿義

櫻月

花月

花見月

玉

春惜月

經供養

攝州四天王寺太子堂の北隅
二月二日

供糧を修太子受教の神供養
是寺読書
未下刻聖霊院の白洲
不抄於神供養
是寺読書

宝殿の西小出所
をり
外二月十五日

②

寒食

冬至を去ると二百五日疾風甚雨の
節を寒食といふ荆楚歲時記

桓氏仲春火を國中禁注子季春火將出人
寸周礼○琴操云公子緹五月五日を以て父文

公これを哀と民を以て火を奉さるる今の人
冬至より一百五日を寒食と其説已に互異之

謝肇淛云鄴中記子推公子推公為火を以て
正三日漢書周拳傳太原公子推公骸を燒を

以毎冬中一月寒食魏武帝の附太原上黨
冬至後百有五日皆火を絶祀を以て行を

唐の附至遠晉天皆飲酒を滅云之
民向禁を祀至至りて雞羽を以て灰中二

入焦者八輒死を論是竹等の刑法を國朝
火を禁せと其見阜矣五雜俎寒食八元々

子推公が火を對し世の祀律木柎の火
如荆楚歲時の説其要を得り

春八榆柎の火を取る周礼唐榆柎の火を
取て以待臣子推公陽氣不順之鞏下歲時記

杏粥 寒食大麥粥をつり杏仁を研きて
酪と蜜を以て之を沃ぐ玉燭金匱
東粥 寒食麵を以て餅樣をつり東粥を丸めて
とこめかつく後りて東饅頭と以て注疑

杏粥

東粥

青精飯

青飢飯

楊花粥

桃花粥

上巳

金匱錄

洛陽の人寒食方花糝を粒ひ
楊花粥と煮す潜確類聚○居人
寒食子遇ハ楊桐葉を採り餅を深く煮き毒
して先ありこれを食ハ陽氣を資く道家これ
を青精乾石飢飯
と以て玉燭金匱
三言今日五節供のもの一ツ之
二月初の巳の日を上巳
とし三月辰巳は建を除日と以て不祥を除く
魏以後巳の日は拘らむ羅山支集二月令廣
義を引て上巳ハ十子の巳を以て辰巳の巳に
而次益二月晦日巳午ハ初二月上旬二

②

巳の白雨の故に卯十午の己の十二支の己
 ありきことを考へども今に至るまで推して巳
 節とすもの因俗の沿襲因循の習とあり
 愚按五子五雜俎云周公謹癸辛雜燬謂上
 巳當作上巳謂古人用日以十于恐上句無巳
 且不知西京雜記正月以上辰三月以上巳其文
 甚明不誤也但巳字原訓作止謂陽氣之止此
 也則己恐即巳字但不可以支為子耳これを
 以みよ上巳八十二支
 の己と疑ふべし

元巳

晉張華
上巳篇

重之

野客
叢書

上除

月令
廣義

巳の具禊

三月桃花水の
鄭国の俗三月上巳

漆酒兩水の上上おひて其酒を執て魂を
 招き魂を續ぐを禊を禊除す
 此ハ光源氏源十ノ左近の時三月朔日巳の日
 浦辺に坐し松工人形を立棹の具とす禊除す
 反りてはハ
 春とも云ふ

桃花の節

桃の酒

中酒古草
とさくさく

○所酒古草とハ二月二日内裏山で此酒は
 入る桃心藻波草
 ○三月二日桃花一斗外
 を採り井苑水之井糶六升米六斗これを以
 ち炊き酒は醸してこれを飲ハ太夫一千金方

白酒草の餅

蓬餅 ○田野子草
菱の餅 あり俗子母

子草と名づく二月始く生え葉白脆
 月二日婦女これをとり蒸搗き糕とす
 歳末とハ
 三代実録 ○二月二日花麴草を取
 蜜和して粉とすこれを龍舌料と云
 荆楚歳

時記 ○辛巳嵯峨天皇大后山崩
 壬午太皇太

后を深谷山に葬す
 是より先民間流傳しつと今年二日糕を造
 けり母子をさかぬ者織者等これを思ひ三
 月に至りて宮車晏駕この月又大后山陵の
 ありきの母子をさかぬ者織りいふ如し
 文徳実録

○三条大政大長の子供り人のひまをさ
 志のひてうへ心伝り女のおやをさしてひま

をいとおききりくちりたりたり三月三日のまの
の方三夜のゆらぐともくゆらぐはよあ。実方整

三月の夜ののらひらけりあうきけりあまのまのま

ひち後拾遺集俳諧かよひり三月三日草のまの

くく古くよりありし。笑沖滑和名故云本草

疏云菴菴盧子和名菴古今本草を考へて菴菴

盧子ハあを菴菴といふ草と云のまの菴菴の耳

似て菴菴もあを菴菴のまのまのまのまのまの

青くて花ハ黄少くもまのまのまのまのまのまの

草ハ河社今ハ大々文苗を用ひ本草の終まりて

文をりり唐の歳末節物三月三日則

由於小や饅人饅人あり寒食則假花鶏

耗饅子堆蒸餅餠粥あり周宣所識小篇唐の

と花三月饅人蒸候あり饅人ハ方らハ離人形の類

ハ離遊

○離事 ○紙離 ○流離

○離佈 ○離市 ○流離

○良祐見女離を玩ぶりのハ元物を贖ふのまの

一て枝の具ハ或ハ母子と名づけ蓋ておを以母子

の身体を扱て水辺に解除一或ハ桃花酒を飲む

も袂車を供ももの微意秋文徳文録ハ母子袂

具木の養あり○愚云離花の中ころよりの数

もやも離と云ふもりりころものまのまの離花の

下このまのまのまの秋ハ秋ハ秋官女所集まらまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

②

うさぎをひかたき名づけたるふえ

ひつろの神はいづれを夜のひさ 其角

紙雛のまきち月や三日のらん 吾山

主月を踏 唐人上巳曲江小都を傾て襖飲踏書

華年時記 三月三日踏吉鞋履を上

盧公範饋節義る唐の俗 油花下 洛陽の婦女

上巳小枝敷を水に流す 油花下 洛陽の婦女

油小枝下祝してこれを水に流す 曲水會 通

龍鳳花卉の形をまきちた吉く 曲水會 典

○流觴 ○巴字蓋 ○ひり主卿をどまり

○羽觴を流す 清前少待を伝り

講せられしや清溝水に盃をさう久く文人以下

これを飲し康保の清記をふも裁らるり又

雄略天皇元年上巳の日後苑に幸してわづり水

の豊の明りまき食と日本紀に記さるり 公事根源

○曲水の地勢ハ巴の字に似たりこの會周より以前

已ありまのち久く絶たるを魏の文帝又良

して高卑をいひ善悪は速よりて臣下の文

を流す羽觴ハ鶴盃とて用也海中の貝よりの

形鷄鷓小似るありこれをとりて答ふ定を穿用也

この盃は水小 沖燈 天子北斗の光明をとり

流すとて 撲囊抄 たりと昔ハ北山美岩

寺をとりて高きと峯に灯をとり 柿の長曼

少辰に供せり多し一条院の日記に又公事根源

上巳女兒の戯に柿をとりて 雛系に供す

髪をとり捕むと西陽雜俎に唐の別二月三日侍

臣に細柳園を賜ふこれを帯に 蔓草を免ふといふ

よりの秋 鞞 和名由佐波利 和名抄

りの秋 鞞 俗ハこれをかきといふ 秋子 會

半仙の戯 天竺 罽索 涅槃經 寒食

立宮嬪以笑て宴樂も明皇喚く半仙の戯といふ

天竺遺事 詞人高死際鞞の賦を作す漢武帝

後庭の戯に本千秋といふ祝壽の詞之後わをりて

秋子といふ 韻會 秋子ハ北方山戎の戯に輕趨を

習ふ 春の節長き繩を木に挂て土

三

女祓服メハツ一乃の上ノまけマケ一立てタテを推引オシも楚ソの俗
こんコと施釣セツとらぬヌ祭マツル経キヨ燭ソウ漆シとらぬヌも字
書カキを考カウるとトたタ秋アキ子コとト繩イテ戲シ今イマも字
草クサはハ実ミとト嘗ツケてテ草クサをヲ用ヨウすス新楚シンソ時トキ記キ施釣セツ

秋アキ十ジュウ二ニ奉ホウハ
潮干ウシ 三日ミツヒ今日こんにち海潮ウミウシ大オホ乾カヒくク泉州イム郡クニ
前マヘ二ニ三サン日ニチの浦ウラ特トク二ニ甚シ今日こんにち住吉ジキ江エ

干条カンジョウ 彦州ヒコシウ住吉ジキの浦ウラの汐シ干カン二ニ日ニチより九
日ニチ迄キ之ノ徒人タヒト鏡カガミまマるル蛤カキ蜷ナメを拾シロヒ

ひ小魚ヒコイサを取トルるル泥中ドロナカの蛤カキを取トルるルと
方言フヘンハハ二ニ日ニチの足タラシを踏フミかカすス土佐ツクの海ウミ硯イダ石イシ取トル言コト

雜マゼ終ハヤシ扱アツも吹草フキクサを引ヒキくク二月ニゲツ之ノ日ニチ五イ佐サの園ウヅ西ニシ寺テ此
海ウミ庭ニワより研石マシタをとりトルとトありアリとトありアリとトの汐シ干カンのノ時トキ列レツ

及ツキて西ニシ寺テの海ウミ上ノにニ登ノボりリ経キヨをヲ誦スむムゆユりリ今イマの世ノ世
ゆユりリハ園ウヅ主ヌシ从スまマの米地コメチとトきてキテ環ツク石イシを取トルるルとトありアリ

石山祭イシヤママツル 三日ミツヒ 江州エチウ石光山イシノカミ石山寺イシヤマテハハ公キミ宗ムネ
輪親リンシン音ネ聖セイ武帝ミコの勅ツケ願ガミ良弁ラウベンの廟ウラ基キ今イマ日ニチの

新宮ニウキヤ大明ダイメイ神カミ 新宮ニウキヤ大明ダイメイ神カミ 新宮ニウキヤ大明ダイメイ神カミ

神カミ寺テ足タラシ行ユキ 近津チカヅ尾ビ八幡ハチマン宮ミヤ 尾ビ八幡ハチマン宮ミヤ 尾ビ八幡ハチマン宮ミヤ

より二日ニニチに至イるル先マヒ朔日シヨクニチ二十八ニハチハチ所トコロ明神メイカミの汐シ干カンおおひひて
神カミ祭マツルありアリ神カミ輿ウ東ヒガシ寺テ崎サキ渡ワタリ所トコロ一ヒト山ヤマのノ荒ウラ徒タテおおはは二

日ニチ新宮ニウキヤおおははるル仁王ニウオウ八ハチ講コウをヲ修シユスス二十八ニハチハチ社シャおおははるル
神カミ輿ウ之ノ饌シをヲ供ケルスス晚景エンケイおおははるル能ノ藝ゲイありアリ長命チヤウメイ

太夫タフこれコレをヲ勤シメムムとト獅子シシ舞マヒ骨ハネをヲ狂キヤウムムとトありアリ
裏ウラ徒タテおおははるル公文クワンブ所トコロおおははるル二ニ日ニチ神カミ輿ウ渡ワタリ所トコロ終ハヤシ荒ウラ

控コウ現ゲンおおははるル獅子シシ舞マヒ献ケン供ケルありアリのノ回ウマ馬ウマ場バありアリ
おおははるル鏡馬カガマをヲ催メスス駿馬シユンバをヲ御ミ者シヤをヲ貫ス主ヌシよりヨリ

出デススのノ兩リウ側ソバにニ速ス法フツ師シ列レツ立タテまマ各カク荒ウラ徒タテをヲ載オシルル
太刀タチをヲ佩ヒ大オホ口クチをヲ名ナくク五イ人ニ或シ十ジュウ人ニ丸マル右ミダヒ執シツ細コ

鏡馬カガマのノ傍ワタリ負ヲをヲ尖ステテ傍ワタリ方カタにニ白布シラフをヲ懸ケルススとトありアリ
獅子シシ舞マヒもモ祿ロク一イツ針シをヲ錫シヤクふフ今イマハ古来コライのノ祭マツル式シキ也ナリ

廢クハシ二ニ朔日シヨクニチ新宮ニウキヤ八幡ハチマンのノ兩リウ神カミ輿ウ新宮ニウキヤのノ津ツ敷シ也ナリ
出デ所トコロ神カミ祭マツルありアリ二ニ日ニチ兩リウ神カミ輿ウ渡ワタリ所トコロ二十八ニハチハチ社シャのノ祭マツル

はハ荒ウラ徒タテ法フツ法フツのノ身ミ幣ヘイありアリ次ツギにニ神カミ酒シウをヲ供ケルスス
是コトでデ神カミ輿ウ還エン幸キヤウありアリ昔ムカシのノ寺テよりヨリ一イツ条ジョウ院インのノ后キチ

上東門ウヘトモカド院インのノ宮ミヤにニ行ユキルル祭マツル式シキ於オ八月ハチグヒ十五日ジュウニチ限リミ多タ

三

湖はつりしは伝とて心とまま一源氏物語を他
の料紙をうりて宝前より大般若の料紙を
本まやうけりて後廢取の巻より云
初一を當寺今と源氏の同とあり
粟津祭

江州鳥江川舟妻の素之今民家傲かき素祀
このしつあるは此の素武世は志は未希なりと
一乘寺祭 五日 八天王の社洛北の一乘寺東
の方よりありて神二座共
今日祭礼の一乘寺村の人鳥帽子素禰を忌
神の禰をうりて有幸と唱へて神
幸をまむ九神社の素祀神幸の時法人を
を拍或ハ扇をあげ楽哉くと唱へて神輿を
まむは上古の神語之今の俗徒仁寺の東西
かこもるは深く有幸の養未考し當寺此
夜宮鏡馬七番ありあり馬場は
走馬一當日ハ儀所の前は村民は
當目神 修学寺祭 五日 この近七郷素の
針出

の八天王を
糸式祥多と
ありある神清和天皇之帝の国忌の日を用ひす
今日祭る之糸式祥多を国忌ハ元慶四年十

二月
高尾の法華會 十日 安良比花
今日紫野の人集りて高尾の法花會
まじり果すといふをやまひ花と拍とを
久壽二年四月近日常中の見女風流を徳
笛を吹くは紫野の社は多る世に坂瀬と称す
勅ありて禁止す百棟抄○今日まじりひ花の神幸
辰刻より上賀茂南上野村の土民鳥帽子素
袍をまむ一或ハ吳形の装ひを各一村の松堂
に集る土人村里の中は草堂を造りては二倍
よりこれを守りてあるは此の堂はありて
てこれを禰るこれを松堂と号す是より先光
念寺の北上の所前の社に詣りて各異口同音に
安良比花と唱ふを鼓横笛の節を助くる

丹波國粟田郡
愛宕山の傍に
りみ神一素吉

の八天王を
糸式祥多と
ありある神清和天皇之帝の国忌の日を用ひす
今日祭る之糸式祥多を国忌ハ元慶四年十

二月
高尾の法華會 十日 安良比花
今日紫野の人集りて高尾の法花會
まじり果すといふをやまひ花と拍とを
久壽二年四月近日常中の見女風流を徳
笛を吹くは紫野の社は多る世に坂瀬と称す
勅ありて禁止す百棟抄○今日まじりひ花の神幸
辰刻より上賀茂南上野村の土民鳥帽子素
袍をまむ一或ハ吳形の装ひを各一村の松堂
に集る土人村里の中は草堂を造りては二倍
よりこれを守りてあるは此の堂はありて
てこれを禰るこれを松堂と号す是より先光
念寺の北上の所前の社に詣りて各異口同音に
安良比花と唱ふを鼓横笛の節を助くる

丹波國粟田郡
愛宕山の傍に
りみ神一素吉

の八天王を
糸式祥多と
ありある神清和天皇之帝の国忌の日を用ひす
今日祭る之糸式祥多を国忌ハ元慶四年十

二月
高尾の法華會 十日 安良比花
今日紫野の人集りて高尾の法花會
まじり果すといふをやまひ花と拍とを
久壽二年四月近日常中の見女風流を徳
笛を吹くは紫野の社は多る世に坂瀬と称す
勅ありて禁止す百棟抄○今日まじりひ花の神幸
辰刻より上賀茂南上野村の土民鳥帽子素
袍をまむ一或ハ吳形の装ひを各一村の松堂
に集る土人村里の中は草堂を造りては二倍
よりこれを守りてあるは此の堂はありて
てこれを禰るこれを松堂と号す是より先光
念寺の北上の所前の社に詣りて各異口同音に
安良比花と唱ふを鼓横笛の節を助くる

後大源菴の社下の所前の社に僅くありて、
 宇野村の松堂なる是より一の里正
 の前を若くは、
 過。邑本村上。今村の土俗今宮の儀は、
 を催すと上野村の如くありて、
 と此の社務及社目の家毎に、
 多の女の人着衣を脱て、
 して踊を止む。此の纏取の儀は、
 疫病多し、
 て神を勧め、
 といふこと又一説は、
 動も、
 故に、
 を祈る、
 このまゝ、
 唱ふも、

樂師寺寂勝會

七日より 野州河内郡子
 あり 天武の勅願

白鳳十年の造立大寺より昔、
 二月寂勝王経を講す 中古荒廢

泉涌寺開山忌

泉涌寺、
 修す、
 法會、
 九日、

吉野の會式

十日 大和國吉
 野山子

傍々、
 兩社の宝前、
 世以来、
 又云、
 云々、
 と、
 花又、

礼拝講

十日 後一條帝
 の所、

其二年、
 の宝前、
 三月、

三

講といふ月廿四日十禪師の社前より存を
 終ひ是又後堀川院元仁元年慈徳の并預言
 山家の説まはれし起り八世古叡山の天
 驕者之賦 此家の法を背てす 故に山王大師
 法の衰へるを歎たまひこの山を去り昇天す
 んと述宣りて山の中草木忽黄す大元大
 元元商幾して大官の法教をばなれ法苑八講
 を修し法苑と名あり後三塔觸る集會一又
 八講を修す以上高度ありすゆ東塔五谷を修
 終りて本礼法講より後十禪師の法教まで
 三塔の修終を新礼法講と名本礼法講八官
 法苑法苑一巻より八巻まで修行聖王の二
 宮より一座勤る元元後の中講院の兩院を執
 事勅進といふ精進屋を攝入といふあり廊
 神子といふめそのありの式殿をえ其之この礼
 法講より八巻といふありの稲素の足列を
 ありまの資料をせし能まを故に勅進あり

石清水臨時祭

南祭 ○山城國男山八幡宮
 天祿二年三月八日

臨時の祭あり南祭と稱す其の節毎年これをなす
 公事根元云先中の辰の日試楽あり并人行基の
 日とす竹枝を挿けり仁看殿のりより所前よ
 列り陪從連勝の百人衆子とて音出を合せると
 るとも十訓抄云一条院御位の時実方中将試楽
 二進来ありくまの巻を編りてくみ舞人子と
 一かていそ竹基のりより吳竹の枝をおと
 たりたり多いとめさたり人々を合りて是より後
 試楽のきりまは
 竹の枝を挿る 稲持の所出 新出供 社家毛
 利氏調進この日七条高津橋の東に大炊炬を立
 八人備ありく神樂のりよりとてハ火を立神
 奥本山 指をとり大和太治より七条通りを
 九条の所旅所に入ら社家並氏子供身入所旅の
 同四月廿二の日の日に至るその間旅人群衆又凡旅
 散錢米八田中米等島右京受納この二入の辺

三

の工地の主心とてこの神午の日此二の如選幸なるが小
 世俗ら多くとぬおろくをたぬとて雍州有志者奇場
 稻荷の所旅処ハ油小洛七条の南小あり弘法大師東寺
 を営ひの時八幡を玉地の神とて多し後稻荷の神
 出現とてく其守長者の家土寓年月を記して稻荷
 山に遷す今の旅処ハ芝の宅地ハ家礼の時神興る
 あり二十日忌古 **善導寺** 十曾 唐の終南山悟
 の遺風とて **善導寺** 真光明善導寺

大師の名目之階の煬帝大業九年癸酉子生唐の
 高宗永隆二年辛巳三月十四日遷化春秋六十九歳
 本邦東山禪林寺永觀堂智恩寺中善導院小
 松谷百万遍等の寺院に於てこの忌を修する

祇園一切経會 十五日 此の寺式當時汝法す凡
 を禪家ふる多しとて之を

去れど神供所は只経行堂の名のとありて供物を綱
 進するは是の遺風也 **難波** ○當社社古ハ山門
 二属一切経むり敷山 **花鎮祭** 是ハ大神櫻井の
 より修あり一ふや 二系をいと神祇

今小歳より春花の飛ぶハ疫神を散り人を悩め
 息をたれと怯んが為此の祭ハありとて神祇官を
 此の祭 **壬生念佛** 十四日 心淨光院とて壬
 生寺と稱又宝幢寺と号又中世三井寺に属故
 又まがぐ小三井寺と號号せり本寺ハ地蔵井ありて
 傍に鑑真の像あり元ハまがぐ南都招提寺に
 属ス開基知れど中興ハ一条院正督年中快賢僧
 都之後伏見院正安年中圓覺上人の寺に修始て
 融通念佛を修ス今まがぐ三月十四日より元四日
 念仏ありとの同五人俳優をたて世に壬生
 の跡をたんとするも又融通念仏の余流あり
 一難波拙子の俳優を用後西 **壬生祭** 通俗志
 仁工定朝分作二面ありや **壬生祭** 通俗志
 正とてとも列ふ祭なり

千本念佛 朱菴通
 熊野系ハ五月十三日
 圖の南引接寺の圖ナ堂ありこの念仏も融通念
 仏の余流之毎年堂前より普賢像の樓廂を修

三

寺僧一枝を折て諸司代に獻す則米三石五斗
 を賜ふを以て日念仏の料とす一説にこの法
 事ハ元刑人の為を修す故に諸司代より施米
 あり是追薦の爲なりとの説を千本といふこと
 ハひびき室の窟の日養上人冥途に至りて約
 ありあるを千本の奉都婆を釈園山に奉て供養
 をすこの処に因りて

比良祭

江州比良村の系に神樂

二基山王十禪師飛梅天神兩社に十禪師八南比賣
 村の法を天神八比良村の法守に兩社の社一丸
 あり村八南北十餘町を隔り又南小松村の法を八
 幡北小松村の法を十禪師天神合せて兩村三社の
 神樂三基同月同日これを奉りこれを比良祭と稱
 この辺往昔一田に山門依之故に多く山王を崇祀す

梅若祭

木母寺大念佛會

全日

武藏國葛飾郡（今ハ葛飾郡下総ノ郡ニ屬ス）墨田川梅杵山
 隅田院木母寺の縁起は往昔昔吉田少將惟房卿

の男七歳の時父の後を慈傷のありて遂に有るの門又
 人王をねらひ敷山月林寺を造りて修す十三歳の時
 野人の有る歌を東海の旅に赴く途中中病に傳りてこの
 所を早世と忠國阿闍梨及多く之を舎しを上菩薩の
 作業を多し常行念仏を修すを以て來今に至りて
 三月に音大念仏あり遺語を多し塚を築柳を植す今
 日法人群集し縁起をの如しといふ吉田少將惟房
 惟定といふ人公卿補任をもえんじ毎月も禱をば又玩
 子源の教期々の法下二駿河國の住人吉田小八郎惟定
 といふ者あり曾我兄弟を誅殺を討す夜この惟定も時
 致と戦ふ敵を得たり後惟定は子某駿州墨田
 川の辺を横死せしとあり成州墨田川梅若の事
 ハ後人これを陰會せしとあり亦一書に近江國
 依る木の宮の別當ハ後木の一族なり吉田と稱す女
 將坊と号す子梅若といふ父松井源吾なる追せし
 こと粟津に住る田臣六郎九郎が方一落しに津田の
 思ふく引され國東に下向し族中を死す云々云々西
 説も又考ふ處なり畢竟ハ吉田少將の事迹なり

額ハ揚若山王権現とあり今日社前
布紙の職をまき神饌神酒の祭祀あり
嵯峨大念

融通念佛の余流なり午の刻土人堂上
弘安二年始りこれより

勸学会 十五日 二月九月兩度生林寺月
法苑を編み紀典の儒者も持縣向をまき康保

年中大内記慶保風華なり
三条の北今の藪の

人麻呂忌 十八日 一月一今日
森その跡なり 官家所影

和歌者流の目を以て分の會
を修す南都柿本寺塔あり或ハ和州初瀬の近

妙光寺人丸堂あり木像ハ俊成の作なり播州明石
の地ハ石見

浅草祭 十日 八日
皇の宇守進中臣といひの過るありて氏荒國浅草

推古帝三十六年三月十八日作の三人宮戸川の沖
綱を下りあやみり月影をたれハ親世音

の灵像ハ即ち草を結み堂とありこの灵像を置
今浅草寺親世音をいふ三人の兄弟を祀り

三社大権現と崇人今日則三社権現の系ハ先
の昔日三社の神輿三基を本堂に移し堂前を排

物離子ホもり早て神輿三基本堂をせり氏子の
町を渡所浅草河門の外に至りて神輿を祀ふ

神輿の昔より各藝を能く隨身門を出し作の縁
物離子ホもり早て神輿三基本堂をせり氏子の

町を渡所浅草河門の外に至りて神輿を祀ふ

うつし後草川を漕ぎり一の権現へ上りて今日此
船ハ品川の西大森村の漁人系礼毎に出入るは往古

宮戸川あり漁人後大木林に接するを以今日の古
い所へを若くは遠まの神樂は是より陸地と本堂へ置

幸之今日後草寺雷神門の辺に於て其表を賣るを
浅草の **御身拭** 十九日 山城国嵯峨清涼寺に

の立像あり天毒見首羯荼赤梅檀を以作らぬ
今日開帳あり手僧白巾を以佛像を拭ひ拂ふこ

池上千部 十九日より 長栄山奉門寺
ハ氏州千束の

池上村あり三里余 岡山日蓮上人皇九代後
天皇弘安年中建立日蓮宗に於近辺第一の古寺

なり毎年三月十九日より十八日まで法苑経千部
續編の所著系諸多し當寺ハ日蓮

上人終焉の地之但遺骨ハ身處一葉 **御景供** 廿日
弘法大師の血影供あり仁和寺より外ま云宗の寺院

永代寺山開

廿日 江戸深川富賀團八幡宮の
別當大栄山永代寺 台にお
いふ三月廿日弘法大師血影供を修すこの節永代

寺の庭を修めたり法人は見とむるを山開といふ
若中樓つとまゝ又本社に備は正徳年中園女が

植たりしといふ三十六本の桜ありこれを奉仕とす
吟做せりる樹次方子枯とす今僅に四五本を存す

園女ハ大坂の人能治と名あり又社内酒造あり二
新茶を **順の峯入** 修験本山方られを勤

いふこれを檢校せり三井の長吏増長僧正を始
祖といふ峯と大熊野より葛城大峯夫より吉

野へ **小弓引** 地下より春時長日のところあつ
を他り本弓より射るを大

坂より小弓引といふ **田丸** 仁と鶉と
是堂上の小弓に准

花

- 花さより ○花曇 ○養花天 ○花の姿
- 花の滝 ○花の波 ○花の笑 ○花の衣

虎の尾

枝條尾端の葉短く
枝葉葉葉斑文あり

伊勢櫻

排之花のそり

江戸櫻

これに近接する花文編み
て葉長く下を高く伏

てんをそり伏見櫻又伏見と云伏を氏す假
借して関東より移る江戸櫻といふとこの説は
近遠に
遷遠に
移考す

鹽竈

寛文八年

金王櫻

一名優

といは戸流谷八幡の社地
あり流谷金王殿あり

右津櫻

江戸四谷拍
木村正寺

茶師堂の前より音成田右馬といふこの櫻を
ぞり留処拍木村あり右馬を記せ櫻を八幡人源
氏物語の拍木右馬

小假借り名づく

歌仙櫻

江戸深川八幡の社地
小あり車八前あり

秋色櫻

東叡山清水堂のより井の傍あり一
名大般若櫻ともいふ小細町菓子屋の
秋といふ者十三才の時花見よま

井戸端のさくら酒の畔 秋色

秋色ハ秋ハ俳名之の女其角が門人あり俳諧名あり
當時この句人口は憎愛を故に名づくけたる後法園小
あり枚挙多

二違あり

櫻将

なり紅葉特又同

櫻田 地名

櫻人

さくら人雑と云説あり

鞠櫻

花枝上あり

人丸櫻

夢見草

藏 玉 曙草

抽

○吉野草 ○多草

仇名草

藏玉抽以上
この名

吉野草ハ地名よりその名之吉草ハ桜とてく
ふつとくありきなり名づくけふ万葉ハ梅とて
小つとありきハ梅をいふ秋仇名草ハ

仇之と名こそまれ櫻をいふより名づく
桃の花

○垂桃 ○一歳桃 ○油桃 ○二十世草
○姫桃 ○毛桃 ○絳桃 ○所酒古草

碧桃

源平桃

金銀桃 漢名

西王母

三

八重ハチヘ大楠ダイナツ之ノ 桃モモ 葉ハ柿カキ 葉ハ櫻ウツギ

壽星スウセイ桃モモ之ノ 海棠カキ 睡蓮スイレン 藤フジ之ノ花ハナ

この本邦このほんこうより方かた中なか種たね材ざいの花はなと云いハハ紫むらさ荊けい花はなの

木キ之ノ花ハナ 杏コウ之ノ花ハナ 林リン檜ヒノ之ノ花ハナ 今いま本ほん邦こう西せい海かい

櫻ウツギ桃モモ之ノ花ハナ 小こ梅うめ之ノ花ハナ 石いし楠なつ花はな 東あづま之ノ花ハナ

五月ごご用もち之ノ花ハナ 利り之ノ花ハナ 兩りゆう之ノ花ハナ 木キ之ノ花ハナ

揚あき梅うめ之ノ花ハナ 馬うま醉せい木キ之ノ花ハナ 長なが春はる 沈しん丁てい花はな

辛しん夷い 躑しつ躑しつ 〇山さん之ノ花ハナ 〇岩いわ之ノ花ハナ 〇蓮れん之ノ花ハナ

〇淡たん黄わう之ノ花ハナ 〇紫むらさ之ノ花ハナ 〇環わん之ノ花ハナ 〇姫ひめ之ノ花ハナ

〇原はら平へい之ノ花ハナ 〇小こ式しき之ノ花ハナ 〇閑かん之ノ花ハナ 〇閑かん之ノ花ハナ

平へい戸こ之ノ花ハナ 〇或あるハハ琉りゅう球きゅう之ノ花ハナ 〇上かみ子こ檀たん之ノ花ハナ

紫むらさ候こう蓮れん花はな之ノ四よ種しゆ之ノ花ハナ 〇菱りやう浪なみ 〇菱りやう之ノ花ハナ

通あゆ草くさ之ノ花ハナ 〇下した之ノ花ハナ 〇菱りやう之ノ花ハナ 〇菱りやう之ノ花ハナ

茶チャ薜ヒ花ハナ 〇白山しろやま吹フキ 〇いい之ノ花ハナ 〇万まん葉えふ共ども之ノ花ハナ

糯もち花ハナ 〇俗よこハハ之ノ花ハナ 〇小こ米こめ楼ろう之ノ花ハナ 〇春はる菊きく

春はる蘭らん花ハナ 〇仙せん臺たい花ハナ 〇九く輪りん草そう 〇馬うま薊あざみ

金きん鳳ほう花ハナ 〇丁てい子し草そう 〇化あ偷ひん草そう 〇櫻う草そう

金きん菱りやう花ハナ 〇花はな麴こ草そう 〇草くさ 〇草くさ之ノ花ハナ

〇墨すみ斗と之ノ花ハナ 〇草くさ之ノ花ハナ 〇草くさ之ノ花ハナ

和判墨 こんぱん 眉作の花 まゆしやう 五形 ごがた 俗蓮花 ぼくれんが 茅花 ちやうが

青麥 あおむぎ 菊の植替 きくのかきかへ 若蔣 わかしやう 檉花 しやうが

菓耳 かみみ 菓荷 かみかひ 柿の莖 かきのこゝろ 三月蘿蔔 さんがつらぶと

茶摘 ちやと 手始 てしやう 三月朔日 さんがつしやうじつ 利茶 りちや 喫茶 ちやをのむ 白茶 はくちや

青葉 あおは 弥生山 やよひのやま 雲小鳥 うゑのこどり

變鶉 かへしやう 櫻魚 うゑいそ 櫻鯛 うゑだい 櫻鯛 うゑだい 櫻鯛 うゑだい

蚕 かみこ 蚕飼 かみこ 粟蚕 あはぐさ 新粟摘 あはぐさ 上り あはぐさ

鶯 うゑ 水落の花 みづおちの花 萍生 ふかひら 小鯨 こくわ 新粟摘 あはぐさ 上り あはぐさ

八十夜 やそひ 炒塞 ちやうさい 炬燵塞 たきかま ぬる時 ぬるとき 雙鳴 ふたなり

忘心霜 わしんそう 櫻衣 うゑい 裏山吹 うらやまふき 表黄裏黄 あはぐさ

青山吹 あおやまふき 表黄裏黄 あはぐさ 裏山吹 うらやまふき 表黄裏黄 あはぐさ

行春 ゆきはる 三月盡 さんがつはら

俳諧 はいかい 歳時記 さいじき 春之部 はるのぶ

春之恨 はるのうらみ 春の漢 はるのうらみ

春之恨 はるのうらみ 春の漢 はるのうらみ

春之恨 はるのうらみ 春の漢 はるのうらみ

春之恨 はるのうらみ 春の漢 はるのうらみ

桜鯛 櫻魚 櫻鯛 櫻鯛

三

能諧歲時記夏之類 戸 曲亭主人纂輯



夏ハ懶きり万物を寛修し
便生長する也 類名 夏ハあつこ

あつこ 日本類名

炎帝 帝

祝融 神

昊天 天

朱明 日

長贏 土

蒸炆 火



仲呂 律

立復 節

穀雨の後 音斗巽

小満 中月令廣義 立夏

首夏 初夏

孟夏 躡躡

如の花月

余月 月令

乾月 月令

正陽月 月令

己月 月令

花殘月 月令

得鳥羽月 月令

更衣 朔日

白重

或抄云夏衣ハ白重ニ随
とあり 卯月朔日より始む

用、せけれハ下小袖をまきこれを白重といふ
五日より帷子を用ゆ涼之と此ハ下衣をまきこれを
を一重といふといふ夏衣は二重なる池法也八月
十五夜より綿入ぎ生綿を用ゆ九月九日より綿入ぎ
衣之これを紅紫衣とも菊衣ともいふ十月朔日より
練衣を用ゆこれを冬衣といふ云々白重表裏
白挑 表白裏青 柳花 柳
花 卯の花衣 表白裏青 柳花 柳
白挑 表白裏青 柳花 柳
花 卯の花衣 表白裏青 柳花 柳

綿抜 夏羽織 下帯

五月五日より 女房

上下くひら色に條々を附帯之は洞中
の如く九倍も比白くひら下帯を用ゆ

四月朔日より下
帯を用ゆ 御湯殿記

青簾 朔日

翡翠の簾

藤次郎が着の葵を四月朔日翠簾よりけりて

故に青き此簾とてとぞの住まふ青きよの簾

と非根世女の髪とて四月朔日あはれ

をけりてとて云二洋衣の髪を云 **玉夏菊**

夏衣を季のあはれたる始に居下り御酒をたす

政を園一食の旬といひ皇の政と藤三の旬とい

はゆぐれああり内裏あはれしく造られし物南

殿とてけり世のふを新所の旬とやとや位と即

せのひと始に藤三のふのふを万撒の旬とや

とやけ四月の旬といひ侍扇をさく上建敷の場

ハ勝を雲とてとる作法 **仕立祭** 迎江園坂

まどあはれとや年中行事哥合 出取坂の

広筑の社祭に四月朔日とも或は初の子とも

はる所御食津の神との地大膳職御厨の地と故

當職祭の所の神を以ての地と祀と益と神の稻

食を司ふとてとる男女婚をなると云ふ祭に必

金湯を載り神とて不幸とて山社の間と婿

とる、比とを治せとて又城をのめ二枚を用ひ

三つは嫁まると若の二枚を用ひ神幸の後供まると中世

業平の花河の傍とて里婦笑厭面を贈りて枚枚を

主ぬ艶然のたけは固く胡芦まてとて **文徳實録** 後

れの云辺にの國筑広神とて中神おはれとて

の神の誓やと女の男とてとる教ふとてとてとて

つくりとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

藤次郎が着の葵を四月朔日翠簾よりけりて

故に青き此簾とてとぞの住まふ青きよの簾

と非根世女の髪とて四月朔日あはれ

をけりてとて云二洋衣の髪を云 **玉夏菊**

夏衣を季のあはれたる始に居下り御酒をたす

政を園一食の旬といひ皇の政と藤三の旬とい

はゆぐれああり内裏あはれしく造られし物南

殿とてけり世のふを新所の旬とやとや位と即

せのひと始に藤三のふのふを万撒の旬とや

とやけ四月の旬といひ侍扇をさく上建敷の場

ハ勝を雲とてとる作法 **仕立祭** 迎江園坂

まどあはれとや年中行事哥合 出取坂の

広筑の社祭に四月朔日とも或は初の子とも

はる所御食津の神との地大膳職御厨の地と故

當職祭の所の神を以ての地と祀と益と神の稻

食を司ふとてとる男女婚をなると云ふ祭に必

金湯を載り神とて不幸とて山社の間と婿

とる、比とを治せとて又城をのめ二枚を用ひ

三つは嫁まると若の二枚を用ひ神幸の後供まると中世

業平の花河の傍とて里婦笑厭面を贈りて枚枚を

主ぬ艶然のたけは固く胡芦まてとて **文徳實録** 後

れの云辺にの國筑広神とて中神おはれとて

の神の誓やと女の男とてとる教ふとてとてとて

つくりとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

住吉卯の系

初午 檜列住吉の系へ傍そり
卯の日の地へ垂跡とて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

この神輿ミコウ基瑞ミツキ敷シキの外より三の門ミカドより遷幸ウツリヤク生
神主及祓宜各ミコトノミヤ知杖チシを持ツこれをミせられまといふ
祭の日竹馬タケウマをミ旗ノボリ
をミ張ヒくミあり
大神祭オホカミマツリ 上知 大和國大和上上敷祭
所大己貴オホニギハヤヒの神

うと三輪ミルの神ノカミ之事根元ノコトノネは先世ノコトノの日使ヒノシ立タて大原野
のやうの祭マツリを八寅ヤチの日使ヒノシ立タてのゆゑユヱ八寅ヤチの祭マツリ
日の曉アサノトキ冬フユ六ムの祭マツリ祭マツリ祭マツリ大神オホカミとハ
大三輪オホミルの神ノカミうと大己貴オホニギハヤヒの神ノカミ
稻荷祭イヌワケマツリ 中知

山陰國山陰紀伊郡紀伊四月知四月ノチの日ヒあまアマ初ハツメの知チを用ヨウ入イれ
供社ミヤヂ家松イネノマツ本ノ氏ノ調進テウジンを神輿ミコウ基キ上ノ供ケまマへマへマの列
汁シユは神輿ミコウ五イ基キ御ミ旅ツ所ノ西ニ上リ五イと東寺トウジ南ノ門ノ内ノ
今イマの所ノふフ放ハくク祭マツリをツ接ツ五イ法ホウの神輿ミコウ各オノ南ノ門ノ向ムひテ
その上ノ安ヤス並ナリ寺ジヤウ僧ソウ各オノ御ミ供ケ所ノ侍シヤウ立タてテ放ハくク祭マツリ
の役人サツリノヒト甲曹カウソウをツ忌イ一ヒト左サのノ多タ長チヤウ刀タウをツ横ヨコえテ右ミダ多タ
御ミ供ケ餅ヒヤウをツ持ツげ又東寺トウジ地チ人ノ妻ウメに人ヒト寺ジヤウ中ノ以ヨリ祭マツリの
院ヰンより雜品サハシ供ケむを唐カラ櫃ツツ上ノ成ナリり上よりミくミ
来キりと神輿ミコウ毎スベテこれヲをツ供ケまマへマへマ寺ジヤウ僧ソウ人ノ相サウ上ノ
とらと出デくク幣ヒをツ幣ヒあり又マ護ゴをツ使シてテ終ハりて後

社家シヤカ英ヒコ氏ノ子ノ供奉ホウブ北キタの方ノ大宮オホミヤ通トウるを強ツくク祭マツリ
松マツ系ケイよりみ系ケイの橋ハシをツ大和オホノ大オホ治チより本山ホノヤマより
龍頭太リウツウダ 祖ソノ山城國ヤマシノクニ稻荷イヌワケ祭マツリの時トキ神輿ミコウの先ノ
かカ面オモをツ龍リウ頭ツウとツ祭マツリ外ノの祭マツリの儀ノ回マヒ八王ハチウの皇ミコとツ祭マツリ
龍リウ頭ツウ八田ハチタ中ノの社ノの神職ノカミ之ノの面オモ別ワケ統トウ統トウをツ祭マツリ
とツ祭マツリ名ナづクけるケルカカ先ノ板イタの徳トク抄セウ
正マサ注ツ記キをツ是ノ事ノ分ワケ秘ヒ流リウのノ説セツ也
山科祭ヤマカマツリ 上知

幼修寺コウシュジヤウの南ノの境内ノ住スミ還エン洛ラク傍ノの北ノの也ノ也ノ也ノ社ノあり
あり所ノ醒サメ醒サメ帝ノの外ノ祖ノ宮ノ洛ノ氏ノ末ノ娘ノの吳ノ神ノより幼ノ修ノ寺ノ
修シユ寺ジヤウの祖ノ人ノ寛ノ平ノ十ノ年ノより祭マツリ始ハジりて官ノ幣ノあり
しが今イマ絶ツてテ只シカ神ノ饌ノをツ供ケまマへマへマ今イマ土ノ人ノ宮ノ洛ノ氏ノ
の社ノと八幡ノの社ノと合ノをツ奉ホウ居ノ神ノとツ九月ノ廿ノ七ノ日ノこれヲ
おオもモらラれレをツ幼ノ修ノ寺ノ祭マツリとツ今イマの世ノにツ山科ノ祭マツリとツいハふ
山科ノ祭マツリ法ノ住ノ神ノの祭マツリをツ九月ノ九ノ日ノ祭マツリ祀ヒあり
神ノ俣ノ大ノ己ノ貴ノ太ノ王ノの二ノ神ノより本朝ノ神ノ聖ノの神ノ
八願祭ハツカマツリ 上知 八王子ハチウジ天満宮テンマンミヤ両ノ社ノの祭マツリをツ天満宮テンマンミヤ
の宮ノ山陰國山陰紀伊郡紀伊大己貴オホニギハヤヒ夫ノ其ノ北ノの里ノより

幼修寺コウシュジヤウの南ノの境内ノ住スミ還エン洛ラク傍ノの北ノの也ノ也ノ也ノ社ノあり
あり所ノ醒サメ醒サメ帝ノの外ノ祖ノ宮ノ洛ノ氏ノ末ノ娘ノの吳ノ神ノより幼ノ修ノ寺ノ
修シユ寺ジヤウの祖ノ人ノ寛ノ平ノ十ノ年ノより祭マツリ始ハジりて官ノ幣ノあり
しが今イマ絶ツてテ只シカ神ノ饌ノをツ供ケまマへマへマ今イマ土ノ人ノ宮ノ洛ノ氏ノ
の社ノと八幡ノの社ノと合ノをツ奉ホウ居ノ神ノとツ九月ノ廿ノ七ノ日ノこれヲ
おオもモらラれレをツ幼ノ修ノ寺ノ祭マツリとツ今イマの世ノにツ山科ノ祭マツリとツいハふ
山科ノ祭マツリ法ノ住ノ神ノの祭マツリをツ九月ノ九ノ日ノ祭マツリ祀ヒあり
神ノ俣ノ大ノ己ノ貴ノ太ノ王ノの二ノ神ノより本朝ノ神ノ聖ノの神ノ
八願祭ハツカマツリ 上知 八王子ハチウジ天満宮テンマンミヤ両ノ社ノの祭マツリをツ天満宮テンマンミヤ
の宮ノ山陰國山陰紀伊郡紀伊大己貴オホニギハヤヒ夫ノ其ノ北ノの里ノより

幼修寺コウシュジヤウの南ノの境内ノ住スミ還エン洛ラク傍ノの北ノの也ノ也ノ也ノ社ノあり
あり所ノ醒サメ醒サメ帝ノの外ノ祖ノ宮ノ洛ノ氏ノ末ノ娘ノの吳ノ神ノより幼ノ修ノ寺ノ
修シユ寺ジヤウの祖ノ人ノ寛ノ平ノ十ノ年ノより祭マツリ始ハジりて官ノ幣ノあり
しが今イマ絶ツてテ只シカ神ノ饌ノをツ供ケまマへマへマ今イマ土ノ人ノ宮ノ洛ノ氏ノ
の社ノと八幡ノの社ノと合ノをツ奉ホウ居ノ神ノとツ九月ノ廿ノ七ノ日ノこれヲ
おオもモらラれレをツ幼ノ修ノ寺ノ祭マツリとツ今イマの世ノにツ山科ノ祭マツリとツいハふ
山科ノ祭マツリ法ノ住ノ神ノの祭マツリをツ九月ノ九ノ日ノ祭マツリ祀ヒあり
神ノ俣ノ大ノ己ノ貴ノ太ノ王ノの二ノ神ノより本朝ノ神ノ聖ノの神ノ
八願祭ハツカマツリ 上知 八王子ハチウジ天満宮テンマンミヤ両ノ社ノの祭マツリをツ天満宮テンマンミヤ
の宮ノ山陰國山陰紀伊郡紀伊大己貴オホニギハヤヒ夫ノ其ノ北ノの里ノより

幼修寺コウシュジヤウの南ノの境内ノ住スミ還エン洛ラク傍ノの北ノの也ノ也ノ也ノ社ノあり
あり所ノ醒サメ醒サメ帝ノの外ノ祖ノ宮ノ洛ノ氏ノ末ノ娘ノの吳ノ神ノより幼ノ修ノ寺ノ
修シユ寺ジヤウの祖ノ人ノ寛ノ平ノ十ノ年ノより祭マツリ始ハジりて官ノ幣ノあり
しが今イマ絶ツてテ只シカ神ノ饌ノをツ供ケまマへマへマ今イマ土ノ人ノ宮ノ洛ノ氏ノ
の社ノと八幡ノの社ノと合ノをツ奉ホウ居ノ神ノとツ九月ノ廿ノ七ノ日ノこれヲ
おオもモらラれレをツ幼ノ修ノ寺ノ祭マツリとツ今イマの世ノにツ山科ノ祭マツリとツいハふ
山科ノ祭マツリ法ノ住ノ神ノの祭マツリをツ九月ノ九ノ日ノ祭マツリ祀ヒあり
神ノ俣ノ大ノ己ノ貴ノ太ノ王ノの二ノ神ノより本朝ノ神ノ聖ノの神ノ
八願祭ハツカマツリ 上知 八王子ハチウジ天満宮テンマンミヤ両ノ社ノの祭マツリをツ天満宮テンマンミヤ
の宮ノ山陰國山陰紀伊郡紀伊大己貴オホニギハヤヒ夫ノ其ノ北ノの里ノより

幼修寺コウシュジヤウの南ノの境内ノ住スミ還エン洛ラク傍ノの北ノの也ノ也ノ也ノ社ノあり
あり所ノ醒サメ醒サメ帝ノの外ノ祖ノ宮ノ洛ノ氏ノ末ノ娘ノの吳ノ神ノより幼ノ修ノ寺ノ
修シユ寺ジヤウの祖ノ人ノ寛ノ平ノ十ノ年ノより祭マツリ始ハジりて官ノ幣ノあり
しが今イマ絶ツてテ只シカ神ノ饌ノをツ供ケまマへマへマ今イマ土ノ人ノ宮ノ洛ノ氏ノ
の社ノと八幡ノの社ノと合ノをツ奉ホウ居ノ神ノとツ九月ノ廿ノ七ノ日ノこれヲ
おオもモらラれレをツ幼ノ修ノ寺ノ祭マツリとツ今イマの世ノにツ山科ノ祭マツリとツいハふ
山科ノ祭マツリ法ノ住ノ神ノの祭マツリをツ九月ノ九ノ日ノ祭マツリ祀ヒあり
神ノ俣ノ大ノ己ノ貴ノ太ノ王ノの二ノ神ノより本朝ノ神ノ聖ノの神ノ
八願祭ハツカマツリ 上知 八王子ハチウジ天満宮テンマンミヤ両ノ社ノの祭マツリをツ天満宮テンマンミヤ
の宮ノ山陰國山陰紀伊郡紀伊大己貴オホニギハヤヒ夫ノ其ノ北ノの里ノより

(四)

あり八王子の社八満宮の巽三斗の山腹に傳云
 菅神女年の時比叡山法性坊の室に入々學問を
 するに未休息の所は後人社を建て主人の目大竹
 を切るとの枝は又その扇枕灯ボを洵り枕を
 ぐおわりくこを此唱ふ俚語方言を以て一息を
 夫背一村凡百ありたり父老或はよつるをのこり
 又吾をこしげらとり世俚語も又他に出るもの
 あり

平野祭

この祭今絶えりある神を度り
 小野天神の西より貞觀元年土月

九日始々祭あり寛弘元年

江別八幡祭

四月十日陳時の祭ありとを

法花が書八幡宮八幡國痛を敷八幡村あり祭
 一本の神石清水公園 神社啓蒙 一条院の御宇勸
 清長他三年放生會を行つた 社説 長年中
 関白未次云の法花が書八幡宮を構へ時上の
 宮を移して下の宮に合せりとのうち

御當家御陣所とをその時今の枚より極る別
 當願成就寺 性古聖徳太子開基の寺院江別

四十八所ありその四十八の繪に此寺を建の人故に紙
 成終に名あり神社の傍よりを普門院といふ成終
 寺兼平といふ坊舎辛み寺あり一は織田信長
 の兵火より焚滅され氏子まじりて村外より
 々として舟本上田林の三村を加へ倒る四月中の卯夜宮
 一躍あり上の宮祭より下の宮祭より中間一日を
 此祭祭といふ花表と樓門との間より九十三圓の炬
 火を立て高六七間斗七度此使を合圓炬火の火を点
 村の祭太鼓も二圓の炬火を点り三社の見三人
 を拜殿より下りてその見をいふはを能くして拜殿の
 より拍子踏ありといふと云ふと拍子

多賀祭

寺説 八幡宮の神樂五基然新川を流す

二年 近は國土上郡ある神作特諾とて創祭四月二の
 日巳 午の日神樂本はより良の方一里むりに栗栖村の

大宮あり是所跡所之今日もの所は此處供奉の神社法津十
 二本神馬三匹祢宜四人神十二人隨男六人神主馬上とて
 後行むもの介氏子の村より程の造り花を物
 九二十六本斗蓋おの年々定むる神樂三基は御

坪の方宿置集の社を大社の御使として殿二人健児二人
 糸向の別先途捕十二人白うろく六人黄直無三十人
 綱度鏡六人神事の勢固ハ差根の城主よりお取二
 人これを習する社説これ祭祀の匠人を定るハ正月三日
 あり氏子の中豪富の者を撰て夜二令神主を
 伺ひこれを定むる匠人よりあつり夜二神官神主建
 る匠人をあつり此借束を撰く夜二四位一准一と夜
 習を定る一社ハ糸宿を一族風流を定る一とこれ
 信く

雑談

堅田祭

上巳 或説ハ祭の日上巳祭の神
 不詳江志云堅田昔柳

田の庄とつ又園の邊より北を今堅田とつ人里未
 曉この地伊豆の三崎の風系に似るゆゑ伊豆持況
 を勧請と山門の法性坊僧正等之の近官と堅田
 の祀に出志くハ伊豆持況の祭とつ一今もこれを
 与老カ一今も本居神とつ天文六年九月廿五日
 江川記書此の城より夜川に勧請也一天神の社是
 今四月子の日多あり今上の巳も多ハ神田殿神堅
 田の城主一代に伊豆も繼生見故ハ神田殿神を此所よ

手安の天神祭

江川野洲郡江邊
 の所より永居持

北村中北村三ヶ村の氏神ハ徳庵本月詳を明和
 年中より七百余年とつ又永保年中ともハ四
 百年以前延久五年十一月十六日永系越前
 建事その後延永廿六重年六月永系越前
 行修補也又明應七年四月十日同氏重秀政
 造るこの寺秀也越前下廿八方石余ハ
 依之本の同流とつ永系下江を依ハ本居神とつ四月
 午の日祭孔神雲二基渡御あり例祭二月十日より
 十日より連方より白鳥り仰り巻路ハ時の地以の白を定
 例とつ北所北村李吟出せの地ハ又平清成血の妻妓
 此地ハ出せ故ハ平家ハ奉り別物の大徳島氏子
 村ハ信来とつ別當実光坊の説とつ多ハ考
 杜本祭 上巳 河内國安宿郡國分村ハ神二
 齊大ハ神經付主命より香取大
 神是んと公の根えハ杜本祭四月上申の日ハ神社
 河内國上申の日使る仁和五年四月上祭也河内

四

志云杜平の神社は古市郡駒谷村あり式上
 安宿那ノ属とあはれも一向の所志はなま約
 谷園方木村版續なるを或会ふ分村大の谷
 所入當時杜本の宮と唱事ん古代杜平子形
 と坊舎子形ありく勅使来向ありしにや
 との近辺寺中より古瓦を掘り極出るといふ
 と一にも見え玉大本の樟ありとの本より
 とい春の花咲乱きなるぬ本立改神本と
 の本四十年ある山田の目屋とを以山のおぬ
 と昔九年といふ所の作の樟を伐りて斧の板
 柄よりあり俄く山一面焼出件斧の斧九希
 の内へ飛来す程なく昔九年妻病死は是火の谷
 所神の終向あり本々やと村中強劫しと
 あつと小祠を建て神楽を奉り神を祀
 めよりぬらぬ草より杜平の官の事
 るは処と昔九年方古き書おの證と
 のと昔九年もとの神作より死果やうく九希
 孫一人あはれ依親族も亦あまお穿身
 とり知なることの本を依り居るもの
 入神と日天を喰ひなれり近真國を村の板
 ひん所といふ所より信傳し奉り小社の上
 らひ九月九日神酒焼出を推と多ると
 本祭夏四月冬十月並上の申の日に
 たり取りて古き神社と考きおま
 たり取らるる筆記いなるより記あり
 山陰國野那野の神大
 松尾祭 上ノ酉
 山陰神社
 又市村

とり知なることの本を依り居るもの
 入神と日天を喰ひなれり近真國を村の板
 ひん所といふ所より信傳し奉り小社の上
 らひ九月九日神酒焼出を推と多ると
 本祭夏四月冬十月並上の申の日に
 たり取りて古き神社と考きおま
 たり取らるる筆記いなるより記あり
 山陰國野那野の神大
 松尾祭 上ノ酉
 山陰神社
 又市村
 上ノ酉云々祭式は漢中より
 事ゆきとてを掛仁昭帝兼知四年始
 とつと先國の神樂土基もの
 新造とこれを武脚樂といふ
 の東に捨翌日見童再び神樂を
 を碎き破りものを片を取
 揚子の兜といふ武脚樂民間
 して今日再び拾いと
 四

名勝志八幡宮寺年中環祀三日の使謂是二郷
 万代の勤役之山坐より并伎を曉陰より日使
 わり相列以山傍の孤村より来る美式系流の古
 因ト主人冠此系友をけ舞田力の中より橋を
 挿む彼木馬上騎ながら二度神庭を廻りて下馬
 せしめ一面上御殿相對して各再拜して夜神を刷
 ○日の使八幡宮方の神を人法兼三年まで猶
 勅使の養あり同甲年共乱よりく退轉を并賣
 瓦金園戸の院勅裁をア下一在地の神人れを勤
 むる間吏の王民御先の役より弥陀寺と号し白
 杖を指くも羽本津より知る去年改馬長神巫奉
 人波分司藏人司先の色堂を吹敷を又
 細男といふ三人の形ありされ武内守良の神と
 多む今絶よりや明月紀建仁二年四月三日山
 民家急ぐ経営と毎年おれありそのた橋を流
 古橋大文路より八幡の山下まで大河橋を流
 二山傍より八幡の山下まで大河橋を流
 今れ橋本より山邊迄といふの使を勤る日
 と稱しその人を日長老といふ一々の上首と
 齋を長老とといふ宛とて家富の輩より
 水屋の能四日南都水屋川の南水屋の
 社ありなる神三座素戔嗚
 稻田姫之世祭八伏見院の御宇疫病流行より
 ちめて行なふに神樂ありけり今人申
 樂四番あり地人能を

廣津龍田祭

四日よのあ社大社の國ありわの目察勢二年二
 度り了使の前の日事息風神の来より

擬階の奏七日 奏して奏のてん公事根元も
 流くを加階をられと後

二月卯見の時の成選の種尺を二者より持多
 大臣奏同まらあり列見延引の時ハこれ延
 事果せの短をえの如く灌佛 佛生會
 檀入を早と退か

○竜華會 ○仏産湯 ○甘水 ○五香水 ○九會
 法寺院灌仏今を修定法品の花を以小堂を飾

これを花堂とりの中より取らざりて釈迦像を安置
 して甘押木の香木を灌ぐ周照王廿四年甲子
 四月八日中天竺より来達多迦生のとき竜花を
 とつてこの竜花樹といふ木の下より弥勒のりり
 正覺を喝へゆひ世に三度説法のまのりこれを
 竜花の三考といふ四月八日釈迦降誕の日うら
 釈迦を敬奉り當名弥勒の奉り結縁
 とすこれ四月八日を直り竜花まつとせり○武江
 ふくこの日小餅を製しこれを指腹の如くひら
 めく上へ餘を成りて佛の徳をこれに頌すとい
 り又鼻を固くともふ赤外花を必佛の花瓶
 といふ一説よりて門もまゝとて昨日夕卯の花堂
 市中より花堂用帳八日 仁列比敷山あり
 多し 花堂用帳八日 今日法人来詣り
 女へ常し敷くやとてをひきも今日許り
 赤坂中花摘の社に詣りむこれを花摘といふ花堂
 を造りて小釈迦の 花摘 赤坂中一社教の母妙
 洞像を安置す 花摘 徳婦人をかゝるといふ

今日四谷の徳法花三昧を
 遊生これを卯月まつり 花摘 徳婦人をかゝるといふ

ふくまるとして世時羽虫の葉を匂ひ又餅を匂ひ
 これをまされ餅といふ或は香をとり○香を
 毛をぬき香をとりこれ其又ひむらじら板をこれ
 の上の香をとり 雁首首説 ○卯月八日を交
 えて七月十四日ふくまると香を入るとし初め初氣の
 葉ハ羽虫をまらんぬこの葉ハ板本の股に滴る水
 を初氣の葉に用ゐるその水はくくまらるる
 く滴る澤しおき後にはどろろくつふ竹のよひ
 滴る水も用ゐるこれを壺水といふ 雁首首説
 され初めと同抄し春の香をわねられとも今も香
 へ入るとして初めこれをまされ餅といひむらじら
 ふくまるとして香をまきぬき香を水の中
 りその中へ植をけり水を入るる下り水といふ
 板の間にふくまると香の中へ水を流して古き餅を流
 さんふ 退堂の呪八日 仁戸の信四月八日 徳法
 をもり 退堂の呪八日 仁戸の信四月八日 徳法
 をまきもふ掛り香木といふ

四

トシ
ニ
ハ
月

一多のく孩ひれを後焼のらりあふりたれ
 八其虫を退くは武は倍差実をへんくもつり
 謂らるゝの實を以て送る弾丸のつらむくの音あり
 ねよまつく又三法ももつた又同日方寸紙よりとれ
 卯月八日の吉日にまじり虫を成致せしむとてとて
 極楽庵厨の柱に文字を通りて送るこれ既と退るの
 呪こといひあつたやめり卯月八日及まじり
 虫又小書に詳ふあつたもほららむとてまじり
 以て祀を傳ふこととて
山崎祭 八日 山城國難波
 八幡の傍に
 久しねと姑くしにね
 わり大山祇命（雍州府志）延喜式に山城國と稱は
 の國の境に疫神を奉るといふこの社とてや又山
 城國酒解の神社一坐（注）亦山崎の神と号（延喜式）
 天神王子の社大山崎山の山よりありなり
 その御子八王子今土人本居神とて
 疫神を奉るといふのこれく今日世に童使といふ
 正あり今式に日使の所記に（名勝志）延喜式に
 仁二年四月八日午の別水毎夜敷くと云とて未刻出御

この辺の辻にお二社（天王社 酒解社）此のを清きもの中一方
 頗田樂未の供奉を副（土民奉せむを言ひこれをとも

と思つた土人山崎の神と武塔
 天神（天王）とを合せむとての祀
地主祭 九日 清水
 地蔵

近の末より神樂午刻還幸とての後柳屋由末の
 奉養とて康富祀とて地主の古藤所（白山通）

五條の北より今右地蔵の存せりこれとてあふの日
 志つて後書堂の茶神樂を奉るこれ旅所を奉

〇地主の神弘仁三年四月（延喜式）
 田村將軍の美を清水寺の法守とてとて寺

後神社考（大己） 練供養（十三日より十四日）
 貴の垂れとて大和國當麻呂

中が娘の忌日の中が娘とて善心尼法知といふ
 供養の縁起とてこの末速に法（法）の法（法）の法（法）

〇この傍に和訓良福寺村の人々（難波）のり永
 觀中敷山とて此法を奉るなり（法）の法（法）の法（法）

本ハ此處（當麻呂）として法知尼の草庵の旧跡（寛弘元年）

一余の以信都美寛印と名ふ所より本寺と
 天皇の御面とを賜りて同二年三月十四日法如住
 廿五并の御面とを賜りて同二年三月十四日法如住
 生の目を以迎接會を修めし是則櫻川の花巻
 院よりくみせ而て一説に四月十日八日とありて
 法巻を修めり
 伊勢の神衣祭 十四日 神祇令
 日ありもつり
 この世より神服を修めり三河の赤引の神調の
 糸を以神衣を織り又麻績の連より糸麻を
 うりて補布の和衣を織り神明より
 をりてこの糸を以てす **公事根元**
 高野花供

廿日 高野山宝亀院の住持代りたるより於てひて
 色の御衣を大師に奉りこれを花巻と名ふ
 學侶方の信法師を修り花を供するの里
 大師の御衣を更ぬる日
 千園子 十六日 一奉千徒より
 と同日ありゆきあり 作江刺三井
 寺の息子母神へ今自法人系誦をらの神一ふの子
 あを以て以て子と名ふ一子を供
 日光祭 十七日
 ありありゆきあり

十六日例幣使野列日光山系向拜礼の義あり申の刺
 神輿三基所官を以てより新宮の拜殿より幸あり
 これを宵宮と云ふ三基堂の前より例年の奉を
 奏せし程十七日巳の刺を御旅所より次
 御祭礼供もの行装あり新宮より御旅所へ至る間
 九十五町又あり兵士鳥兜陣を以て職士赤面の大将と
 様田彦の命を表し柳子氏田樂法師神木男八女
 三編馬上系袍裳給社家馬上束帯御神馬所より
 御旅所甲曹童子御騎大鼓鉦鼓鼓官任神人
 伶人奏樂等有りて御旅所より御旅所へ至る間
 素禰御本社神輿白張百人奉禰廿人山王の
 神輿白張百人社社人麻多羅神を連白張百人
 社社士人行者山伏群以て御旅所より御旅所へ至る間
 間東遊奏樂未終りて神輿還幸御本社より
 日光三社とハ新宮大已貴より流尾
 田心姫命本官味難高彦命外より家元権現と
 下照姫命三社の
 和文祭 十七日 紀列和文山
 祭礼ハ三月三日あり

東照宮の御祭一名雜賀祭といふ元和七年酉辛年
紀伊頼宣卿の勅請一の所へ山澤をの并相撲流
瀧馬ホあり又坂下の土人太刀を佩うらを摺うく
踊躍をなせしれを雜賀踊といふ今日神も必用の食
あり菊蕨を剣力の如く切るく一方左の如く味
嗜を用ひ一方右太皇の務を付くはく是を割養

宮の宮祭

申午 血江國野園那あり小津の
神社と号す神体ハ宮加えれ

魂へ祭

久世祭

申巳但ラ 山陰國乙刺郡上久松ふ
わり妻妻明神といふ

式未詳
與我万代終の

向日神祭

辰日 山陰國乙刺郡
西の園の辺ふ

あり當社の額正一位向日大明神と堅二つふふふを
道風の筆へ西園民家の例へ花表あり當社祭礼の
祭に社人衆金山を院へ移し振敷をふ又祭の
日必神馬をこの滝へ奉り是神出迎の比ふなり
おみくし神月統る致雅列府志又天武天皇五と又素
を盛鳥その孫大歳乃子母を須知比女神名帳

雲岳寺千部

道本山雲岳寺ハハ
深川あり十八檀林の

その一寺へ用山檀連社雄峯上人雲巖和尚ハ上總
國小糸のくうく里見氏へ寛永のそめ江塚の系法
小大仙道を達せんといふく四虎を勸進く
土一貴を運ぶその六十念を授け又血脈をあら
く結縁せぬ不日く廣江忽ち陸地とす今
の雲巖和尚そのうち廿二世珂山和尚の時明曆
三辛酉の春回祿まうて今の地よりさる當寺毎
年四月朔日より十日まうく弥陀經を讀誦し布
衣多給 法苑山澤心
寺ハ雲巖

深川淨心寺千部

申午 法苑山澤心
寺ハ雲巖

の東南二町をくはあり中奥の用基日念上人より
日蓮宗深川才一の太寺なり毎年四月十九日より
廿八日まうく法苑千部讀誦ありこの良客殿の庭を
ひくまうく徳人ふ見くむ山あり又湖入の池あり方
田の丁此まうく
長日花山の地なり

山王祭

申の日但ラ 近江の國
田枝の神社

八邊の邪坂本ありあり神大已貴おほいけの所謂上の
 七社八太宮大國主命おほくにのみこと二の宮麻多羅神及び
 金比羅神これ天台山青龍寺の徳守とくし准のり也なり
 聖太子八幡大井やまのふた八王子灌頂大法王子かんじょうだいぼうし
 これ補陀洛山を表さ客人の宮白山及神のヨ大
 その去來諾の大神之山王の行化を助け北陸を出
 ここの山やま未況いまわありあり客人の宮といふ十禪
 師八地藏の應化おうげ大師この山を開き成物の後上定
 公院を創つくむ齋山東の堂あり十禪師をまゐり
 九人をえりまほく一人を缺かく安直やすちをほく教しよ満
 り十禪師のじゆんし妙みよ慈じを歡かん拈ねんとと忽とつ然ぜんととくく又またをを
 故ゆゑは社をその所ところへ建たて祭まつ供くとこれを十禪師とい
 賢けん中の七社牛山子うしやまこ大威徳大行奉おほいけだうかうほう日比山ひつやま早
 尾おしハ不動氣比ふどうきひの聖觀音下しよくわんおんげ王子ハ虚空蔵こくうざう王子の
 宮の殊聖女しよせいめハ如意輪にぎ下げの七社小禪師せうぜんしハ弥勒龍みやにやくりゆう
 樹惡王子じゆあくおうしハ愛深あいじん新行しんかうハ吉祥天山きやくじやうてんざん石鏡いしきやうハ弁天山
 未いまハ人利支天にんりしてん汲ひの宮みやハ不動ふどう電でん殿でんハ大日たいにち以上いじやう上かみ世
 一社いつしやハ○先まづ三月十八日山王さんおう祭まつ祭まつの神かみをその所ところへ

於おくく代取たいてと四月三日しがつさんじつより西教寺さいきやうじの例れいの松まつは
 小こままりけく又山王さんおうの社しやあり直夜ちやくや入いり法ほふ念ねんを
 とり大はの四の宮みや立たつ祭まつの日ひ神かみ業ごうの兩りゆう大だいはより大
 宮みやの拜殿うらみだん返かへり入いり○申まをの日に列東坂りやくとうざかの山王
 あり午うまの刻ときと田た本ほん法師ほふし柳やなぎ子こ意い比ひ敷し止との念ねん奉
 礼らい使し前まへ耻ぢと神かみ連れんを連れん七社しちしやの神かみ連れんの念ねん奉ほう礼らい時
 奉ほう後ごををああるるひひ疑ぎひひままてて舟ふね二ふた舟ふねハ山やま門かどの信しん
 後ご枝えだをを構かま羽う幸さき簾すだををたたれれてて是こゝををままるるをを構かま枝えだ
 浦うらといふ田た本ほん法師ほふし本ほんのの所ところにに於おくく執しやく事じををままるるのの日ひ東とう
 の山王さんおう町まちより供くわ物ぶつをを目め吉きちの社しやにに献けんじじ奉ほう日にち天てんの宮みや
 座ざ主しゆの御室ごむむにに至いたりりこれををかかおおおお音ね東とう坂ざかににあり
 と供くわ物ぶつ又または羽う膳ぜん所ところの地ち人にん御ご供くわ物ぶつをを献けんじじ奉ほう日にち天てんの宮みや
 二艘ふたふね湖うみ上かみにに浮うりり音ねをを奏そうくく件けんの供くわ物ぶつをを献けんじじ奉ほう日にち天てんの宮みや
 是こゝをを御ご供くわ物ぶつににままるるのの日ひ東とうのの多たくく儀ぎををままるるをを構かま枝えだ
 儀ぎの假かり面めんをを被ひつつ様さまをを奉ほう日にち吉きちの役やくををままるる中なかの社しやの
 神かみ連れんの儀ぎにに供くわ物ぶつをを納なめめりり後ご湖うみ水みづにに撒ち大だい宮みや一いつ社の
 神かみ連れんハ神かみ連れんのの所ところにに是こゝをを後ご神かみ連れんをを陸りく地ちににままるるをを
 神かみ馬ま相あむむははくく連れん中なかの神かみ連れんのの所ところにに奉ほう日にち吉きちの役やくををままるるをを構かま枝えだ

㊦

七社の神樂の坂本の地を昇て神樂をへん今日
 山門に属する所の供人五極威をさすひ神樂を致し固
 る信誘ふ山王系に敬ふみわれの寒の結の今日のこと
 へととれ人を害するふらぶの致す夜の夜いふこ八
 王子の神樂を致すむ急い山坂を下りて七社の神樂各
 本社七社の板敷居目林山室おの七十年猶ほしてはそ
 く足づくがごとく青光徳をり九月中の申の月八王
 子三宮の神樂を八王子山にお敷く早にえおき四月
 末の月よむく件の二社を神樂に上りもを午の神のよと
 り八王子神樂の元山堀ふ遠くおく階下遠く低く
 神樂半ハ拜敷あり半ハ拜敷の桐子を越く外ハ
 外神樂の先の方板柱をこし合図をゆる板を
 後とれハ神樂さうはふ流のりハ神樂早敷十人
 並居く中ゆく清く直く山坂を下りて誠く生死
 をこれ一時に先むこれ八坂の土人終り後する不
 れを神樂と落しとて下り終るく本社を二宮の拜
 敷に安置と二宮の神樂を池敷に上りしをこし
 近年未の日の晩とす十條師の神樂も又同下未の日

二の宮八王子三の宮十條師四社の神樂を大坂町ふらり
 一も同村致し固の式あり大官取まき客人の宮は六
 宮の拜敷ふ上り奉る云ハ同長れ公人各自も備束
 の刺ぬき二條が袋袋を以取をつま刀を佩との
 余敷十車甲申日を忌み陰長刀をおくその所を
 致し固し神系ハ武器を立片くねく終夜致し固
 の板敷をみく各下系とこの目系低園の社より
 供を捧まりく酉の刺執儀とこれを未の世とす
 等もふ乃く宵官儀とすあり大坂町四社の神樂
 を石垣の隙へハ石壇の下より板ゆく神樂のよの
 方の捧揚をおせをくこれも又合図を行くハ社一
 同に居ると設けく神の役令の所々に來集
 しく時刻に至れハ獅子舞大坂町よまう二の社三の
 宮と次才上流く退く次ハ田楽法師は袋束に差
 笠を被りて舞を施し神樂を拜とこの時公
 人取ぬねとす一おとく志めのう仕とすハ田楽
 舞を脱立馬帽子をさすくうひさきとの意ハ
 殿をさすを合圖ハ神樂を落すと七社の神樂昇

中よりよりをのりてくもる取納所のお氣の
 宮より氣遣も亦おひ是より此舟の如く神樂を
 並べ大宮の御殿へ延幸七社合をささるる日申の日
 山門の大虎棧浦入の儀あり云々公人甲曹ゆく流位
 を致し園と棧浦のあしあひと獅子氣吹ふ云々
 宵宮より勅使御系向當日より御津雷勅使へ
 急の遣ふ云々といふ人皇七十一代後三條院延久四年四
 月廿三日始くおのの官幣をささるるのり一廿二社注
 式一々或は二十に代圓融院貞元二年四月廿六日
 始りて上御并外記史記司をささるる云々といふ

○九神の儀一ニ音の讀よ下て系勅の輩
 石のをも居へまり集る三塔の公人入敷をあつため
 未の刻斗よの宮より柳を後を藤成末常渡成
 女官唐お教申さく各馬上七夜まの儀至く柳を
 後せん云々この節も社唐兼春日おまつり云々社家
 の拍掌をたたく大宮おの藤を勅をささるる云々
 と神樂各々をのりてくもる昇おのの儀後のの儀負石
 のをも居へまり云々神樂の如く八拍をささるる云々

おいつ神樂を弘まをせとも又は後をのりてくも
 この神樂の舟八湖邊七浦より毎年これをささるる
 らり奉請の社より神樂の儀あり七社神樂の如く
 豊丁例年豊進これを勅を勅む今日の勝
 負の儀柄を唐教これを勅を勅む今日の勝
 くより是をを紀りて七社唐を紀りて神馬より陸
 比還幸といふ儀あり日吉法を紀りて儀云々云々
 月のおふれハ琴の御館大聖本を以て神幸の祝
 祠を奏す唐場より於て先盟の如く恒世の儀
 粟の御供料をともて神樂を勅をささるる云々
 天皇延暦十年云々又御舟お始りての延暦年中
 洪水以後の例云々七社の神樂へ御供を勅と
 各七膳献供の式年々神樂昇る輩ハ唐場へ上
 り陸路を奉社へ返り西ハ高野を背修学を佛
 捨寺田中山中の人東ハ大徳志賀野飯平苗麻
 雄琴作本乳母お申おの主人ハ神樂弘ハ若宮の
 渡おのをささるるより上ハ渡といふ所の主人神樂を昇り
 炬火挑灯より奉社へ還御あり聖面の日御の神

四

とつて大坂より事り神楽を奏し
後りくは神楽を納るなり **國祭** 中申 歳
の國

天智天皇の御宇四月吉月
をさるる御宇より所見あり又和同年中紀あり
國司これを檢察せしと見えたり今日國祭の
祭儀の本おふるもさるる國の日のおふるもさるる使を
まゝも走馬を執り相つるもさるる **公事根元** ○が
大神の山嶽の國の地を神さくしはさ中の申の月を
國よりたつるもさるる中の酉の月内裏よりのおふ
と昔おくるもさるる書くるもさるる **岷江楚** の
かまふ故

関白が後詣

中申 初度より八月次を
撰るもさるる

孝融院天禄二年九月廿六日攝政右大臣源徳公が
後詣のことありこれ後國の人のおさるる詣の始なり
このまの必が後詣のおさるるの目ありまゝもさるる人
もさるる地下殿上のお馳あり白母の御幣神室の香
根やりのおをおいもさるる **菅原** 御幣とらへ物を
ゆい具の上もさるる新軒をつらぬ社にゆく神樂あり

祢宜がうらをばつたれり冠り
東に求ま後河蘇木あり **公事根元** **菅原を撰**

同 行列の中より大なる菅原を
さるるひく渡るをいふ **が後祭** 中申 歳
の國

酉 葵のお ○御形の日 ○葵うら ○ **熱田**

○未の日と郷陣よりさるる大層をいふ **教** 聖のことと
作、當日の使の近侍の中おたつとい昔後のおあり
より今日人々葵様のうらをいふもさるる **松尾の社**
司方の目さるるまきりこれをもさるる 欽明天皇の御宇
よりばおさるるもさるる下鴨の御祖上おさるる **別雷** の
おさるる御祖をい玉依姫よりおさるる **建角** 命のおさるる
あつ河原のお川の辺におびけり川より舟の矢一筋
流れり玉依姫が夫を取て我が家の棟を築きまゝ
まゝもさるるありもさるる男もさるるもさるる父もさるる
もさるるもさるるある日酒ありてさるるの鬼もさるるお
さるる父もさるるを教けたれり思ふの血を虚空に投て衆
の血根を断りては天神の御宇として **菅原** 天をさるる
を登りては是則別雷の命もさるる **丹塗** 土の矢の流るる

④

以神と祝れの人を **筆操** 上賀茂中の酉の日賀茂の
 貴紅も又これを傳へ酉の末午の日西賀茂の賀茂の
 神を代へ松と並へ御生所賀茂華一斎宮惺屋及大宮
 の賀宮を攝へ賀茂平人らしく勅書をかき末の日
 假殿へ進賀申の日 **白絹** 當日音楽不^らず
 の御生所賀茂と桂枝を禁^らず賀茂及高妻の
 家へ **轍** 則^り所^ら賀茂 **加賀** 賀茂の比人 **山**
 それをうく **春** 賀茂の賀茂 **震** 賀茂の賀茂
 賀茂の **春** 賀茂を衣領 **賀茂** 賀茂の比人
 これを **賀茂** **賀茂** 今日 **賀茂** 賀茂 **賀茂**
 と **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂**
 凡^そ賀茂の當社の神賀茂 **賀茂** 賀茂の神本 **賀茂**
 玉依姫の別雷倉を度申 **賀茂** **賀茂** **賀茂**
 生れ **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂**
 一^り御生所賀茂 **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂**
 賀茂 **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂**
 東御賀茂 **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂**
 年 **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂**

神祭

○忌 **賀茂** ○神取 ○神 **賀茂**
 右の御賀茂 **賀茂** **賀茂** **賀茂**

三枝祭

三枝祭 **賀茂** **賀茂** **賀茂**

賀茂の神 **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂**
 國 **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂**
 別 **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂**
 の **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂**
 の **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂**
 未 **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂**
 年 **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂** **賀茂**

このこと既に合ふまのれは
是公の再身とや見え居
中山祭 中西 京三條栲蓐の
地あり世々石

神と祐をもち神豊石楠奇石窓の命今六角堂
の南栲蓐の木と近きあり石上寺とく兼邦百そあ
よ二條大宮八幡の中山太神とや三井寺山の院
よ西の寺新羅明神是へ歸盛公事根元ふ永承六年
六月十六日神社を建幸一同六年十一月八日ふ後三位を
授らる後冷泉院天喜元年四月よりめく官幣を奉
らる是四月中の酉と三井寺に於て有音

送我祭 中西

新宮祭を修む是新羅明神の祭ふ
白雲寺也其後況の事ふ例ふ神樂三基淺深寺に
あり衆の月日送送もこの他よりある寺ハ中下あり
とらども神地は屬せぬ入清涼寺の栲川ふ類と電
宗ふといふ蓋以ありは日一基の神樂 冠する令風
ハ也宗山より下まこの令風下を修して神幸を
促す一基ハ野宮大御神とて野宮より遷幸云難
談抄にけれも五ノ奉居神とてその事よ主人城を改女
の如く流をあらうて勾欄に修む遊年山

吉田祭 中西

六六代一條院永延元年十
十一月廿五日申今幸始
を告知
おかし礼おれよりて公家の御沙汰とて社法式二月
下子日土月中申日吉田祭藤中抄四月中子土月中
申裏書ふ吉田ふ永延元年これをくむ元山藤中
納言一承おれよりて改第吉田の春日中納言山藤の
建立 此はひき 此は月ありて八月も念
なり **駒牽** 廿七日 廿八日
あまつけれもこのころより

主上武徳殿の行幸王御下床子よ左の御監
御馬の養を執る馬の政度ふより御馬を引さる
白馬のよまの如く追信兵衛の村に南ふけりは府
騎射の文を養ふ左右の太政これを養國を追信兵衛
以下番長ゆより人東指を養む右追信兵衛後利拍と
養ふ推樂種方非駒形を養むこの駒牽は未月の駒
射の馬射手人ホを御監せしむる貞觀の以くは

土塔會 十音

拾列東聖殿四天王寺南大門の下土
塔塚のちく土塔の言ありやや神

④

午頭天皇といふは毎年四月十日大祭礼を行ふ今
他頗と云ふはたゞ大祭礼後より志うれも今より行ふ天

王寺の信堂司人催木出仕神法會を行ふ身には

法用仁王経法則舞

洛東三十三同堂蓮

花王院といふは凡

傳長壽院の辺、同所の他の中杜若をば製と云ふ凡

この所の天教毎年四月永日の

江風掃除浪

うり晴天を候と云ふは

相列樓の傍崖弁天といふ所ありは此の月一日

彼清実例と云ふ屋のうらひの社司ありは凡の記を

初り神糸の玉をとり除ゆと云ふ是天女深波をとり

く岩中の汚穢を掃ゆと云ふは掃除波といふ

松前渡

これ南紀は恒木の南人老老老交易の

向き氣流は波瀾やどやるや故に四月より六月まで

九月を限りは返國せしめてはを其と云ふを林と云

振夷松の昆布といふもの一枚ありは林をわきまの

松三三葉を昆布といふ石より生る雌夷のあなを

号するあり九千余里のゆ

寸比は赤いありは

梅天

以南京とも蜀中の梅あり四月ふありは是は月の梅

るをいふ熟梅天は黄梅天といふは略して梅天といふ

和清の天

五葉清和月東紀閑散官

涼言詩

又清いありは

煮酒

者酒といふは

よこの酒の氣味を失はざるは

よ京師をば酒を稱しこの日酒肆親味をさす

よを價をばさすは酒を飲むは

余花

若葉

四

結ひ糸

余花上 若菜の根 病葉に紅

赤くたりのとも又花 夏木立木草花 病葉に紅

木下園葉花 花相 卯の花 ○花うつ木 ○指根うま

○唐うら木 ○冬草うま ○花うつ木 ○指根うま 七山見草 藏玉

聖見草 藏玉 垣見草 藏玉 以上卯の花の

卯の花 ○今之草 万葉 卯の花は咲かざるをいふと云ふ物あり 卯のあつたをいふ卯の花をいふ

厚朴の花 ○今之草 万葉 卯の花は咲かざるをいふと云ふ物あり 卯のあつたをいふ卯の花をいふ

桐の花 柀類の花 花油 盧橘 山笠の花

櫻桐の花 繡練の花 白丁花 要花

○金橘子 ○紅毛菜 和名和太太非 和名鈔 木夫蓼 和名和太太非 和名鈔

藪椿 茨の花 覆盆子樹 つる草

牡丹木芍菜 花王 花相

夜白草 夜白草 廿日草 百良 富貴草 愛重

竊豊福 共一 万葉集 以上牡丹の長名あり 貝原老人云本朝上代牡丹なり

芍菜 えびす守り 和名 花相 花相

えびす草 和名 以上芍菜の長名あり 本朝の 馬蘭

○公相根次 ○山石利木 今之草

○公相根次 ○山石利木 今之草

修く農子を起し田をのどれらるる越谷

吾山云九法鳥皆三指只杜鵑の三四指ありもの樹こ

小宿まの四ハ二指まの五向ハ二指後よりハハの

田をの毛をのくまづく或ハハをを以死かこ

さこのの非く實よま

水直鳥

郭公鳴こ春

之山邊度水直不輸入我住濫野のむり郭公のく

りぬいぬのけりやまの世の積りくつ

つごぬんと野をりくつるのまを起れり

○摘鳥○時の鳥○まきま○細き○夜ま

○まきまこま○まきまこま杜鵑の鳴

みまきまこまのまきま不如帰

俱伎羅

舞沖うりの鏡よまのり田まの鏡

舞の蓋を以北まををりれり足を

以面を以蓋の蓋のやま虫杜鵑の

をり又謝絶の五雜組

老のうひま

鳥帽子魚

豆相の海邊鯉先まらんとまきま一か流れま

あり大式寸形鳥帽子ふ似く左右の紐のまき物

ありまのま理掛り光沢ありこれを鯉の毛

といふ漁者このおれ漂流まををりまのま

まの鯉のまををりこれを鯉といふま三日をま

まのまを獲るとま鳥帽子魚とま

まのまの魚康永貞和のまを敢く食り

まのまのまを延喜式に堅魚を載り

まのまのまの御もまのまのまの毒

まのまのまの延喜式に載りまの鯉の今

まのまのまの編まといふ摘考ア今ま

まのまの酒散のま

まのまのま

まのまのまのま

まのまのまのま

まのまのまのま

まのまのまのま

まのまのまのま

まのまのまのま

花乳蛾 又飛蝶 蚕の蛹 蚕薄蟬の子

枝の蛙 木の枝 茄子花 茄子 昼貞

翡翠 鳥 善夏物 みる夜 暑

涼む 汗衫 汗巾 日傘 青傘

○昔言 編 編み 新茶 古茶

切麦 冷麦 冷汁 煮冷 新麦

麩 麦粉 水麩 水麩 水麩水麩 水麩 水麩

水麩 五月雨の降 湖も自然と身 時 水麩

又一統 一統 鑊鉄の右行を大坂より大和 水

又一統 一統 鑊鉄の右行を大坂より大和 水

干麩 塩鳥絨 麩 洗ひ麩

飯 飯 の一袋を月夜といふ 六条 飯

魚梁 魚 津波 津波

目高 目高

蚊遣 蚊遣

金魚 金魚 蚊帳 蚊帳

蚊遣 蚊遣

蚊遣 蚊遣

禪師の向人如何しく慧性をゆん師の云たるといば
蟻蟻虫れ蚊子の腰よりありと景を依るが
傳燈錄

わふ見ぬも これ蟻蟻をいふ
とを能か未考 蚊母も
蚊母も 蚊をいふ

蚊 蚊をいふ
蚊子本 實り蚊を
蚊母 蚊を生む
蚊母 蚊を生む
蚊母 蚊を生む

蚊 蚊をいふ
蚊子本 實り蚊を
蚊母 蚊を生む
蚊母 蚊を生む
蚊母 蚊を生む

蛇 蛇をいふ
壁虎 壁虎をいふ
蛭 蛭をいふ
蚯蚓 蚯蚓をいふ
歌女 歌女をいふ

蛞蝓 蛞蝓をいふ
蛞蝓 蛞蝓をいふ
蝸牛 蝸牛をいふ
蝸牛 蝸牛をいふ

螢 螢をいふ
蝙蝠 蝙蝠をいふ
柘何 柘何をいふ
柘何 柘何をいふ

當これを依る 本朝説
蚊 蚊をいふ
蚊 蚊をいふ
蚊 蚊をいふ
蚊 蚊をいふ

川七艘とく 川七艘とく
川七艘とく 川七艘とく
川七艘とく 川七艘とく
川七艘とく 川七艘とく

とく上川の船を上品とて とく上川の船を上品とて
とく上川の船を上品とて とく上川の船を上品とて
とく上川の船を上品とて とく上川の船を上品とて
とく上川の船を上品とて とく上川の船を上品とて

人船一人 人船一人
人船一人 人船一人
人船一人 人船一人
人船一人 人船一人

燒十二 燒十二
燒十二 燒十二
燒十二 燒十二
燒十二 燒十二

を遊ふ を遊ふ
を遊ふ を遊ふ
を遊ふ を遊ふ
を遊ふ を遊ふ

その付ま その付ま
その付ま その付ま
その付ま その付ま
その付ま その付ま

きたる繩 きたる繩
きたる繩 きたる繩
きたる繩 きたる繩
きたる繩 きたる繩

通甲 通甲
通甲 通甲
通甲 通甲
通甲 通甲

方目 方目
方目 方目
方目 方目
方目 方目

夏断 夏断
夏断 夏断
夏断 夏断
夏断 夏断

安居を既に入るを待たせといひ已に終るを解分
 とつて七月十六日より十月十六日よるを自恣と
 して夏衣を二つに夏衣遊りの衣の作業を妨
 二つハ物の命を損ずといハ所為既非之故一世の徳を
 振南山抄親王要道 安居ハ道宣師云すトの四月
 十六日これを前安居とて十七日已去五月十二日
 を中安居とて八月十五日を後安居とて寛印抄親
 苑宗規云祝融候に在り矣帝方當を司之法
 王禁足の辰辰子護世の日七月十五日にありと始
 く早く散去せしを解分といひ又解制といハ西
 域記云十六日作を日とて謝肇淩云余近こ
 詩を作る者を見る入定搭挂を以堅これと結交
 とつてその義にあつて結分十六日を以始とす
 とのハ印度之法ハ中國ハ月晦を以一月とし天竺
 ハ月滿を以一月とし則中國の十六日
 ハ即チ印度の朔日なり云云五雜俎
 紫鯨 蓼 藜 馬齒莧
 根芋 菊葱

春葱のつくりの汁のや
 信これをかりとつて羹を煮る
 大和本草

蛇 蟹 蝦 魚 火虫
 海薺干 毛虫 蚰蜒
 木布

單物 內衣
 温室云保活之法七物
 其七を內衣とい和名

田加太比良論語注云明衣ハ布を以沐浴の衣
 とい和名鈔 今の夏月平復より所の本布を以て
 浴衣ハ元ト衣服の名にあつては誤事と也
 扇

團扇 六六のり
 扇を〇形に作る
 〇形に作る

五月

この月影人方に菰を挿む故に早菰月といふ今略して五月といふ

蕤賓 律

芒種 節

小滿の後十五日 斗酉ころ

夏至 中

芒種の後十六日 斗午上建より

仲夏

茂林 節

蔚林 全

鶉月 節

六月月節首

斗金月令

泉月 節

六月月節首

斗酉月令

斗酉月令

橘月 節

加天後の足插 朔

六月朔日旧例より

京兆の尹馬一匹を寄る

その外武家経ひの人も又假して請ひむその請ひの上伊太の氏人女も其の世人を乞ひて老孫を乞ひて又端キニ孫而の具の仕年世人を擇とる各儀をたす九馬の負せ足今日の時若く馬

帽子薄衣を忌と社司各持の外上坐を先二人毎に馬ふきあり馳近しくその速速を考へ執業を乞ひてこれを紀すむその後馬の速速四一けたり二人をしくあしむるを足掛といふなり所細荒ふ緒馬場本来樹ありその内上於膝負を交せしむ檢入の老薩を執業と執業これを記すは樹を傍負の本といふ場所下傍負の本の南上極あり是を出馬の本といふ又その次上極を記す三輪本と稱し弱人これ於て互上言を掲げると奉えおの人のまゝなり 四月 松本祭 朔 江列大は松本村あり神平野大の神ありと神体仁徳天皇の廟之類彼の平路を移しまねりとも本社いふ六七町南の山掘若といふより其を長年中今の所よりつと神樂一基あり今れ傍上精 葛葉浦を献 三月 葛葉浦の樂 大の神を並へあやめ

葛葉浦の樂 六府あり其樂を南敷の階の東西より四月朔の夜よりなる

五

寮所、凡草蒲をよく〔公事根源〕草蒲御雲の料木
 の梅の如く、供御人々、如川、納ひ即ち米士、つ
 てを、傍士、これを造る、の法、根草蒲を、つる、根、株
 一本、細本を、以、様と、毛、廻、小、扇、の、形、を、造、り、核、葉
 葉、草、蒲、を、以、蓋、ひ、布、士、〔拾芥〕
 林、示、裏、ふ、秋、び、ら、と、と、
 二、三、度、寮、これ、を、昔、尚、同、山、陰、國、小、野、の、左、六、の
 氏、烏、帽子、素、襖、を、造、り、これ、を、く、い、う、へ、と、後
 寮、小、野、を、領、知、と、と、
 早、丸、を、供、〔拾芥〕
 内、膳、司

早丸を供、〔拾芥〕
 内膳司

子、丸、を、供、せ、延、喜、式、内、膳、式、上、二、日、山、科、の、室、を、子、丸、一、捧
 を、進、る、美、実、の、う、ご、れ、の、花、根、を、取、ら、う、と、の
 拾、枝、取、り、四、日、と、い、い、猶、可、考、山、科、の、室、に、桓、武
 天皇、の、建、の、人、所、ん、又、幸、任、者、の、位、帝、の、御、願、ん
 たり、て、これ、を、ま、と、と、云、常、住
 寺、の、延、喜、式、七、々、寺、の、一、ち、り、
 端、午、〔拾芥〕
 年、と、と、と、通、
 猶、初、の、み、り、と、い、か、か、一、五、の、字、午、に、燃、火、湯、〔珊瑚鈎〕
 詩、話、宗、璟、請、て、あり、八、月、二、日、を、以、十、秋、の、帝、と、せ、ん、と

五、月、百、午、の、刻、を、天
 重、五、〔月令〕
 艾、虎、〔廣〕
 艾、人

蒲、人、天、師、を、画、
 艾、虎、の、艾、を、以、虎、の、形、を
 造、り、或、ハ、線、を、勢、し、
 小、虎、と、し、これ、を、艾、葉、に、つ、け、り、内、人、象、ひ、つ、く、〔新〕

楚、歲、時、記、二、月、二、日、皆、百、系、を、借、艾、を、採、り、今、を、造、り、
 戸、上、に、つ、け、り、以、毒、と、氣、を、借、り、〔全書〕午、日、草、蒲、を、造、り、
 人、或、ハ、葫、蘆、説、物、を、つ、り、〔并、ふ、り、と、と、と、〕邪、を、
 避、く、〔金門記〕端、午、に、艾、人、天、師、を、画、れ、以、これ、を、賣、り、
 又、泥、翔、の、天、師、を、作、り、艾、を、以、紅、須、と、蒜、を、卷、ま、
 と、し、上、に、お、ま、さ、く、
 儀、方、を、書、〔月令〕
 紙、上、後、方、の

儀、方、を、書、
 紙、上、後、方、の

字、を、書、き、これ、を、衣、の、口、方、に、粘、
 米、〔五雜俎〕
 角、黍、米、
 粽、
 九、子、粽、
 艾、人、粽、
 飾、り、粽、
 三、つ、ら、り、粽

五

○端午に菰を煮て筒粽を進る一名蒲葉菰の葉を以て菰葉栗葉を裏し厚を以て煮て熟す。其葉陰陽包を裏すといふ。教せざるの象

風土記九子粽は角黍を唐の時歳節端午に粽子の名も多し。秋割しころも角粽。錐粽。艾粽。筒粽。秤錘粽。或秤錘。或八百索粽。九子粽。粽あり

月令廣義唐の宮中糝團角黍をつくり小角弓を以これを射する中もこのを得。潜確類書屈原五月五日

汨羅に投じ楚人これを哀その日に至ること。竹の筒を以て葉を捲り水に投じこれをあふる

漢の建武中長沙の歐回白昏一人を以て自ら三回大まを稱。回上細く曰。おまをてまより但蛟竜

入を糲ててを苦む。今よりあふる棟の葉を以その上を塞ぎ五絲の糸を以これを縛る。この

二物蛟竜の畏る所と今の人粽をつくり絲糸及び棟の葉を葉を蒸す。送風。續齊諧記古人菰

葉の葉を以て糸をつる。まをてまより。尖角とる。菱角の葉ののの如。故に粽といひ角黍といふ

機倍。時珍云。近世多く糯米を用。今俗も五月五日節おとら。おとら。菰の葉を以てこれを縛る。この

ををつくり。に投じ。飽粽は糯米を用ひ。こを。餅とを。稲叶を包み外稲葉を以て

ひ定と散の中に入。餅とあり。稲葉を剥き。耐の黄白色を。餅の色の如。故に多く。餅の

をり。微香あり。まをて粽の類。市人道長といふ。まをて。故に道長粽と稱する。是も今

師の市上。この粽を用く。節送の如也。李朝食鑑。飾粽。多かり。粽。天後本云。いせおは。よる

粽云。ほむ。月。日。粽をい。く。は。ま。多。く。粽。ひ。く。を。つ。り。拵。送。十。八。の。朔。少。く。ま。り。粽。云。今。も。内。裏。ま

ふ。ま。の。糸。を。以。て。飾。る。粽。を。ま。を。て。粽。の。く。ま。り。は。蛇。に。似。せ。く。巻。これ。を。後。と。毒。虫。を。と。ら。せ。る。こと。を

菰と。菰。葉。或。は。巨。且。中。と。ひ。糸。或。は。の。云。粽。ち。り。と

節兜 けつり掛の樽 菰蒲刀

五

熾 苜蓿人形

昔人形五傳人元仁天皇

天應元年蒙友

の被船奉り早良親王をくこれを神の親王
 友友の社より移り如摩に附ふ二月の旬日忽ち神風
 吹く被船故ゆは是れ我れと勝の因縁なり
 今に於ては二月の旬日祀皆共善を用ふ民衆も
 又これに倣ふ友友の社の社山列他伊勢に金人親王の
 初は是れ弓矢の政所と称す蓋その以て其友友は
 親友い事とて國史よるを以て推考す○増渡舟
 又の巻は後深草院の事とをさそくおろしそそふ
 云一二月の旬日すくはるるの花菜玉をといろく
 ふ多くはゆのり魁のてものれまは是れ姑苜蓿人形
 苜蓿人形を以て飾る由るの意は和苜蓿人形も
 又因トは人形の力士の形を揮うと作れる多し
 ふくえ福のいふくは市中を愛あはさく其角
 が二月の旬日や争ひあはさく小人形をいふ粟白ゆり
 今に於ては辰人形町の外使りよき樹すく是を愛あは
 個體の流しすといふはさるる紙製の鯉の令も愛

ゆりくは又はの信端を餅を製す裏に縮を衣し糖の
 菜を以てそれを修めなすつくは餅との真角が附ふ
 縁化るるは度菜を
 苜蓿人形 活沢をといかり
 お合なとせりは是れ
 何れをといふくはつとふかひ程あはさく提原をさす
 がふんものといふ石集にゆりゆりゆりの序ふはあはさるる

苜蓿の種

聖武天皇天平十九年詔と曰ふ

いへることよ

苜蓿の葉

九月の旬日苜蓿は菰
畏ふの葉四脚草は而

思高は竹を進む者輔は下察以下にもは執せり人
 進 徒く即退を補番りくこれを養ふに延長草は其葉

蘭湯浴を苜蓿湯

有る蘭湯は活 芳
妙は活を 蘇は日蘭を

くくは湯を天載礼蘭は活蘭へ今に句は蘭花はあはさるる
 本草 件の日苜蓿湯は活 效は石苜蓿根を取酒ふは

飲とくは邪氣を棲す 三和
 苜蓿湯は 活 芳
 是蘭を以苜蓿湯は 活 芳
 佐端年

(五)

【全】以上は方々
の月々鏡 唐の天室中楊初より
水心鏡を進る昔月小

盤竜あり五月揚子江に於てこれを清く背竜
の異名後早とこれを初なる竹雨なり【異聞集】金錫

の世に一なり八月丙午の日午時鏡を陽燧とて十一
月壬子の日子時鏡を陰燧とて【神記】時珍高

臺派を引く云陽燧一と陽燧火を日入取陰燧一
名陰燧水を月入取蓋洞を以これを造るこれを

大水の鏡といふ○唐より以承皆揚列る鏡を首と
六月二日を以て揚子江の水を取てこれを清く鏡

【他】水清列るなり
列佳へ【五雜俎】
五月五日を茶日といひこの日一切茶葉を採る

世談曰昔端午百種茶を取て陸乾し燒灰を石炭よ
和【園】と煨研金瘡入付く血を止む大吹ふ付く又腋

臭及び瘰癧已破を瘡を本草【茶】の類とて四月の以
茶【茶】の類とて
【宗祇抄】
百草闘を 唐の中宗の時安永公主端
午は百草を採るなり【唐書】

そのおを新【地】とてこれを取て【又】化の
る【併】れんとをわそれの余を【劉】【註】

尤近れまを結ひまの日

【荒】【註】は日
【右】の荒【註】は日【右】の荒【註】は日
【左】の荒【註】は日【左】の荒【註】は日

【射】【事】【根】【元】【の】【日】【随】【方】【福】【け】
【志】【を】【お】【と】【と】【結】【ひ】【ま】【の】【日】
【後】【さ】【が】【ま】【の】【結】【ひ】【ま】【の】【日】

【況】【別】【あり】【き】【て】【ま】【ま】【ま】【ま】
【の】【馬】【場】【一】【条】【西】【洞】【院】【右】【邊】【の】【馬】【場】
【一】【条】【大】【會】【ま】

○鳥車 ○水馬 競渡ハ越王【句】
【競】【渡】

【起】【月】【今】【廣】【義】 八月廿の競渡ハ辰系を
【極】【と】【ま】【ま】【を】【以】【後】【遂】【に】【我】【れ】【と】【も】
【歳】【時】【記】【居】【系】

【あ】【の】【日】【を】【以】【旧】【羅】【死】【生】【人】【軀】【を】【以】【れ】
【競】【渡】【れ】【そ】【の】【遠】【倍】【之】【南】【方】
【其】【舟】【を】【流】【て】

【五】 輪【利】【あり】【む】【これ】【を】【飛】【鳥】【と】【し】
【又】【水】【車】【水】【馬】【と】【し】

平賀院中修修正五月八日未の朔より九日巳の朔に至
るまでこれを修修正と云ふ太平の神事といふ音節の
五符を必神饗ふは八幡列府奉養の日金銀の幣
をもち供まのへ金銀の幣海を語りて云々

上の事を
今宵祭 九日あり 山崎の園
今宵祭 今宵あり 宮於生家野

ふありあつて神午頭大皇皇法神記の云ふ一系院正曆五
年六月廿七日疫神を松園山小安置せしむ長保三年
五月九日疫神を安家野に遷せしむこの所より遷せし
るにこの天皇の告すなりてん前師の衆慶御美を
仍ふ云々午時神興三基相殿の官各縁所ふかま
る相殿の官一級一重を官といひてりてりてりてり
現存の書に依りてこの社を今の堂定中移し一重院
御堂勸請と堂定中社主神へもふかま移しと云々
神事の日録十二年あり詳を知らぬ所所ふあり
別當供より氏子お後へ神事小川通より遷せ
寺大官通より松園山 室祭 十日 松園山
の祭を云々云々云々

社ありあつて神上妙法月一倒来三月十二日
先祭の上加多氏の氏人五人播列下向より神の
を司りてりてりてり辰刻は家東東寺に巳の
刻の傍を掃く神を祀下出はと即ち修殿の度ふ
是脚鑰を後へ疫正社家氏を役は次小神主
祝 氏人あり 御戸を開く云々氏子奉饗鳥帽子
ふく唐戸の裏神事の左に云々云々御幣柳を
内陣ふ秋を次小神饗神油を供は云々神子
神事を云々云々吹堂の付の松を掃の事を云々
神主祝祝詞を申是より先固美記太田若宮の社
の御饗を云々云々神主祝内陣ふ入御饗を云々
云々内陣の法幣柳を云々云々祝御を云々神事
先神記若宮の後神主祝祝詞の拜殿の坐より云々
社人御幣柳を捧大座ふ催は次云々云々女十二
三日潔斎を神事ふ出内ふ男子の浴を云々云々
を判り男醫より金細の社神を云々云々三人
大銀二人あり七人下り髪髪人天冠を載云々云々
葵の水干を云々七人下り帯を掃掃の事云々

五

竹植る日

六月十三日を竹植る日と云ふ竹送日
と云ふこの日竹を栽れぬ必活晋書五

月十二是落生竹を栽れぬ多く後漢書一云是竹
醉日五雜俎竹竹の雌を以て根より七上一云は是日

もはを雌と云ふ竹譜陰と云ふ竹植る日の忌書と云ふ書

西社系

以下下等なる唐塚ふくむの傍
ふ友社ありと南宮持沢北ハ

酒井大明神例も六月廿三日神樂二基於り土
人本居神と云ふ山門の悦殿坊代友社の土を於

りふ友社神送の因縁ありを以て泉列の大字是
を学と云ふ

有念の日

是ハ村上天皇の御國
の事と云ふ 是ハ唐塚にあり

日と云ふや祭祭日あり云はれも改められ是
る事と云ふ何れハ俄ありありありの目と云ふ

住吉の御田

御田住吉の御田を住
を以て神を祀りて住吉ハ神乃皇居三尊を住

りハ瑞障の時長門の國より植女を住て大
曲辰業美の土を世に廣く云す云の事乳も住也云

里ぬこれよりて住吉今に早乙女をつとむと云ふ
棋陽群泉列場乳妻の妓女の内約もふ云の事云

年季子所も女三人来りてこれを植今日神田を
植て後ハ妓院の暇を知まとり人住吉の御田ハ古

き画もん云と紅澤の千早に似るを云す云東
き傳ふ市女を云て云く是云代の事云く

の事と云ふ今ハ只植る事を云す云也云

丹波國桑田郡あり云る神一座伊井並云 伊井

諾云天照大神を以て三坐と云社家記丹波國大桑の

社記傳云を云む云より云る云と云ハ云天皇考也也云

三月廿三日春と云ふ系傳と云ふの時社の小を云す云

云と云ふり御の根ふ云と云る云氣の害云と云云は
石を猫と云は九月廿三日を秋と云云と云云又云系傳
を云付付件の石を返し細と云云の事云云ハ云石を云す云

と神云也云伊井の事云云と云云又云高云と云云 御田扇
と云云る故ハ世傳其酒云と云云と云云

廿八日

(五)

伊勢山田大神宮の御田植今式云々大神宮の
 室希ふと神の修儀の庭有りこれを御田植と云
 これを以田を扇く風情をなす虫を生じし患
 ありとの産婦又この庭を末く相向ふ所の産婦
 これハ極く産婦とぞ是虫の障をまじりて
 御田植月廿八日と云も日宮く下旬に日えりて
 是を以當日祢宜教の由子羅子これを勤む神
 田の言念心とく信く天の志元といふ所の兼典
 宮嶋ふあり件の人け所ふり此子羅子早苗植
 るやねびをなす神人候を信く大神宮の由を
 かく祢永順をうけい苗を教ふく兼典長友の
 兼典祢宜の騎馬由子羅子の産樹をなす念心
 をまじりて居の所ふり兼典をなす兼典長友
 たり此大庭を掃く兼典の法入載む又一説ふ
 九中といふ所の土人おん女の怖と云り伊達深の帷を
 忌赤き禱をうけ鳥帽子を載さ思塗の掃を
 了早苗ふりて入る兼典内宮外宮とも同く是
 とも山田の名世々々との後兼典兼典内宮の

七本脊外宮ハ六本脊之稻を育つる馬の画額を
 約る人形の画或ハ毛鷲龜木を画くとの説を去友

虎が雨

六月廿八日多くる雨これを
 虎が雨の事といふ天孫の虎

朝何と云ふ
 といは女官我成と云別る傳書と云と云
 故く世俗今日自のぬ虎が渡るといふお列ふ神
 致の社あり勝名荒神といふ建久巳年五月廿八日
 の夜見才富士野御物の旅籠井々の屋敷に推
 多りて父の熊云云及成を討ち成成に討死し
 致ハ後ハ依と吉永浦子の間厚京といふ所と見守を
 神と云ふ秀余のり八幡と云ふ香子京の並びふ
 久次といふ所有りけ所ハ泉福寺といふ寺有りそこ
 兄弟の石塚あり成成を高崇院峯巖良雲士
 禪定門時致を鷹岳院士山良富大居士と号し
 虎ハ祐成討死の後尼と云り所の公羽を末内
 かく井々の屋敷のなとり祐成の室胡の法
 をとんといふ物と云ふ志州と云く

五
 兼典との三浦の依を末くは尾花兼典秋風吹

いふ者我物語 先づめて目を定て
卷の十二より 取勝講 東大 延喜園城

最祐有古の圃何ものをえらして定心流義 詳師
徳元などあり完勝王純を清涼教ふく清せらる

公事根連 永延皇帝 一条 寛弘六年五月十九名徳
を宮中に延く完勝王純を詳論せらるる日。立く

或と先代或はひ或は 賑給 これハ給しき
止む今より倒とある元亨秋書 氏ハ米陸々

とを給て京中の條里小治を考て檢非違仕
兼りこれを引く米治の勅文をとりもるる大

は陳よ是く是を定む欽明天皇の御宇より始
はる多官野のものふ給とて礼祀月令あるふや

公更根九東の季ハ是定寺小の右近馬場西の
ハ右近馬の馬 祇園の神輿洗 晦日 五月晦日

場西宮記 祇園の神輿洗 晦日 五月晦日
はふ諸老松の系を修く禍災を移くを某後と

の一夜ふ今て神輿洗あり凡其式神輿三基所謂
素盞鳥等大政 西ハ稻田姫井 東ハ竜妻 今即 大政

所今御敎の神輿三基ハ神輿屋を御座に地敷ふ
今ハお井の神輿三基ハ神輿屋より南門を如く

石の鳥居より松林をこき祇園町より目病の地敷
堂のふととて鴨川の邊に餘りていへ河水ふ神

輿を濯くこれを洗くこれを神輿洗といふ今その
系今もも旧まはるるを祇園を志くして後

再び祇園町より西樓門より二基の神輿とてこれ
并敷上妻重臣その儀奉四条芝居の役者千の

段ハ挑灯を張り外面ハ各姓名を記しとて是
を奉り祇園の町にも亦毎に高く挑灯を張る

又六月十四日おれ終く後神輿三基社願に在
を同十八日の夜二基の神輿の直く神輿屋より

見お井の神輿の今夜の式の如く九神輿三基
美衣の法師三人各つとてこれを修りて主室に

富士垢離 五月廿五日より六月二日はおて
難を考り富士権現を逆拜して是富士系給ふ
おんまとの入る間男女何人をもそのを宿を宿

(五)

蝶の初声 常音丈 反舌言

月令 礼記の疏反 惟 和名加太良 和名

抄今八隻 辻が花 大追物秘傳 射幸時衣束記

衣の名を 羅 着竹 冷年竹

夕玉草 河玉草 苗 早苗

若苗 早女 田歌 田植

玉苗 田植 早女 早苗 田歌 田植

田植 早女 早苗 田歌 田植

田植 早女 早苗 田歌 田植

田植 早女 早苗 田歌 田植

田植 早女 早苗 田歌 田植

田植 早女 早苗 田歌 田植

田植 早女 早苗 田歌 田植

田植 早女 早苗 田歌 田植

田植 早女 早苗 田歌 田植

田植 早女 早苗 田歌 田植

田植 早女 早苗 田歌 田植

田植 早女 早苗 田歌 田植

田植 早女 早苗 田歌 田植

(五)

夫本ニガフク花

栗の花 合歡花 天南星 施瓦星

棟の花 棟の標 雲尺系 神の花

板插の花 板插の標 板插の標

板插の標 板插の標 板插の標

板插の標 板插の標 板插の標

板插の標 板插の標 板插の標

板插の標 板插の標 板插の標

板插の標 板插の標 板插の標

板插の標 板插の標 板插の標

板插の標 板插の標 板插の標

板插の標 板插の標 板插の標

板插の標 板插の標 板插の標

板插の標 板插の標 板插の標

板插の標 板插の標 板插の標

板插の標 板插の標 板插の標

板插の標 板插の標 板插の標

板插の標 板插の標 板插の標

板插の標 板插の標 板插の標

板插の標 板插の標 板插の標

五月脚躑

梅列の各二の各を桂皮の
身九三重斗遠列秋葉山の柿

乾川支辺も又三田里
御湯社能花ふま

南天の花

汁を取く木下漬
鳥飯うこれを分

「の健ちると牛筋の如故半筋と名づく陳藏器説
五月小白花のく寒食ふきの葉をまき水漬く
飯を添ふる青うと老あり是青粒飯石飢飯の法

本草今増も今邦の信赤強飯をわやくふ必
この本の葉を飯上りまこれ時政の説上李うく此
秋和ニまこの本名がごとととも佐列土列の山よ名

二天余周廻一尺ニ三寸をむおま枕よ遠く信これを耶
郭の枕とり遠列一の實満山南天の〇信信南天
ハ凶道を消滅とさうとて故女子鏡の北月よは

茶を挿し是漢の女子且國の具るを以て後遠
小漢の背月多南天を猪
と唐の漢ふ茶花を用ふ

五の時美
忍冬花
金銀

忍冬草
未央柳
その葉柳
小銀く柳

花のり
忍冬花
金銀

忍冬草
忍冬花
金銀

忍冬草
忍冬花
金銀

忍冬草
忍冬花
金銀

忍冬草
忍冬花
金銀

忍冬草
忍冬花
金銀

忍冬草
忍冬花
金銀

忍冬草
忍冬花
金銀

忍冬草
忍冬花
金銀

忍冬草
忍冬花
金銀

忍冬草
忍冬花
金銀

忍冬草
忍冬花
金銀

忍冬草
忍冬花
金銀

忍冬草
忍冬花
金銀

大和梅子
唐梅
後梅子

大和梅子
唐梅
後梅子

大和梅子
唐梅
後梅子

大和梅子
唐梅
後梅子

大和梅子
唐梅
後梅子

大和梅子
唐梅
後梅子

大和梅子
唐梅
後梅子

大和梅子
唐梅
後梅子

大和梅子
唐梅
後梅子

大和梅子
唐梅
後梅子

大和梅子
唐梅
後梅子

大和梅子
唐梅
後梅子

大和梅子
唐梅
後梅子

大和梅子
唐梅
後梅子

大和梅子
唐梅
後梅子

大和梅子
唐梅
後梅子

大和梅子
唐梅
後梅子

大和梅子
唐梅
後梅子

大和梅子
唐梅
後梅子

大和梅子
唐梅
後梅子

大和梅子
唐梅
後梅子

大和梅子
唐梅
後梅子

名ふらりく説
をうけりてん

日下草 三陽の草

三

よとた系

以上花子の目録に云れども
按よめお雅言名を用ふ

百合

姫百合 鬼百合

花の大小
ようてまぐ 徒百合
元深

一様様入れく又挿よめは夜更合と名づけて珠ま可
其の間にまをこれをはり人纏まをせりて僅に

和 黒百合

紐まにりて元
奥列も出

車百合

葉對
生

車の輪の如く下脚日光山和
本家の養老吳三あり

透百合

奥列
うり物

鹿の子百合 情多百合

二月百合を授け法
雜糞より成り

い百合は是粒物化成して及く雜糞
より理かべく

徐錯歲時廣記

玉簪 小玉簪

紫陽花 四葉の花

唐の招賢寺に山花より成り
うり氣香へ懐藤をさす

この名を知らず白米を以て過る標をさす長名
を此紫陽としく誦詔陽秋 白乐天詩ハ文集小出

夏及菊

六月上旬と八月下旬の間に
花を挿す

朝菊

苗を挿す長をさすは元葉細く葉を挿して蔓
延すも如く是は白く光沢あり毎葉ぬまんて

葉を挿す形の花は葉同く花はひとつ
縦の葉の如く朝と開て夕に萎む

未摘花

その花紅くして葉も赤く
名あり種公圖經

何よりこれの向方を略してこれのなり
又云この花をゆくと未摘り開き次第に葉は
くまるともはなれた未摘花といふ

見は未摘の花の君鼻のまの
赤きれ

下毛の花

漢名未詳小
本之葉叢生

朧月子に萌生し四月花を開く
紅く

天和本草拾遺

ガク

草の属よりその葉水菖蒲小似し花のくくれを
花菖蒲といふ○梁の武帝の母張氏菖蒲を
て花をいせと光彩照灼とくせしむる所といふ
人等も之を曰菖蒲聞てその當ふ富貴なるべしと因て
是を香むこの月武

帝を生り梁書 紫羅襪花 本草綱目
白菖といふ信是を泥菖蒲といふ一穂ハ溪澗下生根
瘦赤蒂稍密なるもの溪澗へ信とれを水菖蒲
といふ大和本草又花史を引く葉は細花を花阿や

花を三 麝を陸奥の花且見といふ只つと
つと花の中は女の衣おちつとけり陸奥のつと
いふ老入公雲花つととい花咲く蔭をいふ菖蒲

花つとといふ菖蒲のつと頭注中於東方奥州のつと
時彼國菖蒲のつとつと六月廿日教く水草を菖蒲とい
菖蒲と接ふ今水草を菖蒲東齊陸筆水もつと
を花つと用ひされ菖蒲を信ふ水阿むといふのつと

その葉却て花のつとに似しをめく花つとと
いふ六月廿日陸奥のつとつとを菖蒲と信ず抄ふも
つとつとつと國も菖蒲のつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

菖蒲のつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

水雉 夜啼く早等、水邊ふわり、晨を驚
るなり水雉といふ、和三水雉のうぐいすを

水鳥の巢 浮巢
車鴨、輕鴨、芦鴨、この

鴨の子 輕鳥 三つのもれに三月ふり

乃ま或るもの、深草古ふあ、の中よめる、雁ふ
あ、鴨の子、御筆、和名、ゆい鴨、押野、名曰、鳥、

家名曰、教鳥、音、揚、氏、漢、結抄、云、鳥、
あ、の、い、い、い、い、鴨、も、教、も、や、る、い、い、い、い、

黒鴨 毎年五月の辰南、於春日の
あ、の、い、い、い、い、鴨、も、教、も、や、る、い、い、い、い、

照射 毎、年、五、月、の、辰、南、於、春、日、の、
あ、の、い、い、い、い、鴨、も、教、も、や、る、い、い、い、い、

躑血 大串、○、獸、狩、○、轟、文、女、時、家、負、
あ、の、い、い、い、い、鴨、も、教、も、や、る、い、い、い、い、

五月間 黒むえ 白むえ 柳、取、中、
あ、の、い、い、い、い、鴨、も、教、も、や、る、い、い、い、い、

魚菜 石、を、握、き、
あ、の、い、い、い、い、鴨、も、教、も、や、る、い、い、い、い、

蕙 鶉の巢 水、を、障、
あ、の、い、い、い、い、鴨、も、教、も、や、る、い、い、い、い、

五月間 黒むえ 白むえ 柳、取、中、
あ、の、い、い、い、い、鴨、も、教、も、や、る、い、い、い、い、

魚菜 石、を、握、き、
あ、の、い、い、い、い、鴨、も、教、も、や、る、い、い、い、い、

蕙 鶉の巢 水、を、障、
あ、の、い、い、い、い、鴨、も、教、も、や、る、い、い、い、い、

五月間 黒むえ 白むえ 柳、取、中、
あ、の、い、い、い、い、鴨、も、教、も、や、る、い、い、い、い、

魚菜 石、を、握、き、
あ、の、い、い、い、い、鴨、も、教、も、や、る、い、い、い、い、

蕙 鶉の巢 水、を、障、
あ、の、い、い、い、い、鴨、も、教、も、や、る、い、い、い、い、

湖邊へ同村に富士出現を故に近江の國の軍士を以て
吾國の平にさしこれよりと近江の人旅勤王及び化
邦の事をもつて又近江の國の土砂を獲りて山上
小倉の山に近江の人を准りて平安をゆるすべし
延暦廿四年の秋に我を河間大神と号す
平城天皇大同元年社を建てるをまもる本比六
日如事縁起河間の社に駿河國富士郡にあり神社
啓蒙或は富士権記と号す大山祇の女木花刑耶
姫あり
一宮記 江戸河間系 朝日 五色綱 河
の社に法系研利場の後街にあり法草寺塔中修善
院兼草寺これを法草の宮と稱す又駒込にも
河間の社あり富光山瑞泉院を寺より恙言ふに
寺ハナリ これを駒込の富士と稱す當社永平に
あり寛永中今の地に移りて伊豆代昔山の上は
本一寺ありて六月廿二日の下より山必出あり
より富士河間を勧請すと旧比に今加判侯の藩系
中入りの山形富士に似たりと云ふて前の

善院を富士善院と云ふけりてをいかにも本末を目及
る田馬場にも同社ありてをいかにも後河原あり
田を新富士と云ふ近平なる田馬場の傍に小山を築き
き河間を勧請せ故ふこの名あり毎年六月廿日未時
那業をこのうち法草駒込を勧請最久一今日
甚業を龍蛇をつくり是を法草を巻つけく龍蛇
もの多し系統の人必是を要ふと云ふと云ふ
の細小菓を食むる外河原を高く築き多く
忌火の御飯 内膳司よりまもるを大床の御飯
よりくは忌火と火を思ひて神を祀るもの阿
不淨の火をうらふことと云ふ也八月次神令食の
御神子を今日より始りて云々公事根根
の御飯小書に六月土月土月朔日早且内膳司供之
江次第民間又月晦日六月終日赤土を以て官電の外
面を粧ひ為衣を以てその上を禊是は林本殿の法是ハ
の遠く秋之四月官電よりて神の小御飯を今朔旦
ふつふと是を食ふと恙をわは流疫痢瘧を治すと云

一夜酒

こさけ 夜神天皇十九年冬十月戊戌朔吉野宮に幸て時を因

栖人朝玉を因て酒を以て天皇に献じ日本紀

六月朔日不起りて七月晦日よる月を供せり日本紀

喜式 ひと夜酒を今日つれ八明日に供せり由是こさ

つりこさこさりも又さりては今日あさひ

年中のいふ代をいふは月ひのりてはこさこさり

六月會

傳教書 ○これハ傳教大師の意見ニ
長條云 勅使也山の養ひ

根源 六月を弘仁十四年始とせり建曆三年勅

御齊會不催せりゆり宣命使持在中并經高

山家説 秋の宸澄弘仁十三年六月四日勅云五十六頁

觀八年秋八月勅云傳教大師と云はるの云式教山

をみ滿義あり金滿院づり年番あり十月天皇

云も用 御躰の御卜 十日 御躰の内ト六月十

日あり 二月十日日友妻の

るづり江次第神祇官の友人のり本官より

これをいふ上今日より内侍に就て奉圖をこれ

と上の玉辭は後とあんとをよの妻も養あり

白鳳四年ふりあつり公事根元 神祇官中臣ト

勅命を奉り六月十月朔日これをトス九月ト

十日これを奉り 月次祭 これハ六月十日二夜

を弘仁式 社へ御幣を奉り

と云弘仁年中 神今食 六月十日中和院神今

食 公事根元 食 神今食 神今食

ハ中和院より移り伊勢太神を勅請

江次第 神今食 年ふり伊勢太神を勅請

され天子より神饌を供せり公事根元

ハ末を謂ふは神今食と 解齋粥

いふもの古是を神今式と云日本紀

六月十日午後曉十月中却後曉 江次第 神今食

の次の朝解齋の御躰をいふ御坐の太座より

神一脚をとり候を赤き土思ふは赤布の汁

を添り三食食う御着を立公事根元 神今食

この神今食は神今食と云解齋の 鳥越祭九日

を奏し神樂弘上ノ後、大正五年正月十日、社僧江洲浩井
 殿のちりきり、高家富の命をえらりて、次人を定む日記子
 云、神龜三年丙子、天照皇太神宮祭主廣見ノ神勅に
 く、岩倉山太神宮寺とて、額を授けり、のち、此所の親
 音を、宝巖寺とて、同年五月十五日、聖武天皇、橘諸
 兄房前大臣、兩勅使を以、蓮花會を修せり、あつて、
 て、より、つと、今、ふ、至り、と、祭、祀、能、を、毎、年、改、人、命、を、定、め、
 神のまを、まら、む、性、古、の、近、に、國、中、の、差、定、せ、し、の、為、
 山門ノ屬、く、由、然、の、美、事、を、去、れ、其、江、一、國、の、所、に、
 終、ふ、く、ば、の、た、り、六月、朔、日、天、女、の、新、像、を、改、め、の、を、
 神、幸、し、奉、る、こ、れ、を、任、屋、ノ、安、置、し、十、四、日、を、と、神、旅、
 祓、け、け、日、修、ふ、お、ひ、く、舞、舞、の、見、四、人、を、か、た、り、音、
 新、造、の、天、女、の、像、を、神、樂、ノ、後、置、幸、り、儀、供、奉、し、
 神、樂、を、も、傍、の、一、の、花、表、に、立、て、供、物、を、奉、給、の、の、終、
 り、て、は、れ、り、終、つ、後、御、神、樂、弘、を、鳥、船、と、い、ふ、金、廻、り、を、
 扱、ふ、由、り、あ、つ、て、留、を、鼓、を、敲、く、大、船、二、艘、を、舳、り、た、行、
 ふ、五、色、の、幣、を、立、幕、を、張、り、既、人、夫、如、供、奉、管、弦、弘、
 教、固、船、客、弘、木、十、被、備、列、ね、く、は、後、り、あり、と、これを

蓮花をとりし神の法を多し蓮花を用ふ故に名を
 つくと、又三月三日、ん、終、を、修、を、信、し、これを、
 と、い、別、記、あり、
 生鳥妙覺院登翁記

津嶋祭

午前天皇の
 祭尾張

國海郡郡門間の庄、是、の、里、あり、或、記、云、欽、明、天
 皇元年、これを、出、す、あ、か、神、を、り、西、海、の、對、馬、ノ、降、
 て、後、尾、張、の、郡、部、も、移、り、仍、も、その、旧、地、の、名、を、奉、
 り、
 拍、鼓、の、後、居、表、の、地、に、後、更、し、初、を、今、の、地、に、
 移、す、○、當、社、其、ま、お、ひ、の、神、傳、は、落、座、の、後、民、の、
 目、を、暗、く、し、を、暗、く、し、の、ひ、避、暑、の、為、と、く、實、を、奉、
 り、舟、一、ノ、繪、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
 一、成、の、舞、曲、の、音、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
 この樂の二成を車樂舞津嶋留と云ひ、
 世、ノ、車、樂、の、後、其、屋、瓦、大、隅、と、い、ふ、もの、を、十、堂、の、武、士、
 計、を、以、討、と、り、起、り、と、り、起、り、と、り、起、り、と、り、起、り、と、り、起、り、
 と、い、ふ、も、社、説、を、用、い、六、月、二、日、試、樂、
 あり、八、日、町、毎、の、車、屋、り、と、り、細、歩、十、三、日、紅、お、い、く

晴の試樂あり十四日の宵祭十六日の朝祭とを里
 儀寺帯いと云車樂船上の挑灯をさく三百六十箇
 八二歳の日教入象りま枝の挑灯十二箇八月の教入
 言欄四方の灯籠三十箇八月の教入賣祭をさく
 奇観とく又翌日未映のあふもあつこの町市腰車を
 先と津橋の車樂車車そのま後指輪くつ村先
 後を福某と六村ハ米坐壇下。後場。今市場。下持
 是なり社比並ふ大河あり岐州のまうくこの中
 敷町より大行ふ大船をさく教入の挑灯を約
 この穀水上映く
 恰も星の如しとぞ
芦の神樂
 昔仕儀小指い
 と毎年芦の
 神樂といつてあり國中の疫疾變災未をトト
 社家注進記 津橋の社記神樂式より其の神樂の
 入えを社説し御昔の神よりあり毎年六月十五日
 神主これを引く極く神祕をさくれどもそのま
 入るんとまら六月枝の金風より午辰天王の體法より
 正とありおふ記より日記より神意一人其のまよふ
 治まるとそのまをさくる長吉法より馬付の居某の

窟を栖とくまはる神樂
 よりて若の神樂と稱する也

熱田宮

神社尾張
 玉手魚市

郡江崎松坊修十寛のつとま正殿五座才天照太神才二
 素蓋蓋鳥才三日本武才四官實媛命 日本武才五建
 稻種命 官實の兄
 神躰草薙の宝剣之文熱田七社と六六官八劍官高藏
 官大福田宮日割宮氷上宮源大夫官是といふ撰社
 末社二百餘座と當社八皇十二代景行天皇の御宇
 法座其後天智の沖時故と云皇都小移一奉
 一十九年と評して天武天皇朱暦元年と云ひ當國
 小遷遷しと云り其初例聖勅使下向とて女勢と身
 と云へ棟高は休あり中教度とまら正月十日始
 の杯も大福田の神作て後新大文八劍と云ふ大福田と終
 び社の君稲穂と云る故小五穀豊登と云る神意と云人
 十二人の中子一人笛入膳入を橋山崎と稱する。同曾
 歩射の法十五日歩射の法廿二日西宮の歩射云。二月初
 己午未日御祭。同月初未日辨御田神社の依儀
 日鳥喰の神事と云る鳥喰と云るは神の依儀と云

中門に入り 上野河を渡り竹橋より神田橋邊倉
 河邊を過ぎ本町二丁目へ本石町三丁目小徳馬町大
 徳馬町を越え龜巻町へ渡り傘持大炊賣權左衛門
 引山甲曹の法師あり氏子小徳馬町の諸侯も
 國の武士を知り長柄槍をまつり群行はせ
 町奉行堂 山王別當の 別院あり の境内より神饌を御
 早りく八町堀日本橋助を中橋より中より
 本山へ
 選幸 氷川祭 十五日 江戸赤坂あり風去祀
 の庄小六天神 主田三十五東三毛田天武天
 皇三年甲戌始と神祭を仍し神戸巫戸あり
 神大見見 少彦名命國韓神の小宮と号す
 古呂故の園の名を以たり當國氷川の社多
 これ武蔵國の一宮なるなるを以所々に
 ざりといふ又孝昭天皇三年戊辰冬より
 鳥子奇稲田此咩 風土記 氷川と号す
 孝昭鳥子稲田の川と号す大蛇を退治し
 以三神を氷川と号す 社説赤坂の玉神本居神と

祭礼六月十五日(隔年)
 懺練物本を物と振祭
 江戸金龍山淺草寺に於て今月十五日
 ありその形古き画の中へえとふは古雅
 る躍りそのさし物筆を敷き竹籠を以これ
 を拍を今日系譜多し又當月晦日當山小放り
 花講を
 かつり 嘉定錢 嘉定喰
 修を

淺草寺がなごら

御湯敷祀ふ女房詞よりといふ
 通室を中野後りしとを致し六月十六日の嘉定仁
 明天皇二年六月十六日豊後國より白電を献じ以吉
 兆とこれを経ふ是より嘉祥の儀ありとい
 子更本統より此の儀の流る嘉定通室といれ
 勝といふをせんを考へ致しとのみや 世語
 第一流續日本紀を引くと文武天皇大正元年六
 月壬子朔丁巳十六日王親及び侍臣を率く西高殿小
 室一御裳膳并小帛を賜ふ各差す
 定の美これを燈籠と申といふも世語同是なり

既而更奉致意... 仁昭
 帝美和の代御代の...
 往(御)候を... 六月十日...
 とく考へ... 六月十日...
 元ありけり... 四季物語...
 正心... 室新殿大樹...
 何れも食物を買ひ...
 嘉定... 寧宗の...
 年あり其年毎...
 印... 代小定...
 の... 昇...
 日... 食...
 例... 日...
 羅... 今日...
 謂... 食...
 福あり故...
 紹... 故... 武家...

諸品を... 各白紙...
 を以これを... 群臣...
 以求... 世...
 十六枚... 合...
 紙... 布...
 上... 包...
 毎... 中...
 を切... 月...
 而... 定...
 され... 袖...
 番... 相國寺...
 寺... 職...
 風... 鏡...
 附... 定...
 得宗... 延喜...
 伊勢... 十六日...
 十七日... 神宮...
 人物... 神... 陣列...

六

膳を供ト世朝膳を供一御宜内余身養を養
十七日太神宮小寺真美も度去不因一外宮十音

内宮十七日これを仍る京師より御神納の神室を神主
神殿へ捧る御宮殿の御戸を開くこれを拜とんとて法
則を奉る今日如永田原の

博多祭十音博田原の
の神八統

前國郡阿那あり祭る神中殿へ稱稱田原余或記天
若子余幼請八天平宮字元年右殿へ祇園年改云王

幼請八天慶六年左殿八天照皇太神宮幼請年月祥
るる重作の三神相殿正月八日正大船若を修せ六月十五日

祇園を十一月二卯の日新嘗會今六月十五日祭祀を
修し永亨四年六月十五日これを修ふ造

山を基その大寺系師祇園寺の山に倍とて併の山跡
上張小組上階上人を居る志引一基を引もの九

千人をり本佛人小遣をよせと階上たとその甲由に
皆姓名を書のりてがもあ領との家長なる者もと

志渡寺祭

志渡寺祭
志渡寺祭

志渡寺祭
志渡寺祭

志渡寺祭
志渡寺祭

志渡寺祭
志渡寺祭

志渡寺祭
志渡寺祭

志渡寺祭
志渡寺祭

志渡寺祭
志渡寺祭

志渡寺祭
志渡寺祭

志渡寺祭
志渡寺祭

瘦鬼と抄一法へ信達し寺傍の外下車より者より○
 招提寺温禪和尚室龜中居よりトト雄の大蛇有
 温禪持念一蛇忽ち非を視一蛇を謂く曰く去山水之水
 を蛇と云一蛇蛇言く去て俄かく清泉涌出を今のみ
 開物并見縁起竹四の貝の蓮花今といふ是中
 奥用山率延和尚咒法を以蛇を斬るの遂えりて
 去北の遠思念之夜の護法八用山温禪和尚の一蛇
 を形の護法神と云
 送云ふりといふ寺説
 御手院詣 紅の納涼
 山國寺玄那乳或ハ只剛不他下鴨の社これを乳の言
 とり蓋比名ふりて是を祿は社の東ふれ洗川あり
 水清冷なりと経れ流る是後を修む七歳の一ト下鴨の
 社月川倉の社赤住吉の社東の川也不流と六月後を
 修む十九日夕晦日に至りて諸人糸緒と水に修む
 暑を避納涼の抱をなを林間傍りに茶店を儲け
 酒食及び和菓の飾籠のう身襲の桃焼去來丸林
 檜木の果を賣る或ハ竹串を以小園を賣る
 貫き焼く是を賣る是を以小園を賣る
 上難儀の御枝

杉羽東生那及高津の宮ありは社生玉の中ありはや
 神比賣吉富の神本名ハ下坂媛命 大國主の身味菟高
 の妻 多利と始り天の磐石より下降りて其の
 祠を磐石大神と号し仁徳帝都をくらに修む
 の宮と号し其の當社神傳給夫と當社を仁徳天皇
 の宮と号し其の社司本津川小出と號を志す
 坐摩比御枝 世目 榜列西成郡の社坐摩比大神
 改陣の八時神武天皇古例より脚部破の
 炭原見石の邊より其の神坐安法の方斎りかへり
 りり神功皇后十年庚子難波大仁の年田原の修小
 法左 修見在今の出後不 なる所生井神福井神廻長
 井神作の三津井神小宮神名波比御神阿彌使神
 二坐をかへ五坐と云のより 例は六月廿三日夏越
 の大枝あり神靈御旅所不渡御を法坐の御跡八行
 所と南石町あり今猶法座あり信これを神功皇后
 の御息石といふは邊をまづく渡辺大仁の者といふ
 今の天神橋一名渡邊橋といふ天仁の山を以て修む

伊孫の浦名所丹後辨といふ所の所を事す又辨
 ともとて抑天の橋立より佐の浦中なる長剣の長
 十六町半入彦清といふ郷を事す社の近所樹木茂り
 くる所を濃松浦と稱し二町をり丹波あり是を
 九世姫といふ世ふ切方の文殊といふ是内外の渡子の日
 の傍に代の渡るといふ所の橋立の別名ありといふ
 新灯の松の浦の傍の所遠ありといふは遠言詩古
 哥多し挿入いふ丹後能谷山成相寺にあり所の
 橋立の國説不見たり

天満の御枝

廿五日 栴列西 成天

満ありなる所丹波の所人皇六十二代村上天皇の依
 坐る天曆年中この地いふ天満也
 その地は天満光赫たる人これを怪しむ帝都ふ事
 美久間を逐帝即日勅使を下りて時小神籠りて云
 便速の捕を慕ひ給事すといふ事と云ふ是を
 由を考ふは倭の世官をこの地不法なる揚陽群
 六月廿五日先述の車乘水陸に依り給く神連
 丹後所出仕還川舟中教文の桃灯群集といふは

住吉の御枝

同大智 毎年六月晦日 小の月廿九日

栴列住吉の社住吉の社を修せ先神連を昇の重住
 吉の叔父に宿し潮不居の御歌をうへ今朝神連を
 基官系不奇也社住吉の神と神をうへ今朝
 ちく後社司六七十員騎馬あり候奉り候ふ神
 樂囃の御旅不ふり是より先社住吉七重車輪
 を忌茶磨いを裁き騎馬あり神小先より
 囃不居り昂ら神を旅不居り又祝詞を讀み
 夜不入り神樂住吉不還幸囃の市民くはに炬を忌
 ト神樂を送り又大坂の五人同ト炬を忌ト
 忌を忌ト入送送相連りく自是の如くこれを火智
 といふはこの日大和國神如寺山の土を取て神供ふ
 これを囃の宿院神子或は名紙の後又は荒和の
 といふ

賀茂水之月能

廿月晦日の夜 賀茂の神子

り乃枝を修せ諸人各芽の端を脱出せしは
 條を以本偶人を作りこれを川水不極是今日六月能

民間といふも晦日を用ひ江戸佃田嶋の位々の社まほ稲荷の社今日諸人群集を位吉の社人々佃田沖より枝をひき去傍の社の墨田川より枝を徹して俗とれを墨田川の御社といふの外江戸の神社その社人の例おちせ形代拝お木を宮戸川へ捨つて神まきの余の市民より舟おちて西園橋を宮戸川へ所置船中祝詞を編一執り後件の形代を依り捨つて今日約涼の形代多くおつ

夏神樂 川社 何社のことかはくかやれを
 ともひくまん是は夏神樂
 のこと神樂の事をいふなりとて俄きこととておちまされ
 とておち河の傍き川邊中くまき河の傍お神代本を
 まそれを根おちく竹竹を根おまきとこれお神供と
 依りこれを川社といふ奥義抄後於枝はの境き川社と
 ともくち一尺や量りおちく人のくまき水の上お社を
 いふく夏ハ神樂まき河川邊を勢沖云河社お
 ちく夏神樂の事者よりけ道の先まきくくみく
 とてお古まきをくくくく一貫て集き四 夏まきく

川社まの事よりいふは夏ハ神樂まきくくみく
 又云夏四年三月より河川邊の御風の事なるなり
 竹水の上いふく川やあかきまきく枝あきく
 初のお新古今集神祇の社まき地在の時屏風お夏
 くらくのそちをまきけりけりとして入れり何代はたるん
 してまきこの屏風の事まき夏神樂とまきたるなりこれ
 ららゆれが夏まきくの縁神樂の縁の事とも川社ま
 とてお古まきく月枝の御の事とて右三首ともお枝まの御
 神樂の事お歳より四事より国月の事ともまきまきつて
 く類をもて神樂お入れたるもまきの事ともまきわの事
 ちおふりね河社まきくくくくく神樂の忠は集きお
 屏風お六月お夏神樂まきくおまき

ともよのんまきくく竹水おいふく神の神おまき
 これもまきく枝をまきく神まきくくく河社まき地在ま
 月大後程御ふよりくく神地祇まきまきまきまき
 河の傍まきく船織津地舞てお神あきく者まきく河ま
 まらきく枝あきくくくくくくくくくくくくくく
 河まきく河社まきくくくくくくくくくくくくくく

引張ひ神供ると傳く祝詞をうけて後別小神事と
も志すふや云々匡匡居々六月の節か

改中侍資成朝臣の次の平合小僧成たのか
六月雨の雲間もなきを河社いふ衣を待たはらん

風雅集無彩の成実 河社の小娘とて六月の衣
はきてふひもやうんころりくを待たふらうあ

公のこも晦日のせわれりて一の夜やうい使の目
はらう

小蠅の神

たふの夏の蠅のらひれ
さあけあしを神のゆを

河社
馬琴の梅ざうに万葉小蠅如神を小蠅鳴ともま
鳴の如くふく同小蠅を神とふ小蠅の如くあしを神のちり

夏後夕後御橋川
以上前信
雄略の夜をねきそよみの凡を枝のひく後具とての進
りもをそととてあわらふをそととての進め

鎮火祭

上秋氏の入大をらして言城の西隅
かくわらうことあの大を防みよ

この祭の同秘制
多くなり筆根源
ゆふととと迎の終りゆふや鬼魅の他方より
踏へんらんれ路とに供物を傷くあふらう

道郷食祭
これの瘦神の祭
あり毎年必

鎮火祭
多くなり筆根源

道郷食祭
これの瘦神の祭

鎮火祭
多くなり筆根源

道郷食祭
これの瘦神の祭

鎮火祭
多くなり筆根源

道郷食祭
これの瘦神の祭

鎮火祭
多くなり筆根源

道郷食祭
これの瘦神の祭

天

終りに一筆をす
雷鳴の壺 雷鳴の壺 龍象方金

疑華舎北不在加美奈利乃豆保西群壺を以倍の之を
雷鳴壺とす 和名鈔 六月雷鳴の陣大戸三度以上 秋節

七月一日不雨度立 大将以下弓箭を帯し御前の縁
廂願の間不候左兵衛南庭不立雷鳴の御中を
布鳴盛ることを陣をかりし取敢不き生外傳の
督佐殿不候よく弓箭を帯し公麻中不候して

陣を
大山糸 今月廿八日より江戸及び近國の傍
俣相別大山石を大技現へ糸迄を

これを初山といふ又七月盆中不登心豆を盆山と
り各前不動の供ふと吹離を後一切のことに
悔しや登心豆の如くせしれ山中安穩をねごと
といふ或は十人或は廿人社を孫の新造の浴衣を二松
小豆と蓋津衣のちるるべし又志取の者不木の末
カを推考しこれを納むその本刀不必ず大教成徳の
四个字を書きこれを 温風 黄雀風

温風 六月
黄雀風 東南の
雀風とす 五雜俎

鷹習と堂 雛のまぐさ
ことさらん

府内草堂とす 月
源暑暑言冬

三伏 三旬 夏至の赤三の庚を初伏と一四の庚を
中伏と一立秋の後初の庚を末伏とす

天祝の節 會要不云宋の長宗祥
府四年詔と云月言を

土用 夏の土用を云ふこととすことハ又
竹の次方を享時其の土用と

虫拂 一年の中間ありて中央未の養へむの相生の法
を以て火と金の間を死火生土金相生とす

雷涼 風薫る青嵐 一説六月土用
中の空王の雲

雀風 雀風とす 五雜俎

鷹習 鷹習と堂 雛のまぐさ
ことさらん

府内草堂 府内草堂とす 月
源暑暑言冬

三伏 三旬 夏至の赤三の庚を初伏と一四の庚を
中伏と一立秋の後初の庚を末伏とす

天祝の節 會要不云宋の長宗祥
府四年詔と云月言を

あく青くたる天氣小東風のそよぐをまき嵐といふ
うらみさる音嵐は夏木立の梢の緑を鳴らすも

雲の峯 夏雲を寄 火天 日盛

日やけ 納涼 弘遊 凡納涼遊日者の比
江戸直圓橋を以

天下第一と云川幅九百三十間水清く流るやま

東小流波青く懸夏西富士白く立て右品川永代

嵐左の侍乳隅田川四橋 西国大橋
永代橋 長く横り雨路 長
雨路

度く通を花紅をさく五月廿八日をえどやと一七月晦

を限るとも教千の茶店茶屋をわね教百の花紅

能をも合も或は系竹管弦の曲声妙ふうふあわれ

音のゆり拍をとり酒堂の紅火燈を織く花天

うらみさる音嵐は夏木立の梢の緑を鳴らすも

山可なり 陸は元町度小流勾欄の櫛高く川風ふ翻り高

人の燈籠火氣天小飲 目ふ見るものなる涼しく耳

小圃くものあはれと奥あり今その十が 掛香

一を和くとを和未見の君ふれそさる

薰衣香 白ひ袋 先柱の清妙香需散雀乱

ともあへど風流ふまきり 泉 泉殿 池殿 溜

ぬの今別ふれを裁ま 水 清水橋 清水堰

○清水の心 井戸智 さら井 井の心

○漢もも 戸の水をえほま

水うけ食 通信志 宵 川村 鯖魚

雲雀雁鳥 越鶴 銘六月毛をくく旧を

雀のふもを易の時のぬぶと速うらぬ故に

雀をを放りとこれを捕らむとこれを雲雀雀と

雀のふもを易の時のぬぶと速うらぬ故に

雀のふもを易の時のぬぶと速うらぬ故に

雀のふもを易の時のぬぶと速うらぬ故に

雀のふもを易の時のぬぶと速うらぬ故に

雀のふもを易の時のぬぶと速うらぬ故に

雀のふもを易の時のぬぶと速うらぬ故に

雀のふもを易の時のぬぶと速うらぬ故に

雀のふもを易の時のぬぶと速うらぬ故に

雀のふもを易の時のぬぶと速うらぬ故に

カマ
カマ
カマ

六

殘蠅

秋より冬を過候迄空月不仕
秋の虫は多くあり由多し

竹の皮割

百日紅

猿轡といふ花は二種あり一は花
は木を接滑といふ花を百日紅といふ

射于蓮

花は実も
もたは甚

池水草

其傳

水鏡系

つれづれ草

以上蓮の
吳名

苧姑

河骨

麒麟草 赤草

夕良

靱の花干瓢

新干瓢

風蘭

凌霄の花 虎尾草

釣鐘草

眼皮 路考草 葛の花

楮の花

紙まき草

楮は三月花なりより時移の候より
五れは六月の年れより由多し

抄小楮とてよりをまきとてより紙金幣小海て
垂よとくくく珠は夏海ハ身氣ありて下品之楮
も粒軟ありて大和本草小楮あり一はよりい
又山ごといふその本も草も楮といふも秋小楮と
小サ一四月小葉を生下枝よくまき尺ふさぎ山に
あり花は秋小楮く其夏末に咲くその皮を剥
く楮の如く一葉は紙上楮
と昔ハ山楮を圓ひりよ

青田田草取

其より秋よりして一度田
をまき一番まき友州といふ

蘭を切る 菅茹 藍茹 麻

麻茹

白麻 苧 苧 麻

麻茹をまき一玉苧
を秋とて楮麻ハ白麻

楮の花の咲く時極く白き名ともまき麻の花の楮
は似たりともりやまき一楮麻といふはけりて楮の
花は似たりをいふまき一菅茹といふは楮に似
麻の切らぬ葉といふをまき一楮の咲くは極く白

のちのち一考の形麻

蘇もややくまをよま

夏切の糸

麻のとり

信ふまつて

ともいふ白糸

苧の苧の筆

青番椒

甘き香の糸をい

紅豆

菘豆 蒜の根 青鬼燈

苧

世系種 海藻 乾

乾

利ホの如くもの

甜此

濃列本泉取てま村毛甜

青峰名洛の東寺駿列府中羽列七浦振列氷野泉列

塙の神の松を名をゆり

鳴子村連年

金此 銀此

梅列免東取田思村小路

黄金の如三列より銀此

主目此

東陵此

即平へ故秦の東陵候より秦七ひく希衣

家名大くて此を長安城の東に解此入る

よりしなり 續蒙求 支那の此 東門青門の名

あり皆即平

此田不履を納此

文選吉樂府

履本下不正冠これ嫌疑

いむらら

此をい

をいふ下実

水此

是西此の増山井

韓此

阿古陀此 自梳天

和列田村乃の

白此

林檎 夏桃 奈良漬 製

納豆 製衣 醬油 製 醬

夏切茶

六月の味を洛の茶人新茶を壺にす

壺の蓋の目張を切て茶をかきと壺の口を切て

又冬口を開くの壺は盛夏の同所の山根は涼の

此より故に夏中用す所の茶
先づつこれを受内を檢
麻地酒 豊後國の製

又之南都法華酒を後の麻地酒又朝生酒とも
書或の土よりともいふ毛吹草麻地酒は夏後或ハ

肥後國より出その法糯米糲を以て合せ製
しく冬月寒水を用くこれを磯し土中不埋

草芽の熟を必くこれを毛皮ひき春をを製
竹皮土用不むく土中よりこれを包む

既一熟をうけて土より
水飯洗ひ飯
のそあり 酒方書

乾飯 精々奥列仙甚乃い
葛水 破糖水

冷水膏 マ戸の傷除を捕荷を
振蒜水

夏日市井の筒小瓶を以てこれ柄板及び余花末を
添性還を暑小苦心全をくけいこれを飲

しむれを振蒜水といふ蓋 正字の石花菜
主人惻隱のそありふ瀬 心太 豫列智島の

産を上とと又勝列明皇の茶店をとりんたを
送南くその製執巻を以これををくられ又他列

あつさ あつさ
沖繪 鯨 せご 綉 簞 竹をく織

竹奴 岩 竹婦人 抱籠 脚馬 三三

詩 うきんよかに竹のむををいふ
涼臺 涼き玉

夏 小児の歌
百夏 瘡

雲 糸瓜の花 海月取 熱痛瘡

夏深き 夏の別 夏に後

夏を隔る 夏の限 夏をこく

六

夏を^よ延ぶ 夏の果 秋を^と降る

秋を^とさ 秋を^と行 東ぬ秋

富士の農男 富士守く四五月の^いんく^まの^いね

あつゝが宝永山の方^くま^の人^の形^の云
とくまの消^の跡とありこれを農男と称^をすこの残

雪^の入^りある年もあり又^を毛^をざるとしあり田子の土人^云

農^のを^とと^とえ^る年^ハ五^穀熟^ス
田子の田植^をも^れ不^二の^一農男 葦笠隠居

農男^ハ四月^のも^まあ^る一^の条^追加^{なる}を

以^て志^をく^くと^す也

駒ヶ山^の嶽^雪消^馬 信州^之四五月^ノ比^を消^テ

山^ノ才^は信^州ニ^シテ^ハ形^アラ^ハル^之
コ^レハ^サレ^シ生^ケル^大敷^ノ介^{ヨリ}工^多を^消ル^之才^ノ農

俳諧歳時記夏之部 畢

